
デュスノミア

ツキトユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デユスノミア

【Nコード】

N9893K

【作者名】

ツキトユキ

【あらすじ】

ある日、宮廷魔術師を目指す少女ラシエルは、誤って魔族の青年を召喚してしまう。

彼は、ラシエルが自分の魂の片割れ“魂約者”だと言い始めて……人でありながら魔族の魂約者を持って生まれた少女は、伝説の通りに混沌と争いを招くのか？

連載というよりシリーズ形式で、いきなり話の内容が飛んだり、話の内容がなかなか進まないこともあります。

登場人物紹介（前書き）

読む前の参考にどうぞ

登場人物紹介

【ラシエル】 16歳

宮廷魔術師に憧れる魔術師見習いの少女

やる気はあるのだが、空回り気味

デウスノミア（混沌と争いを招く者）だとラルフに告げられるが否定する

【ラルフ・クラウディウス】 見た目年齢20代前半

ラシエルが召喚した魔族の男

強力な魔力を持つが無気力で、何かを手に入れたり何かをしようという欲求があまりない

【ハインリヒ・リード】 見た目は20歳後半

ラルフの部下

神経質で物事によっては病的なほど気にする

【クラウス・リード】 見た目は20代前半

ラルフの部下でハインリヒの弟

ネガティブで無害そうだが邪魔なものを排除する際は容赦ない

【アマーリエ・リベリウス】 17歳

ラシエルの幼馴染

貴族の令嬢だが、それらしくない面が多い

【アルマ】 18歳

ラシエルの幼馴染でアマーリエの兄

魂約者が神族だったため無理やり聖騎士になるはめになった

【緋耀】見た目は10代後半
絶滅寸前の紅角族（魔族）の少年
訳ありで冷酷な態度を取ることもあるが、好意を持っている相手には親切

【アレウス・イノ】30代後半
ハルモニア軍の総帥
デユスノミアに並々ならぬ関心があり、ラシエルに近づいてくる

【???】見た目は40代
追い込まれたラシエルの呼び声に応えた魔族の男
本人はラシエルと契約を交わしたというが……

魂の片割れは下僕希望

「なるほど、これなら納得できるな。デユスノミアだったのか……で、上か下かどちらか希望があるか？ 一応聞いてやってもいい」

目の前の青年が問題発言をしてから数分後、自室のベッドの上で少女は頭を抱えながらも現状を受け入れようとしていた。ベッドの側では、青年が椅子に優雅に座って少女を見つめている。

少女の名はラシエル、宮廷魔術師を志す魔法使い見習いだ。傍らの青年は、つい先ほどラシエルが誤って召喚してしまった魔族だった。

魔族は、闘争と破壊を好む魔法に長けた種族である。長命だが繁殖力は低く、数は人の十分の一にも満たない。人との仲は、数年前までは良好だったが、どうも統率者が交代したことで関係が悪化するかもしれないという微妙な状況らしい。そんな時に、部屋に魔族がいるというのはラシエルにとっては、都合が悪いことだった。しかも、あの問題発言がある。

”デユスノミア”

それは、混沌と争いを招く者として伝承や歴史上に何度が登場する。

「デユスノミアって私のことじゃないよね？」

「お前のことだ。他に誰がいる？」

俺はラルフ・クラウディウス。

ところで、どちらが良いんだ？ 特に希望がないようなら、俺は下がいいんだが……お前も下がいいなら」

「ちよつ、ストップ、それどういう意味なの？」

ごめんなさい。気のせいじゃなければ、少しあやしく聞こえるのだけど……」

ラルフは、上下に何やらこだわりがあるようだったが、何の話なのかは一言も言っていない。ラシエルに分かるのは、彼女とラルフの二人に関係あることらしい、ということだけだ。

「どうもお前は俺の魂の片割れ”魂約者”らしい」

”魂約者”

互いに影響を与え合い、良くも悪くも惹かれあい、強い感情を呼び起こす魂の片割れ。時に愛情を抱き、憎悪を向ける……まるで仕組まれたかのように一生を通して深く関わることを運命付けられた相手。となれば、当然、就職や婚姻において、魂約者の存在や魂約者との関係は影響してくる。魂約者が有力者だった場合は温恵に与れる一方で、本人がどんなに魅力的でも、能力がどれだけ高くても、魂約者が厄介な存在だった場合は障害になり得るのだ。例えば、敵国の皇族が魂約者だったなら、国を追い出されることだってあり得る。

魔族が魂約者のデウスノミアとなると、宮廷魔術師になるどころか、国外追放される可能性すらあるのではないか？ 最悪の場合は、危険人物として処刑されるのでは……

ラシエルは、いきなり突きつけられた事実到现在に今までのない身の危険を感じ始めていた。しかし、そんなラシエルを気遣うことなく、ラルフは続けてさらに彼女の頭を悩ませるようなことを言い始めた。「魔族は、魂約者とは主従関係になるのが常だ。

どちらが主になって下僕になるのかは、双方にとって重要な問題だろう？」

ああ、それとも婚姻がいいのか？ それもありだが、お前は俺の好みじゃないな……」

「結婚なんて私だって嫌よ!!」

私の宮廷魔術師になるという夢をどうしてくれるのよ!？」

魂約者に対する魔族の決まりなど彼女の知ったことではない。ラ

ルフの女性の好みもどうでもいい。召喚してしまったのは自分だということ。頭端に追いやってしまったラシエルは、とりあえずルフに怒りの矛先を向けた。

自分と違う種族が魂約者だったのは、ルフも同じである。なのに、彼はそのことをさほど問題視していないようだ。それが、ラシエルにとっては腹立たしかった。

「魂約者は俺が選んだわけではないから、どうにもできない。

諦めて、俺の主になれ。宮廷魔術師は無理かもしれないが、お前が立派な魔術師になれるよう力を貸してやってもいい」

「協力してくれなくていいから、帰ってくれないかな……」

こうして、下僕希望の変な魔族ルフと落ちこぼれ魔術師ラシエルの奇妙な関係が始まった。

変なのはお互い様

ラシエルが宮廷魔術師を目指していると言えば、彼女を知る人の九割が「やめておけ」というぐらい彼女は素質がなかった。宮廷魔術師とは、王族に雇用されて国のために働く優秀な魔術師のことである。ラシエルは魔法を使えないわけではないし、薬品や薬草の知識もあり頭が悪いわけでもない。ただ、魔力の量が少ない上に絶望的に運が悪かった。

彼女は、それは魂の片割れが自分の分の魔力と運を奪っていったからではないかと思っただけがあった。幸か不幸か、今まではむなしい言い訳だったそれが今では現実のものとしてラシエル目の前にある。魔族のラルフは、召喚魔術の暴走でも起きなければラシエルには召喚できるはずがないぐらい高い魔力を持つ魔族だった。

ラシエルは、主従関係を結び下僕になりたいというラルフと、半ば強制的に一緒に住むことになってしまった。彼女の暮らす部屋は一人暮らしには少し余裕がある広さだったが二人で住むには少し狭い。初対面の人間と同居も嫌だが、その上魔族となると人間相手では起きない問題も生じる。例えば、ラシエルの目の前に出された謎の物体がそれに当てはまるだろう。

「どうした？ 飲まないのか？」

「……それ、飲み物なの？」

「もちろんだ。お茶が飲みたいと言ったのはお前なのに、何が不満なんだ？」

訝しそうな表情をしてラルフはティーカップに口をつける。中には、紫色のドロドロの液体が入っている。ラシエルが飲み物なのか確認したのも無理はない。

「私は紅茶が飲みたいって言ったんだけど」

「何？ それはまたお前は意外と……いや、デウスノミアならあり得るか」

「はい。これが紅茶よ」

ぶつぶつ何かを呟きだしたラルフを無視してラシエルは紅茶を淹れていた。ティーカップからは、人間からすれば良い香りが漂っている。そう人間からすれば。

「なんだこれは。妙な臭いのする飲み物だな……」

我々のいう紅茶とは、紅角族という赤い角を有する種族の角をだな」
「ストップ！ もういい、聞きたくない！」

紅角族とえば、紅色の鮮やかな角を持つ魔族の一種で、角がある以外は人とそう変わらない姿をしている。絶滅危惧種でもあるので、魔族に詳しくない者でも知っているほど有名な種族だ。

「そうか。紅角族の角は、魔力増強にも効果があるから、人間の魔術師も昔は求めたものだが、今は違うのか」

絶滅に瀕しているのは他でもない、紅色の角を狙う魔族や人に狩られたからだ。美しく、飲めば魔力が強くなるというのが狙われる理由だった。彼らは角を失うと死んでしまう。少し削ったぐらいなら体調を崩すぐらいで済むが、彼らを狙う連中は容赦なく角を根元から切り取って奪った。

「紅角族も魔族よね。よくそんなの飲もうと思うわね」

「魔族であることが、飲むのを躊躇するほどの理由になるのか？

飲む理由がある者にとってはどうでもいいことだろう。俺には必要ないモノだが」

「そりゃあ、強いあんたには必要ないでしょうね」

嫌味ともとれる言葉だが、ラルフにはそんなつもりはないようだ。一方、強くなりたいラシエルだったが、彼女も紅角族の角には興味がなかった。魔族の一部を体内に入れることに抵抗があったし、角は闇で高額取引されている。とても魔術師見習いのラシエルが手を

出せるような代物ではない。

そして、アイテムに頼って強くなったのでは、宮廷魔術師にならないような気がしていた。夢見がちな人間にありがちだが、彼女の中で宮廷魔術師は美化されていた。実際は、全ての宮廷魔術師が正当な手段でその地位を手に入れたわけではなかったし、魔力を強化する薬やタリスマンの類が大好きな者もいる。

「お前はまだ宮廷魔術師になるつもりなのか？」

ラルフの質問は、ラシエルには聞きなれたものだった。

「もちろんよ。あんたが魂約者だということを私はまだ認めてないし！」

「それも不可解なんだ。」

お前、俺が魔族だということは一目見て気づいただろう？」

呆れ顔だったラルフの顔は今や疲れたようなものになっている。彼は普段からやる気のない表情をしているが、ラシエルと会話しているといつもうんざりしたような顔になる。それでも会話を続けようとするのは、気にはかけているからだろう。少なくとも彼はラシエルを魂約者だと認めているのだから当然かもしれない。

「だって、ぱつと見たら分かるじゃない」

「普通は……俺のように見た目が人とそう大差ない場合は、魔族と人間の区別なんてそう誰にでもつくものじゃない。」

逆に魂約者の存在にはどんなに鈍い奴でも気づく」
ラシエルは困惑している様子だが、ラルフのいうことはもつとものだ。ラルフはやや大柄だが人間でもいる範囲の体の大きさをしているし、角や尻尾が生えているわけでもない。肩下まである金髪に紫色の目をした彼は恐ろしいほどの美貌を持っているが十分人間に見える。

魂約者に関して彼の言うことは正しかった。会えば「ああ、この人が魂の片割れなのだ」と、漠然とではなく“はつきり”と分か

るものなのだ。

「まあ、どうでもいいか。お前は俺の魂約者で間違いないし、俺は下僕でお前が主だというのは決定事項だしな」

「最初は、どちらが良いか聞いてたじゃないの……」

ラルフは、下僕になりたいと言っているのに、なぜか妙に偉そうだ。人間社会以上の弱肉強食の社会で生きてきている彼にとっては、自分より弱いラシエルを敬う理由はない。それなのにラシエルを主にしようというのだから、何か思惑があるのだろう。

「なんだ、俺の下僕になりたいのか。変な奴だな」

「違うわよ。そもそも、変だなんてあんたには言われたくない！」

彼女の中でラルフは初対面の相手に下僕になりたいと言い出した変人というか変態である。自分も同類だと思われたのでは堪らないと必死で否定するのも仕方ないだろう。そんな魂約者に対し、ラルフは綺麗な笑顔で酷いセリフをはいた。

「安心しろ。お前みたいな役に立ちそうにない下僕はいらない」

「私もあんたみたいな魂約者はいらない」

彼らの似たようなやり取りはラシエルが諦める日まで続きそうだった。

下僕の部下現る

ラシエルがラルフと暮らし始めて一週間ほどたったある日、滅多に他人が訪れない彼女の部屋の扉をノックするものがいた。

「ハインか……去れ」

ラシエルが魔術の練習中で手が離せなかったため、代わりに入口に立ったラルフは扉を開けることもなく相手を追い返そうとした。自然とラシエルの手が止まり視線は扉の方へ向かう。普通の客人なら部屋の主である彼女が焦るところだが、相手がラルフの知り合いとなるとそうでもない。なぜなら、彼の知人だということは魔族である可能性が高いからだ。

ここで相手が引き下がったなら問題はなかった。しかし、魔族となると人間の常識は通じない。彼らは、あっさり扉をすり抜けて室内に姿を現した。

そう、客人は一人ではなく二人の青年だった。ラシエルが警戒したとおり、どちらも魔族である。ただし、二人はラルフ同様に人と魔族を見分けるすべを持たない者なら気付かないような容姿をしていた。

「顔を見る前からそれですか？ あんまりではないですか」

黒髪の青年が無表情で眼鏡を押し上げながら先に口を開く。

それに、青い髪の青年が沈んだ声でぼそぼそと言葉を紡いだ。

「ハイン、ラルフ様はいつもこんな感じだったと思うよ。僕らの意思なんてないも同然なのさ。」

おまけに僕なんて名前も呼ばれていないんだよ」

「あなたは黙っていないさい」

ハインと呼ばれた男は神経質そうに眉をひそめた。二人はどことなく似たような雰囲気をもっているが性格はまったく違うようである。

「ハインもそこら辺はラルフ様と似てるよね」

男はラルフの冷たい態度にも臆することなくラルフに詰め寄っていく。彼は主であったラルフが急に姿を消したことと怒り、弁解を求めているらしい。

ラシエルは、ラルフにまくし立てるように質問攻めにしては玉碎している男を見つめて茫然としていた。

「何あれ？ 私は無視ですか……」

「ごめんね。ハインは、ラルフ様以外見えていないんだ。

僕らはラルフ様にお仕えしていたんだよ。

僕はクラウス・リードで、あちらは兄のハインリヒ。君は？」

兄のハインリヒが怒りを顕わに大声を張り上げているのとは対照的に、弟のクラウスは穏やかな口調でのんびりとラシエルに話しかけた。あまりに素直に謝罪の言葉を口にされたことも手伝ってラシエルもつい普通に対応してしまう。

「ラシエルです」

「クラウス……何、自己紹介なんかしてるんですか。人間相手に」「重要だよ。だって、ラルフ様が一緒に暮らしていた女の子だよ？とてもラルフ様の大切な人には見えないけれど、単に趣味が悪くなっただけかもしれないじゃないか」

兄の失言をフォローしようとしているようで、弟の言うことも失礼だった。どちらも軽視していることに変わりはない。

しかし、魔族が人間を嫌うのは、仕方がないとも言える。二つの種族がこの世に誕生して以来ずっと、両者の仲は悪かったからだ。

魔族は戦いを好むので、人間と戦うこと自体は楽しんでいっている。いい。とはいえ、当然ながら負けることは不名誉なことである。彼らは強い魔力を保有するという長所を持っていたが、その反面仲間意識が薄かったり気まぐれだったり欠点も多くある。力では自分たちより弱いはずの人間に大敗することも多々あった。

数で対抗しようとする人間を彼らは蔑んでいたし、譲歩するとい

うつことを嫌悪する彼らが、価値観が異なる人間と仲良くなるのは不可能に近いことだった。簡単に言ってしまうえば、魔族は軽く見ていた気に食わない人間にプライドを傷つけられたので嫌っているのである。

やっとラシエルの存在を気にする気になったハインリヒに、彼女との関係を探ねられたラルフは簡素に答える。彼は、すでにハインリヒの話聞くことに飽きてきていた。

「魂約者だ」

「それは……おめでとうございます」

魂約者は、本人同士にしか分からない。魂約者を重要視する魔族にとつて、主の魂約者も意味ある存在。それなのにハインリヒが、ラシエルのことを気に留めなかったのは彼女がラルフの魂約者だとは思いつきもなかったからだ。魔族と人間が魂約者同士になるのは、非常に珍しいことなのである。

「デウスノミアなんて本当にいたんだね。じゃあ、これから混沌の時代が来るのかな」

クラウスは、これからのことを考えて笑みをもらす。大人しそうに見えても、彼も立派な魔族。混沌の時代を想像するだけでも楽しいのだろう。

「不吉なこと言わないで下さい。私は、彼が魂約者だって認めたくはないです」

デウスノミアが大きな戦争の引き金になってきたのは、多くの歴史書に記されている。ただ、デウスノミアが魂約者を目の前にしていながら認識できないほど鈍いとはどこにも書かれていなかった。

「貴女、愚鈍にもほどがありますよ。魂約者が分からないなんて。

この愚弟すら、生まれてすぐに私が魂約者だと気づいたというのに……」

「凄いな。鈍さもここまでくると賞賛に値するんじゃないかな」

「魂約者で俺の主でもある」

「なんですって？ ラルフ様、こんな人間の小娘を主にするのは考え直した方がよろしいかと思いますが」

「俺が決めたことだ。誰にも文句は言わせない」

ラルフもラシエルの鈍さに関しては何部下二人に同意したいところである。だが、早く話を切り上げたいという思いの方が強かった。それにラシエルは一応自分の主である。

魔族では、魂約者間で後々問題が起きないように主従関係になるのが常である。彼らは争いを好むが、相手が魂約者となれば話は別だった。魂約者は、魔族にとって欠けると不都合が生じる存在であるためだ。

「ハイン、良いんじゃないかな。」

ラルフ様、魔族の上に立つのは面倒くさいっていつも言ってたもんね。僕はなんとなくわかる気がするなあ」

「はあ……分かりました。ですが、去るわけにはいきません。」

私たちの主は今でも貴方なのですから」

クラウスのように納得したわけではないようだったが、ハインリヒも渋々ラシエルがラルフの主であることを認めた。ラルフが他人の異見を素直に受け入れないことを分かっていたからだ。

「勝手にすればいい」

ラルフはラルフで、二人を無理やり追い返そうとはしなかった。

何故なら、追い返しても無駄だと分かっていたからだ。結局、ラルフもリード兄弟も自分の好きなようにしか行動する気はないのである。

「良くないわよ。この部屋に四人も住めるわけないでしょうが」

「別にここに住む必要はないでしょう。近くに住居を用意すれば良いことです」

「魔族なのに大丈夫なの？」

これまたラシエルも自分が良ければそれで良いというところがあった。それは周囲の心配をするほどの余裕が現状でないのも大きな理由である。自分に被害及ばなければ魔族が同じ街に住んでいようと問題視する気はなかった。彼女が反対したところで、彼らとの間にある圧倒的な力の差はどうしようもない。そもそも二人を追いだせるぐらいなら、ラルフもとつくに部屋の外に放り出していただろう。

「うん。街の入口についてからは歩いてきたんだけど、誰も僕らが魔族だつて気付かなかつたよ。」

「僕つてやつぱり魔族らしくないのかな……」
「では、また後日、改めて挨拶に伺います。それでは御前を失礼致します」

後ろで何やら暗い空気を漂わせ始めたクラウドを引きずるようにハインリヒは部屋を出て行った。

ラシエルは、傍らで平然としている男を見てため息をつく。下僕希望の俺様の次は、神経質でプライドが高そうな兄とネガティブなのに腹黒天然の弟という兄弟の登場である。魔術師は神を信仰することを禁じられているが、もう変な魔族が来ませんように！、と思わず神様に祈ってしまうのだった。

危険人物の仲間入り？

ラシエルは魔術系の学校に通っているが、滅多に学校へ行くことはない。その学校は毎日講義があるわけではなかったし、能力の低い者は受けることができる講義が殆どないからだ。ラシエルが学校に行くのは、一カ月から三カ月に一度ある試験と二週間に一度あるかないかの講義の時だけだった。

そんなラシエルの一日は自室での魔術の修行に始まり修行に終わる。ところが、今日はいつもと違う内容だった。召喚魔術の訓練である。

「俺の存在がなくてもお前の夢を叶えるのは難しいと思うぞ。

そもそも……魔術系の学校に通っているというから魔術科だと思ったら、召喚科だって言うじゃないか。

夢そのものが本気ではなく冗談なのは、と疑ってしまいそうになるのだが」

「試験に遅れそうになって慌ててたら、召喚科の試験会場にいつちやったのよ……」

「……よく試験に受かったな」

召喚魔術は魔術の一種だが、普通の魔術師は習得していない。大抵、魔術師と召喚術師は別物として扱われるもの。魔術師を目指すなら、無理に召喚魔術を使えるようになる必要はないのである。魔術の基本ができていないラシエルが、なぜわざわざ召喚魔術を学んでいるのかラルフが疑問に思うのは当然だった。

ただ、彼女が召喚魔術を学んでいたおかげでラルフは魂約者と出会えたわけなので、そこは感謝してもいた。でなければ、一生出会わなかったかもしれない。ラシエルは健康だったが、やっтерることには無茶苦茶で危険なことも多い。ラルフと会う前に亡くなっていた可能性が高い。

魂約者は一人しか生まれてこない。亡くなれば代わりが生まれて

くるといふものではないのだ。ラルフを召喚してしまったのだった。偶々だった。あの時召喚してしまったのが友好的な相手でなかったらラシエルは命を落としていてもなんら不思議はない。ラルフだって、召喚したラシエルが魂約者ではなく、自分が不機嫌な時だったら殺していたかもしれない。彼は、ラシエルが思っている以上に危険な思考の持ち主だった。いくらやる気がなくても魔族なのである。

「これは今夜の食材か？」

ラルフは、足もとに近づいてきた生き物をひよいと摘みあげながら呟いた。掴まれたそれは彼の手の中でもがいて苦しそうにしている。

「見て分かりなさいよ。どこからどう見てもサラマンダーでしょ」

「種族名はそうかもしれないが、これは赤い普通のトカゲと大差ないだろう」

彼がそう言うのも無理もない。手の平に乗るようなサイズのサラマンダーだったからだ。怒って火を吹いているようだが、あまりに火力が弱くてマッチの火にも満たないほどの大きさだ。ラルフにとっては痛くも痒くもない攻撃である。

「私が召喚したサラマンダーには違いないでしょう」

ラシエルは、ラルフの手の中でぐったりとしてきていたサラマンダーを取り上げた。ラシエルが自分で召喚したのは確かだったが、とても試験に役立ちそうにないそれにラルフは顔をしかめる。今回の試験内容は、熊ほどの大きさのゴーレムを倒すことだったはずである。火の攻撃はただでさえ効きづらい相手だ。これでは攻撃する前に踏まれて終わりそうだ。

「お前と話していると頭痛がしてくる。……分かった。試験の時は俺を呼べ。」

面倒だが、無害そうな弱い魔族を演じてやる。それならお前が呼び出して使役しても、問題ないだろう。

現存する召喚術師の中にだって魔族を呼び出す奴らはいるからな」
「あのね、いくら弱くてもいきなり魔族なんて召喚するわけには」
人間と魔族の仲が悪いとはいえ、魔族を召喚することが禁じられているわけではない。ラルフが言うように、魔族を召喚して使役する召喚術師も実在する。ただ、魔族を召喚して目立ってしまうのは、今までひっそりと過ごしてきたラシエルとしては遠慮したいことだった。

「では聞くが、お前はそいつを召喚して、今回の試験をクリアできると本気で思っているのか？」

今回の実技試験で失敗するとラシエルには後がない。先日の筆記試験で彼女にしては珍しく悲惨な点数を取ってしまったからだ。今までは筆記試験の点数でなんとか試験を乗り切ってきたのだ。

ふとラシエルは、手の平に載せているサラマンダーに視線を向ける。サラマンダーは、ラシエルに友好的なよう手で手の上で大人しく彼女の方を見つめていた。そのつぶらな瞳を観たラシエルはラルフの案を採用することにした。

「……あなたを呼ぶことにする」

「そうしておけ」

試験では、今までではあり得ないぐらいの高得点をとることが出来た。しかし、この試験結果によって、学校側には要注意人物だと認識されてしまったのである。ラルフがそんなじよそこの弱い魔族では使わないような高位魔術を披露してくれたためだ。はつきり面と向って言われたわけではないが、試験後に呼び出されて魔族の扱いに対して注意を受けた事実と講師たちの厳しい視線がそう言っている。

「で、誰が弱い魔族を演じるって？」

「ラルフ様、そんなこと言ったの？」

ラルフ様は、面倒くさがりな上に、実はちょっと抜けたところがあ

るから……それは無理があるよ」

ラルフに詰め寄るラシエルに、のんきな声が反応する。住居がもうすぐ決まりそうだとわざわざ報告しにきた魔族の兄弟の一人クラウスだった。

ラシエルとラルフは最初からどんな倒し方をするかなども相談しておく必要があったのである。よく考えれば、まだラルフとの付き合いが短いラシエルでも、面倒くさがりの彼が一撃で相手を倒せる魔術を使うのは予想がつくはずだった。

「まあ……頼んだ相手が悪かったと思って諦めるんですね。

強い力を持った魔術師というものは、古の時代より人間社会では多かれ少なかれ危険視されるものです」

「クラウスの言ったことのフォロワーはしないんだ……」

「今度からは僕を呼べば？ 僕、弱いしちょうど良いよ。それぐらいしか、役に立てないけど……」

現状にさほど興味がないハインリヒと違いクラウスは少なからず関心があるようである。面白がっているとも言えるが、控え目な申出にラシエルの心は少なからず動いた。しかし、このどこか頼りない魔族の青年に頼って良いものか迷うところだ。

「クラウスを呼ぶのもなんだか心配なような」

「止めておけ。そいつは、俺よりよっぽど性質が悪いからな」

「そんなことないよ。僕は、片翼の有翼種だから魔力も安定しないし……体力もないから魔族では落ちこぼれで」

「持久力がないことは否定しませんがね」

「嫌いな相手を目の前にした時の忍耐力も皆無だがな。死体の山を築きたくないなら、呼ぶのは止めておくことだ」

いつもの卑屈な話に走り始めたクラウスを無視してハインリヒとラルフはクラウスの本質について語る。

クラウスは、ネガティブで一見鈍くさい魔族だったが、決して弱いわけではなかった。精神面が大きく影響する魔術において、自分に自信がないのは致命的なのである。逆に感情的になりすぎた場合

は、これまた魔術は暴走する。普段自分に自信がない上に切れやすいクラウスは、魔族内でも危険な存在だった。

「……やっぱり、真面目に修行あるのみだね」

「初めて会った時は、まぐれでも俺を召喚できたんだ。召喚魔術の素質が皆無ということもないだろう」

他の魔術の素質はなさそうだが、と言わなかったのは彼にしては珍しい気遣いだった。謝る気はさらさらないが、自分から言い出した偽装を失敗したことをラルフなりに気にしていたのである。

気の毒なのは誰？

紫色の薔薇が咲き乱れる庭で、二人の少女がテーブルについていた。一人は、強制的にこの庭がある屋敷へ引越すことになったラシエルだった。もう一人は、彼女の幼馴染であるアマリー工という貴族のお嬢様である。ラシエルは、急な引越しに不信感を抱いたらしい友人に事情を説明すべく、屋敷に招いていた。

「あなたの不運もここまで来ると奇跡よね。でも、このお屋敷はなかなか素敵だと思うわ」

この屋敷は庭も建物内も綺麗に手入れされていて、とても気持ちが良い。普段から立派で大きな屋敷に住んでいるアマリー工から見ても、この屋敷は素敵な住居に思えた。

ところが、ラシエルは不満そうに返答する。

「そうかなあ。広くて落ち着かないし、掃除が大変そう」

魔術師見習いの身の上のラシエルの部屋は喫茶店の三階にあった。喫茶店の経営者の好意で二階と三階の部屋を安く貸し出しているのである。

狭い部屋だったが、ラシエルがそれに不便を感じることは特にない。だから、立派な一人前の魔術師になるまでは、そこに住み続けるはずだった。

「そういうのは、魂約者の部下がやってくれるんじゃないの？」

「あの二人が掃除してるのって、想像がつかないんだけど……それ以前に、私引越しなんてしたくなかったし」

「なんでこんなことになったんだけ？」

数日前、強制的に引越しをさせられた彼女は不機嫌だった。早朝から叩き起こされた上にいきなり荷物をまとめるように告げられたのだから無理もないだろう。

「ハインがね、あんな所にラルフ様が住むなんて許せないんだってさ。」

確かに、君や僕ならともかく、ラルフ様には似合わないよね」

「狭い部屋が似合って悪かったわね。」

ラルフを広い部屋に住ませたいなら、彼だけこっちに住めばいい話じゃないの。」

勝手に部屋を出ることになってるし、私を巻き込まないでよね」

むしろ、それなら、ラシエルはどんなに喜んだことだろう。彼女は、ラルフと同居することにさほど不便を感じていなかったが、いないならない方が気楽で良いとは思っていた。

相手が自分より強い魔族だということもさほど気にせず、怒るラシエルに対してハインリヒとクラウドの冷たい言葉が飛ぶ。

「貴女はご自分の立場というものがよく分かっていらっしやらないようですね。」

貴女はラルフ様の魂約者なのだという自覚を持つべきです」

「弱い君に何かあったらラルフ様や僕らが迷惑するんだよね。だから、弱い君は諦めるべきだと思うよ」

つまり、ラシエルには最初から選択肢など存在しなかったのである。これからも、こんなことが続くのかとラシエルは憂鬱になった。

ラシエルがアマーリエに語った内容は、引越す理由の説明というよりは、愚痴に近い。

「まあ、それなら仕方ないわね」

「どこをどう解釈したら、そういう感想になるのよ!」

慰めてほしいわけでも同情して欲しいわけでもなかったけれど、それは予想外の返事。ラシエルは、友人のあんまりな反応に思わず口調を荒げた。

「いいじゃない。家賃のいらぬ住居に無料で強い護衛が三人もついてくるのよ?」

監禁や軟禁状態なわけでもないし、不満なことを差し引いてもお釣りがきそう」

なるほど護衛だと思えば、まあ悪くないかもしれない。しれないが、ラシエルは護衛を必要としていなかったし、護衛が必要なのだとすればそれは魂約者が魔族であるせいだろう。それなら、いつそのことお互い遠くに住んだ方が安全なようにも思える。

アマーリエの考えにどうしても納得できないラシエルからすれば、他にも不可解なところがあった。それは、アマーリエがあっさりとラシエルと魔族たちとの関係を受け入れたことである。

「それに、魔族よ。魔族。」

アマーリエの家つて、ホーラ神殿に多額の寄付をしてるぐらいの熱心な信者だったはずでしょう」

慣れもあってラルフたちが魔族であることがさほど気にならなくなってきたラシエルだったが、自分が異常な状況下におかれていることは自覚していた。だから、アマーリエが自分を差別的な目で見ないことがありがたい反面、そんな彼女の態度に疑問も感じてしま

う。

「魔族を嫌って当たり前つて言いたいんですけど、私はそういうのどうでもいいと思ってる方だから。」

「神族の加護を受けているはずの兄の現状を見てたらねえ」

「……あれは、確かに気の毒だけど」

アマーリエの兄でありラシエルの幼馴染の一人でもあるアルマは神族を魂約者とするエウノミアである。エウノミアは、デユスノミアとは逆に世界に秩序をもたらす尊い存在として優遇されてきた。彼らは、成人の儀（十三歳から十八歳の間に行われる）を終えると神殿に迎え入れられ神官、巫女、聖騎士のいずれかの道を歩むことになる。エウノミアには、敬われる高貴な立場が約束されているわけだが、平凡な幸せを願うものからすれば遠慮したい立場だった。

実際、アルマはなりたくもない聖騎士になるべく見習として神殿に上がって憂鬱な日々を過ごしている。そのことは、アマーリエに送られてくる手紙の内容を聞いていたラシエルも知っていた。手紙からは、神族の性格がアルマを含むそこら辺の人間と合わないことも伺い知れた。

魔族と人の仲が悪いからといって、神族と人の仲が良いかということでもないということだ。本当に仲が良かったら、人が神を奉るとするのが妙である。その点から見れば、対等でないことはすぐに分かるだろう。神族は魔族と敵対していたが、敵の敵は味方というわけではないのが現実である。一部の人間のみが友好的に接しているところでは、神族も魔族も同じだった。

「私、エウノミアだけは絶対嫌かも」

「それについては同意するわ。」

現時点では大した問題も起きてないんだし、引越しが強行されたぐらいで騒がないの。

ラシエルがデユスノミアだつてことを隠すのは協力するしね」

「ありがとう。ついでに、私の部屋の片づけも協力して」

「それは嫌。」

だつて、あなたの部屋のものつて迂闊に触ると爆発したりするじゃない」

気持ち少し浮上したとたんに調子に乗る友人の頼みをアマーリエは一掃した。

アマーリエが、嫌がるのはもつともなことだつた。彼女は、過去に数度、ラシエルの部屋で酷い目にあっている。魔術関連のアイテムの暴走に立ち会ってしまったからだつた。そのため、ラシエルの引越しはアマーリエにとってはどちらかといえば良いことだったのである。

この屋敷なら、ラシエルのもとに遊びにいった途端に爆発に巻き込まれたり、攻撃魔法を受けたりすることはないだろう。

アマーリエは、不運で暴走気味の友人の魂約者になったという気

の毒な魔族とその部下にほんの少し同情した。これから被害に合う可能性が高いのは間違いなく彼らだから。

魂約者に抱く感情の差異

ラシエルたちが引越して数日が経過し、屋敷の住人は皆その環境に慣れ始めていた。最初こそ急な引越しに不満を抱いていたラシエルだったが、不機嫌な表情も和らいできている。

事件が起きたのは、そんな皆が寝静まった真夜中だった。住人たちがそれに気づいたのは翌朝のこと。ただ一人、事件に関わった者を除いては。

「幽霊が出た……ねえ」

「私が嘘をついているとしても言うのですか？」

「いや、そうじゃなくて、あんた魔族でしょうが。」

なんで幽霊が苦手なのよ？」

ラシエルは胡散臭いものを見るように眼鏡の青年に目を向ける。

その容姿だけでは人間に見える彼は、真正銘の魔族だった。

「失礼ですね。魔族とあの化け物を一緒にしないで下さいよ。」

あんないるかどうかも分からない存在、不愉快なだけじゃないですか。

それに、別に苦手なわけじゃありません」

苦手なわけじゃなく嫌いなんだ、と言いたいのだろう。ラシエルにもそれは伝わったが、どうしても苦手なのを隠しているようにしか聞こえなかった。

魔術師を志すラシエルはともかく、一般人の中には魔族を化け物だと認識している人だっている。魔族であるハインリヒが、なぜそこまで幽霊に対して騒ぐのか疑問が湧くのも当然だった。

一方、ラルフとクラウスは、いつも通りもくもくと朝食を食べている。彼らにとってハインリヒの騒ぐ様は珍しいわけでもないらしい。ラルフが少食なのはいつものものやる気のない彼らしいが、大人し

いクラウスは意外と沢山食べる方だ。

今日も大量の食糧を胃袋に収め終えたクラウスが、やっと会話に加わる。

「苦手じゃなくて怖いんだよね。鈍い僕には幽霊なんて見えないけれど、見えたら怖いんだろうな……」

「クラウス……私は怖いなんで一言も言っていないでしょう？」

嫌味にとれることをクラウスはよく口にする。神経質で口煩いハインリヒより、むしろクラウスの言うことの方が酷いことが多い。ハインリヒは上辺だけの嫌がらせで言っている場合があるが、クラウスは本気だから性質が悪い。

ピリピリするハインリヒを余計に怒らせることをクラウスは言う。二人を見てため息をついて、ラシエルは我関せずという顔で食後の一服を始めているラルフに向いた。彼から漂ってくる煙に、ラシエルは顔をしかめる。

人間の煙草と違い人体に無害なはずのそれは、とにかく臭いが独特だった。(ちなみに魔族にとっては有害だ) 魔族にとっては好ましい匂いらしいのだが、この臭気がむしろ人間には有害である。

「昔から、ハインはこの手の奴が出ると騒ぐ。……お前が、ゴキブリが出ると騒ぐのと似たようなものだ」

ラシエルはネズミや蜘蛛は平気だったが、ゴキブリと遭遇するといつもなら出さないような悲鳴を上げてしまふ。深く考える前に攻撃魔法を放つてしまい、火災を発生させたこともある。まあ、つまりそういうことだ。

はつきり言わないのは、面倒なことになるのを避けるために他ならない。彼が、ハインリヒのプライドを傷つけないように気を使うような人物だったら、もっと早く話に割り込んでいただろう。ラルフにとつては部下が幽霊を怖がって騒いでいるより、自分に対して突っかかってくる方が問題だった。感情的になったハインリヒの相

手はとても面倒なことだ。恐らくラルフでなくても相手をしたくないに違いない。

「幽霊が出るなら、噂ぐらいにたっついてもおかしくないと思うんだけど、そういうの調べなかったの？」

苦手なら最初に調べるべきだ。この屋敷は手入れしたことでまだ使えそうだったが、古い建物には違いない。長い間人が住んでいなかったのは確認済みなので、曰くつきだったとしてもラシエルは驚かなかつただろう。

「お前こそ知らなかったのか？ お前ぐらいの年頃の娘はそういう話が好きだろう？」

「……知らなかったから、訊いてるの」

あいにくラシエルはこの手の話には詳しくない。彼女本人がそういう話に興味がないのもあったが、アマーリエを始としてラシエルの友人には怪談好きが少なかった。アマーリエとアルマに関しては、はっきり幽霊が見えて会話ができる。幼い頃からいて当たり前前存在だったので、怖がったり珍しがる理由がないのだろう。

「そんな話があったらここに決めていませんよ」

「何か理由があつて出て来たんじゃないのかなあ」

「珍しくまともなことを言うじゃない……例えばどんな？」

理由があり、それが分かれば幽霊がこの屋敷にいる原因を取り除くことができる。

「僕らの中に恨みを持つている相手がいるとか、僕らの内の誰かが憎んでいる人に似ているとか、僕らの中に」

「ちよつと待つて。それ私たちに悪意があること前提じゃない？」

「今更だと思うが」

ラルフが言うのは、もちろんクラウドの思考がネガティブなことについてだ。ハインリヒが見たという幽霊が、こちらに悪意または敵意を持っているという情報はない。

「何か望むことがあって、私たちに助けを求めているのかも」
「僕らに何が出来るっていうのさ。そもそも、君、この屋敷に人が住んでいたのがいつなのか知ってる？
もう半世紀ほど前のことだよ。50年以上も前の願い事を叶えるのは難しいと思うけど」

いくら予想しても理由なんか分からない。面倒だから聞けばいい、というなんともシンプルな意見により、幽霊と話をすることになった。発案者はラルフで、実行するのは彼の主人であるはずのラシエル。

「言いだしたのはあんたなんだから、ラルフがやればいいのに」
「話をするより吹き飛ばす方が楽だな、と言ったらお前が可哀相だと言いだしたんだろう。」

まったく、どうして顔も知らない相手に同情するのかさっぱり分からん

「そうですね。いなくなればそれで問題ないではないですか」
「説明してもあんたたちには分からないでしょうね。」

幽霊がラルフとハインリヒの被害者になったとすれば、ラシエルは同情するだろう。なぜなら、ラシエルはすでにラルフたちの被害にあっているからだ。そして、自分の願いが叶わない苦しみや悔しさは、彼女も知っていた。

窓から月の光が廊下へ差し込んでくる中、その光だけを頼りにラシエルは歩を進める。ロウソクは何かあった時に火事になってはいけないので、持っていくのを断念したのだ。

ハインリヒの部屋の側で立ち止まり深呼吸をする。静まり返った廊下に、何かどしりとしたものが落ちるような音が響いたのはすぐ

だった。ラシエルは迷うことなく目の前の扉を開く。

「そこまでよ！　ハインから離れなさい」

驚いたのだろう。ハインリヒは、ベットから落ちたのか床で上半身だけ起こした状態で硬直している。幽霊が関わりと冷静さを欠くことは朝の会話で暴露されていたようなものだが、ラシエルが予想していたよりも怖がっているようだ。

彼の目の前には、女性が立っていた。儂いとは程遠いはつきりとした体。力強い目。その姿はとても幽霊には見えない。

「あなたが幽霊？」

想像以上に怖い見た目じゃなかったことにほっとしながら、冷静に問いを向ける。女の声は、透き通るように綺麗な声だった。

「死者の魂をそう呼ぶなら」

「貴女の願いは何？」

「愛おしい魂の片割れをこの腕で抱くこと」

女性は鋭い目をゆるめて頬を緩めて呟く。ラシエルの質問に答えるというよりも、自分に言い聞かせるように。

分かるのは、彼女も彼女の魂約者もすでに亡くなっているということ。分からないのは、何故彼女がここにいるのかということ。

「ハインは、彼はその魂約者に似ているのかしら？」

「まさか！　私の愛おしい人は、彼の魂約者と瓜二つ。だから……」
女性の意識がハインリヒに戻る。彼女の手には銀のナイフが握られていた。

ベタな展開にラシエルの思考が追いつかない。とっさに浮かんだのは、クラウスの願望通り、今回の幽霊事件には愛憎渦巻くサスペンス要素があったということだった。

ハインリヒの白い綺麗な肌に赤い筋が入る。女のナイフが彼の顔を傷つけたのだとようやく理解したラシエルの体が深く考える前に動く。彼女にとってナイフが目に入っていないようなハインリヒを

庇うのは、それだけ当然のことだった。今のラシエルに、ハインリヒの方が自分より強い、という事実なんて意味がない。

ところが、部屋に舞ったのは赤い血しぶきではなく、白く霧のようにバラバラになった女の魂だった。

室内には、いつの間に来たのかラルフとクラウスが並んで立っている。

女の魂と一緒に魔力の粒子が漂う。使われたのは、精神を崩壊させる危険な魔法だった。精神系の魔法は幽霊にも有効であるということは稀に書物に書かれている。そのことが証明されたわけである。しかし、その場にいる者達にとっては、そんなことはどうでもいいことだった。

「ラルフ！」

咎めるような目を向けるラシエルにラルフが呆れたように口を開く。

二人の様子にハインリヒとクラウスは顔を見合わせた。

やる気のないこの青年が、この場に現れただけでも奇跡のことだった。ハインリヒやクラウスからすれば、ラシエルの今の態度も信じられない。彼女は、ラルフに助けられた身である。ラルフが人を助けただけでも驚きだったが、それに怒りの声をぶつけられて何もしないラルフにはもっと驚かされている。ただ、魂約者だというだけなら、“生きていればそれでいい存在”なのだ。

「この女が、お前を殺そうとしたからだ。」

こいつはとっくの昔に死んでいる。この世界から消えて当然の存在だ。

俺にとってこいつの死はどうでもいいが、お前の死はそうじゃない。それだけのことだ」

その日、ラルフもラシエルもそれ以上話を続けようとはしなかった。リード兄弟も異論はない。彼らも疲れていたからだ。特に、愚弟の顔が魂約者に似ていたからという理由で殺されかけたハインリヒは疲れ果てていた。

幽霊の正体が分かったのは、それから数日後のことだった。彼女がこの屋敷の住人であったことは皆の予想通りだったが、魂約者との関係はラシエルの想像とは違ったものだった。

あの女性を幽閉する檻のような存在として用意されたのが、この屋敷だったのである。彼女は、この国のとある宮廷魔術師の魂約者で、相手は大層彼女を嫌っていたらしい。魔術師の中には魔族のように魂約者を重要視するものもいて、その宮廷魔術師はその一人だった。だから、自分を好きだという鬱陶しい魂約者をあえて遠ざけず、目に触れないが自分の側に置いておいた。この屋敷で暮らし始めた彼女は、それからずっと亡くなるまで魂約者と顔を合わすことがなかった。

「恋人同士だったのかと思っただけけど……」

軟禁状態だった上に、閉じ込められていた本人の了承を得ていたようなので犯罪ではない。とはいえ、ラシエルにとって、憧れの存在である宮廷魔術師がやったことだと思つと、少し不愉快だった。女性の表情を思い出せば、彼女が魂約者本人を恨んでいないことは明白。好きだったから従つたというより、両思いなのだ信じ込まされていたんだろう、というのが周囲の見解だった。

「魂約者は、負の感情の対象にもなり易いですからね。」

両想いになる確率なんて、魂約者同士じゃない場合とそんなに変わらないでしょう。興味がない、という可能性がない分だけは、高くなりますけどね」

「でも、例外がここにいるよ？」

「……とにかく、もういいでしょう？ 彼女と会うことはもうないんですから」

ラシエルを見ながら面白そうにしているクラウドをハイソリヒは無視する。ラシエルと愚弟の口喧嘩を聞きたくなかったからだ。

「なんか、すっきりしない」

「魂約者は、たった一人だけ。
あいつの魂約者はもうどこにもいない。どうせ願いは叶わなかったんだ。」

「……それでも気になるなら、俺のせいになればいい」

「はあ？　なんでそうなるの？」

ラルフの突拍子もない発言は今に始まったことではない。それでも、毎度突っ込んでしまうのはラシエルの性格としか言いようがなかった。突っ込まれても、ラルフが発言してしまうのは仕方がない。彼には、ラシエルが何故自分の言うことを素直に受け入れないのかさっぱり分らないからだ。

「俺はお前の僕だ。主は僕に八つ当たりしようが罪をねつ造しようが好きになればいい」

「……ラルフ……あんたやっぱり変な魔族ね」

「ねえ、ハイン。僕、砂吐きそう」

主とその魂約者の会話を聴いていたクラウドは、欠伸を飲み込みながらぼやいた。

「私は、気分が悪くて吐きそうです」

「まだ顔色悪いね」

何らかに對する嫌味ではなく、嫌悪からくる吐き気でもないらしいハインリヒの言葉にクラウドが兄の顔を覗き込む。俯いたハインリヒの顔色はいつもにも増して青白かった。ラシエルが幽霊の話をあれからずっとしていたせいだな、とクラウドは結論付けるが、それを見破るようにハインリヒは否定の言葉を放った。

「ちよつと、頭痛がするだけです。幽霊のせいではありません」

「ハインは、本当に頑固で意地っ張りだよ。僕、そういうハインの小者っばいところ大好きだよ」

「私は、あなたのそういう思い込みの激しいところが大嫌いですよ。気が合うとは言い難いハインリヒとクラウドは魂約者同士である。」

魔族は、魂約者と争わなかったために主従関係になる。だけど、彼らは主従関係を結ぶ必要がない。

夜の女王の薔薇

深い赤紫色の薔薇の花を花瓶に活けながら、少女はため息をついた。それは、珍しく早朝に庭を散歩していたラルフが手渡してきた薔薇だった。庭で咲いていたものの一つだろうそれは、ラシエルにとってはあまり好ましい色ではない。だから、自室には飾らずこの食堂に飾ることにしたのだ。

「色はともかく良い香りのする薔薇ね」

薔薇は、ラルフが持っていた時よりも強い芳香を漂わせていた。

ラシエルは、普通の薔薇とは少し違うその香りに引き寄せられるように花に顔を近づける。心地良い空間を壊したのは、食事をするために部屋に入ってきたハインリヒだった。

「ああ、その香りには、強い催眠効果があるんですよ。」

別に匂いを嗅ぐのを止めませんが、どうなっても知りませんよ」

「……リラックス効果じゃなくて？」

確かに薔薇の香りには、そういう効果ならある。催眠が単に眠くなるという意味なら、リラックス効果と似たようなものだと言えるが、ハインリヒの言い方だともっと危険な効果に聞こえる。

「ニユクスメイデイだね。」

日の光が当たっている間は無害だけど、それ以外……特に夜は危険な芳香を発する特殊な薔薇だよ」

兄の言葉を補うようにクラウスが話に加わった。

最初は、ニユクスメイデイが何を指しているのか分からなかったラシエルだが、クラウスが説明を進めるうちにそれが薔薇の名称なのだと気づく。クラウスが薔薇の品種を知っているとは思わなかったので、なかなか気付けなかったのだ。

ニユクスメイデイは日の光から離されることによって芳香を発す

る。ラルフがラシエルに渡した時よりも香りが強くなっているのはそのためだ。室内に持ち込んで時間が経ったことで香り始めたのだ。「催淫作用もありますが、負の感情を誘発するのにもよく用います。まあ、ちよつと吸ったぐらいなら眠くなる程度の効果しかありませんよ。吸い過ぎると、酷い場合は死にいたることもあります。」

「ちよつとそれつてもしかして夜の女王じゃないの？」

“夜の女王”
それは、いわゆる毒薬の呼び名である。知識さえあれば、飲ました相手に死だけでなく心を操ったり単に眠らせたりと様々な効果をもたらすことができる薬である。また、同時に薬の原料となる花も、夜の女王と呼ばれていた。

栽培が命に関わる危険性をはらんでいるため、夜の女王の栽培は国から許可を得た者だけに許されていた。限られた地域でしか栽培されていない品種の薔薇であり、ラシエルが知らないのも無理はなかった。ラシエルが夜の女王に興味を持つこともなく、彼女はその花が薔薇だということすら知らなかった。

薬が使われるのは、主に病院や戦場だ。麻酔や気分を高揚させるために使用するのである。媚薬としては後宮や高級娼館でも使うが、そちらはラシエルには縁のない場所だ。

「なんだ、気に食わなかったのか。寝室にでも飾れといっただろう？」

遅れて食事を取りに来たラルフが、不満そうな声を出す。視線は花瓶の薔薇に向いていた。

「こんな薔薇くれて……嫌がらせのつもり？」

「俺がお前に嫌がらせなどするものか。面倒臭い。」

…… たまたま、目に入った薔薇の色がお前の目と同じ色だったからな。

「気まぐれに取ってきただけだ」

受け取り様によつては好意とも据えることができる言葉。だが、ラルフの言葉に顔色を変えたのは、ラシエルではなくリード兄弟の方だった。ラシエルは、不機嫌な表情を崩そうとしない。

「あれラルフ様があげたものだったんだ……」

困惑するようにクラウスは呟いた。ほんの少しだったが声が震えていた。

ニクススメイデイは媚薬の代わりも果たす。嫌いな相手に悪意を込めてニクススメイデイを贈るように、好きな相手にあの薔薇を贈ることもまた特別な意味を持っていた。夜の女王がもたらすのは、死や苦しみだけではない。

「申し訳ありません。まさか、ラルフ様が贈ったものだったとは」
動揺を隠せないクラウスと違いハインリヒが無表情で謝罪する。

無意識に自分の主人の目的を妨害したというのは失態である。とはいえ、ハインリヒはラルフとラシエルが仲良くなることを歓迎してはない。邪魔できて良かったという思いと合わさって、彼の声がいづれにも増して冷淡なものになっていた。

「どんな勘違いをしているのか想像したくもないが……そういう意図があつて渡したわけじゃない」

不愉快だという思いを顕わにしてラルフは眉間にしわを寄せる。彼にとつてラシエルは恋愛対象ではない。少なくとも本人はそう思っていた。

「そうでしたか。それなら良いのですが」

「ああ、びつくりしたあ……」

ハインリヒと違いクラウスの方はラルフとラシエルがどうなるかがどうでも良かった。ただ、主人の機嫌を損ねるのは遠慮したかったのである。今も十分不機嫌だが、恋路を邪魔された時ほどではな

いだろう。

ラシエルにとっては失礼とも言える会話が交わされていたわけだが、彼女はそれをさっぱり理解していなかった。彼女にとってもまたラルフは恋愛対象外だったからである。ラルフが自分を好きだという発想など想像の範疇にないのだ。

「どういう意味？」

「気にするな。」

それより、お前、最近あまり寝てないだろう？

気に入らないかもしれないが、その薔薇の花弁を一枚枕元に置いて眠るといい。短時間の睡眠でも疲れが取れる」

「永眠したらどうしてくれるのよ……」

次の試験を前にラシエルは課題を終わらせようと必死になっていた。思うように進まず徹夜をすることも多い。その上、今回は試験中の実技の割合が高い。なるべく魔族三人の力を借りずにクリアしたいラシエルは召喚魔術の訓練も行わなければいけなかった。

自称魂約者のラルフはというと、へとへとになっているラシエルのことなど知ったことではないという顔でマイペースに生活していた。そこに今回のニクスメイデイである。疲れと睡眠不足でイライラしていたラシエルは、色も効果も嫌な薔薇をくれたラルフに負の感情を向けてしまったのだ。負の感情を誘発するという夜の女王の力も多少作用していたのかもしれない。

だが、まるで心配しているかのようなラルフの態度に、それまで治まらなかつたラシエルの怒りや疑心も霧散していく。

「量を間違えなければいいんだ。」

効き目がどの程度表れるかは個人差があるが……お前にはあまり効かんだろう。夜の女王の愛するモノとお前はあまりに遠すぎる」

「……………なんか貶されてる気がする」

夜の女王が愛するのは、死、眠り、夢、苦惱、欺瞞、愛欲、そして争いと復讐。

デュスノミアでありながら、日の光の下を歩むことを止めようと

しない少女に女王の声は届かない。それでも、夜の闇に抱かれてい
る時だけは安らかな眠りを受け取ることができるだろう。

髪の色と記憶

ラシエルは鏡を見つめて顔をしかめた。鏡には鮮やかな赤紫色の髪の少女が映っている。その色は、彼女にとつてあまり好ましい色ではなかった。

普段は茶色に染めている髪の色を元に戻すことになったのは、先ほどの失敗のせいだ。

ラシエルは、自らの髪を染める染料を自作していた。今回も問題なく完成するはずだった作りかけの染料に何か異物が入ってしまったらしく、失敗作ができてしまったのだ。材料ももう残っておらず、買い足す余裕はない。そこで、染料が中途半端に落ちている状態よりはましだろうと、一度元の色に戻すことにしたのである。

「……ラシエル」

「うわあ、どうしたのその髪の色？」

髪の毛のことを聞かれると予測していたラシエルはうんざりとした顔をラルフたちに向けた。人間に言われることは慣れていたが、人間より派手な色を体の一部に持つ魔族にまで驚かれるというのは複雑だ。クラウスなどは鮮やかな青い髪を持ち主だ。ラシエルからしたら、自分とクラウスの髪の色の違いは大差ない。

「ニクスメイドィや貴女の目と同じ色ですね。貴女があの色を嫌ったのは、そのせいですか？」

一番冷静な言葉をかけるハインリヒの声にも少なからず動揺がにじみ出ている。

深い安らかな眠りをもたらししてくれる薔薇に罪はない。しかし、自分以外が見ても似ている色なのだと言われると嫌悪感が増す。因縁めいたことに、ニクスメイドィは、デウスノミアを象徴する薔薇でもある。それは、夜の女王が混沌と争いを愛することからきて

いた。

ラシエルが赤紫色の髪を染めて隠していたと知った魔族たちは心底不思議そうな顔をした。彼女がそこまで髪の色を隠したがる理由が理解できなかったからだ。

「理解できないな。」

どうして、わざわざその綺麗な色を変える必要があるんだ？」

「……紫色の髪なんて珍しいからよ。悪目立ちする」

赤みが掛かった色は珍しくないが、紫はあり得ない色である。

一瞬ラルフの綺麗という発言に固まったラシエルだが、すぐに元に戻る。ラルフが褒めてくれたからといって、自分の髪の色が嫌いだという事実が変わるわけではない。

「紫は魔の証。」

……それを持ちながら何故弱いのか、まったく貴女は不可解な生き物ですね」

「魔族でも髪に現れるのは珍しいんだがな」

ラルフとラシエル、どちらの目も紫系の色をしているが、二人の目の印象は印象がまったく違っていた。深い藍色を落としたような暗い青紫色のラルフの目に対し、ラシエルの目は燃える炎をうちを持つように明るく赤味の強い紫だ。それはまるで、互いの性格を表しているかのような色だった。

「目なら、ラルフ様も含めて高貴な魔族では珍しくない色だよな」

高貴な魔族というのは、強い魔力を有する魔族という意味である。彼らの中では、強い者だけが権力を持つことを許される。世襲制ももちろん存在しない。強い親から生まれても弱ければ、子供は親から奴隷のような扱いを受ける。ただ、魔力の保有量は遺伝するので、親子の間に大きな力の差が生じることは稀だった。

「彼女は、高貴とは程遠い生物だと思いますが」

「ラシエルはそこが良いんじゃないかな。」

髪の色が紫なのは、デウスノミアと関係してるのかもしれないね」

魔力が弱く貧乏性のラシエルをハインリヒは馬鹿にしているところがある。クラウスも似たような態度を取るが、彼はハインリヒよりはラシエルに友好的だった。自分に自信がない彼は、自分より弱い存在を見下しつつも好む性質がある。

兄弟が好き放題言っている後ろでラルフは何か考え込んでいるようだった。

「髪に関して何か言われたことがあるのか？」

「昔、母がよく髪の色を隠すように言っていて、それを聞いていた頃はよく分からなかったんだけど……
後で私の髪の色で悪い事が起きたのよ。」

……知らない人が数人家にやってきて私を連れ去った」

いきなりの重い内容に一般人なら多かれ少なかれ動揺しただろうが、話している相手は魔族。皆平然としていた。気を使う気ももちろんない。しかし、平和ボケしていると思っていたラシエルの過去に、そんな出来事があったというのは三人にとって意外なことだった。

“連れ去られた”ではなく、“連れ去った”と客観的に話すラシエルにも違和感を覚える。どちらかといえば感情的な彼女らしからぬ表現だ。

「それで、どうなったんだ？」

先を促すラルフだけでなく、リード兄弟も続きを話せという視線をラシエルによこす。

「それが三年近くも家に帰れなかったのに、その三年間のことを覚えていないのよ」

「話になりませんね。何があったか分からないのなら、良い悪いの判断など不可能ではありませんか」

「嫌な思いをしたから忘れちゃったのかもしれないよね」

場が白けそうになるのをクラウドが止める。フォローするつもりはなかっただろう。単に彼の悪い癖が出ただけだ。事実の良し悪しに左右されず、もれなく悪い方向へ考える。

「あり得ないことはありませんが……あなたは黙っていなさい」
呆れながらも一応相手にするだけハインリヒはクラウドには甘かった。ラシエルはクラウドの言葉を気にせず、ハインリヒの嫌味にだけ答える。

「まあね。でも、やっと家に帰れた時に母が『もう大丈夫よ。怖い目にあつたのね。もう忘れてしまいなさい』って言ったのは記憶に残っているの。」

だから、悪いことだったのかな、って。
あと、強制的に子供が連れ去られた事自体悪いことじゃない？」

「三年後に帰れたんだ……」

「……無事だったから、今ここにいるんでしょうけどね」

「失った記憶は悪いものかもしれない。だが、それは思い出した方がいいんじゃないのか？」

もうこの話を切り上げようと思っていたラシエルは、予想外の反応をする三人に困惑した。

「なんで、あんたがそれを気にするのよ。私自身が気にしてないんだからいいでしょう？」

一番引つかかるのは、面倒な事を嫌うラルフがわざわざラシエルの失くした記憶を取り戻すことを望んでいるということだった。思い出した方がいいのでは、と提案しているがラシエルのためだけにはずはない。彼は自分の利益になることしか自ら進んでやらないし、それすらなかなかしようとしなない男だ。ラシエルが、ラルフにとつて何の得があるのか、という疑問を最初に思い浮かべるのも仕方がない。

「抜け落ちた三年間が、あなたの魔力の少なさに関係あつたとして

も？」

「あり得る話だよな」

話が飛躍しすぎているように感じられる内容だったが、ハインリヒはいつになく真面目な表情をしている。クラウスだけでなく、ラルフも真剣な表情でいて口を挟まないことから同じ意見なのだろう。「どうして、そういう話になるのか分からないけど、貴方達に関係ないことだわ」

「魔力と関係あるなしはともかく、私たちとは関係ありますよ」

「君はラルフ様の魂約者だからね」

「また、そんなこと言って……とにかく、この話はこれで終わり。忘れてちょうだい」

逃げるように部屋を出て行ったラシエルを追う者はいなかった。

食堂のテーブルの上には、彼女の食事だけがそのまま残っている。

「あれで宮廷魔術師目指してるっていうんだから、笑っちゃうよね。嫌いじゃないけど」

感情的になって冷静さを欠いているラシエルにクラウスは苦笑する。ハインリヒに睨まれて口を閉じたものの、目は何かを企んでいるかのような輝きを帯びていた。

「ラルフ様……」

「調べる必要はない」

ラルフがリード兄弟と会話する時、彼らは多くの言葉を必要としない。周囲が聞いても理解できないものだったが、今回もこの短い会話だけで互いの言いたいことは伝わっている。

それにラルフはあまり長い話をするのを好まなかった。ラシエル相手の時と他では話す量に大きな差がある。彼女は気づいていないことだったが、それは紛れもなくラルフがラシエルを特別扱いしている証だった。

「僕、なんとなくラシエルが魔族にあまり偏見がない理由も分かっ

た気がするよ
「

私もです。でも、答え合わせはまた今度にしましょうか。
彼女に答えは今のところ必要なさそうですからね」

紅茶の原料襲来

太陽の光が降り注ぐ石畳の通りを、一人の少女が歩いていく。周囲に他の人影はない。日差しの強いこの時期には、正午過ぎに出歩くものがあまりいないからだ。

少女ラシエルも、こんな時間に屋外にいるのは珍しい。講師の都合で補習が昼食時に入ったからだだった。

成績の悪さは、魔族召喚事件からも変わることがなく……講師たちは安堵しているようである。ラシエルとしては複雑であったが、警戒の目を向けられるよりは良い。ただ、宮廷魔術師になるという夢のことを思うと、試験でもっとましな結果を出さなければ話にならない。

ラシエルは、山を背景にそびえ立つ宮殿を見つめてため息をついた。

過去に魔族と戦って勝利した人間の国で、現在も残っているのは三つ。中でも最も栄えているのは、ラシエルの住んでいる国エイレネであり、その軍力は強大だった。エイレネは、神族との交流も深く、大変魔術の発達した国であり、高い能力を持った魔術師の人数が圧倒的に他国より多いためだ。

当然ながら、そんな国で宮廷魔術師になるのは、強力な魔力を持つ魔術師でも難しい。

何か効果的な訓練法や、偉業を成し遂げるすべはないものか、と思案しながら歩く。ラシエルには、見慣れた周囲の景色などほとんど目に入っていないかった。

「痛っ」

小さな呻き声が路地裏から聞こえていたが、それすら彼女の耳には届いていなかった。

「ラシエル」

「なんだ、アルマじゃない。久しぶりね」

屋外に出てから最初に遭遇した相手は、幼馴染のアルマだった。聖騎士である彼は滅多に神殿から出てくることがないので、ラシエルと会うのは久しぶりだ。

「ああ。お前、こんな真昼間に何してるんだ？

こっちは面倒な仕事だったのに……：……：……：そういえば、この辺で魔族を見なかったか？」

本来、威圧的で冷たい雰囲気を持っていて近づきがたいはずの聖騎士の鎧もアルマが着ていると、そう感じさせない。貴族の嫡男でありながら、気易い彼の雰囲気はラシエルは気に入っていた。

「……いいえ、見ていないけど、どうしたの？」

魔族という単語に、ラルフたちのことを思い浮かべて嫌な予感がし、ラシエルは気まずそうに答えてしまう。怪しい反応だったが、アルマはそうは取らなかつたようだ。

「そんなに深刻な顔するなって。魔族が現れたって噂が流れたから、念のため搜索中なんだけど……」

ま、ガセネタかもしれないし、白昼堂々悪さをする魔族や魔術師もそういないだろうしさ」

「そう。……：……：夜は気をつけた方がいいかもね。それじゃあ、気をつけて」

ラシエルが魔族と関わりがあるとは露ほどにも疑っていない様子のアルマに安堵する。

「ああ、お前もな。じゃあ、また」

アルマが去っていく姿を見送り、ラシエルが再び歩き出そうとした時に路地裏の影が動いた。それは深紅の髪を持った男だった。男は、ラシエルを壁に押し付け刃物を突きつけるのに、躊躇すること

はなかった。

ラシエルは、簡単な攻撃魔法の呪文を思い出そうとして断念した。口を手でふさがれていたからだ。これでは、力ある言葉も紡げない。「あんた、なんで俺のこと言わなかったんだ？」

「んー？」

訳が分からないながらも、しゃべれないことを伝えようとしたラシエルの意思是届いた。男は警戒しながらも、彼女の口元から手を離す。

「えつと、あなたどなた？」

恐る恐る首を捻ったラシエルの目に飛び込んできたのは、血のような深紅の髪だった。顔も整っているが、何より目立つのは髪の色だろう。ラルフとの同居のせいで美形に耐性があるラシエルからしてみれば、ちよつと綺麗な顔をした赤い髪の少年といったところだ。「とぼけるなよ！ あんたの立っていた位置からだ俺のことは見えていただろ？」

「もし、そうだとしても、私はあなたの存在に気づいてなかったわ。それに私があなたのことを言う必要が……あなた魔族だったのね」
エイレネは、秩序を尊ぶ国でありながら、強い魔力を追求したばかりに、治安はあまり良くない。ここ聖都パクスは、犯罪が絶え間なく起こる犯罪都市でもあった。それでも、魔族の独り歩きにはなかなか遭遇するものでもない。自分を押さえつけている相手が魔族の少年と知ってラシエルは純粹に驚いた。

「魔族だったのは……見りゃあ分かるよな。

なんだよ、気付いてなかったのか……余計なことをしちまった」

少年の頭部には一対の角があった。同系色の髪でも紛れようもないほど、立派で美しい深紅の角だ。

“紅角族”という種族名がラシエルの中に浮かぶ。

「確か、魔族流紅茶の原料の……」

「……あんた喧嘩売ってんのか？ 弱っちい魔力しかないくせに」
ラシエルは、眉をひそめる赤い髪の少年の顔を見て、慌てて否定する。

彼女に、悪意があつたわけではなく、ラルフとの会話を思い出してしまい、思わず口にしてしまっただけだった。紅角族の角を原料にするという紅茶にあまり良いイメージがなかったために、印象に残ってしまったのだ。

「まあ、いいか。俺たちの角のことを知ってるのに、あんたは俺の角に興味がないみたいだからな。」

俺は、ひょう緋耀ひょうっていうんだ。あんたは？」

好奇の目を向けられることに慣れている少年には、ラシエルの態度が奇異に映った。彼女は、紅角族の角がどのように使われるのかわりながら、そんなものは飲みたくないと言っている。

「ラシエルよ。魔族の命を奪って得た角を飲んで強くなっても嬉しくないじゃない」

「はっ、綺麗事だな。」

でも俺は嫌いじゃないぜ、そういうの。魔族の臭いをさせてる魔術師とは思えない言葉だけだ」

「魔族の臭いねえ。消す方法を考えた方がいいかしら……」

小馬鹿にした表情だったが、声の温度を若干暖かいものに変化させて緋耀は笑う。ラシエルは、また変な魔族と会ってしまったことに顔をしかめた。

魔族と交流のある魔術師の多くは、己の利益のために彼らとの結びつきを活用する。魔族と関わることは、己の立場を危うくするというリスクを伴う。

ラシエルとラルフたちのような関係は異様であり、人と魔族は本来仲が悪いものなのである。多くの人がゴキブリを嫌悪するように、檻に入っていない肉食獣を恐れるように、人が魔族と相容れないの

は当たり前のことだった。かつての人が魔族に味わされた恐怖を、屈辱を、絶望を今を生きる人々は知らない。それでも、本能が教えるのだ。魔族は敵であると。

本能に逆らっても手を取るのには、もちろんメリットがあるからだ。得られるものは、魔族の持つ魔力や技術、知識であつたりする。時には、魔族がもたらした技術や知識が人の文明を発展させることもあつたが、魔族が感謝されることはなかった。何故なら、そんな事実は公表されることがないからである。

臭いに反応するラシエルに緋耀は首を傾げた。

「なんだよ。あんた別に酷い目にあつてるわけじゃなさそうだし、そいつらと仲が良いんじゃないのか？」

緋耀から見たところラシエルは、魔族と交流があり、人に迫害されてるわけでもない。強力な魔力を持っているわけでもない、巧みな話術や深い知識があるわけでもない少女が何故そんな状況下にいるのかが、緋耀は不思議でならなかった。

「悪くはないけど、仲が良いと周囲に思われたくないのよね」

「ああ、弱くて目立つと碌なことないもんなあ」

「ちよつと、そっちの方向で納得しないでよ」

「だって、そうだろ？俺たちは、目立つちまったばかりに狩られ尽くされようとしてるんだぜ？」

ラシエルは息をのんだ。弱くてもすぐに命を落とすわけではないラシエルと違い、紅角族はただそこにいただけで命の危険にさらされているのだ。紅角族の角の魔力増幅作用は非常に強力だ。だが、それだけなら現状のように絶滅寸前まで追い詰められることはなかっただろう。有名になつてしまったのが全ての原因なのだ。彼らは決して弱いわけではなかったが、狩る者たちが徒党を組んでやってきて数で押し切られてはどうしようもない。元々、彼らの数は多くなかった。

「にしても、ここつて目に痛いほどきつい日差しだよな」

「年から年中つてわけじゃないけどね。遠くから来たなら、そう感じるかもしれないわ」

緋耀が意図的に話をそらしたことにラシエルは気づいたが、素直にそれに従った。特にこんな炎天下の下で長時間シビアな会話をするのは互いに避けたいところだ。

エイレネの日差しは年中きつい、雨季を終えたばかりのこの時期は時に酷い。魔族に戦争で勝利した際も、日光を嫌う魔族の戦意喪失によつて勝てたとも言われるほどである。

「紅角族も日の光が苦手だったのね」

人にも色素の薄い人種など、日光を苦手とする者たちがいる。ラシエルは、自然と魔族もそういう体質があるのだと思っていた。

「魔族は夜行性だから、好きな奴の方が少ないんじゃないか？」

「でも、私と同居してる魔族連中は日中に活動してるわよ」

魔族が昼より夜を好むというのはラシエルも知っていた。だが、夜行性だというのは初耳である。魔族について少しでも調べたならすぐにでも分かる情報ではあったが、生憎ラシエルにはそんなことをしている余裕がなかった。

「それは……あなたに合わせてくれてるんだろうな。本当に、あんた何者なんだ？」

「私が聞きたいわ」

デウスノミア、という名称がラシエルの頭に浮かんで消えた。

まだ、彼女は自分の魂約者がラルフだと認めただけではない。

端から見れば、自分たちの状況がどれだけ異常であり、ラルフが彼女に取る態度が本来の彼を知る者達にとってどれほど衝撃的なものか。それを、ラシエルはまだ知らない。

秘密の契約

ラシエルの住むエイレネの首都パクスは国の西北に位置し、聖都と呼ばれる。魔族に守護されたこの都市では、魔族は力を失い長居することができないという。

しかし、それは王家や神殿側が己の力を示すために、作った作り話ではないかとラシエルは思い始めていた。彼女は、同居人のこともあり、魔族も平気で生活できることは分かっていたからだ。幸せそうにフルーツケーキを食べている向かいの席の少年もまた不自由はしていないようだった。

「いきなり倒れるから、どうかしたのかと思ったじゃない」

緋耀が会話の途中で倒れたのはつい数分前のことである。今では見る影もないが、青白い顔をして横たわる少年は本当に苦しそうだった。普段は他人がどうなるうと関心がないと思っけていても、目の前の困っている存在を放置できないのがラシエルである。人とは矛盾した生き物なのだ。

「悪い。空腹だった上に、日差しがきつかったからな」

呆れた顔をするラシエルに、緋耀は気まずそうに対応する。それでも、ケーキを食べる手を止めようとはしない。口の中のものをちやんと飲み込んでから話をしていることから、さほど育ちは悪くないと分かる。緋耀は、ボロボロのマントをまとっており口調は荒っぽい。何気ない動作にはどこか気品があった。

魔族の社会は、力ある者が支配する世界だ。ラルフほどではなかったが、緋耀もまた強い魔力を持つ存在であることはラシエルの勘が告げていた。紅角族でさえなければ、中流階級以上の生活が可能。な身分であつただらう。

わずかな魔力しか保有してないラシエルだったが、魔力の量と質

を計る能力だけは高い。魔道具の鑑定能力も高いので、いつそのことと魔道具専門の鑑定士を目指しては、と講師に提案されたことがあるぐらいである。人と魔族を一瞬で見分けることができるのも、似たような勘が働くからだった。

見かけだけでは人と差がないラルフたちと違い、緋耀は角が存在する。喫茶店に入る際には見えないようにしている緋耀を見て、ラシエルは茫然とした。そんなことができるなら、パクスに入る前にやっておけば良かったのだ。

緋耀の言い分によると、パクスの入り口にある魔族探知機の反応をごまかすために魔力が必要だったので、それ以外で余分な魔力を使うのを避けたのだという。だが、それで聖騎士に追い回されて疲れたのでは本末転倒ではないだろうか？

やっぱり変な魔族だとラシエルは思った。

「よっぽど甘いものが好きなのね。こっちは、見てるだけで、気持ち悪くなってきたわ」

緋耀の胃袋に収まったケーキの数は両手両足の指では数えられないぐらいになっていた。ラシエルも甘い物は好きな方だったが、大量に食べるものという認識はない。まさか料金を全額自分が払うのか、というラシエルの心配は杞憂だった。彼は、金貨を大量に所持していたのである。これですますます良い暮らしをしていた可能性は高まった。

盗んだ可能性は低いだろう。緋耀という少年は、盗みを生業にしているにしては、間が抜けすぎてている。どちらかというが目立つ容姿に言動。裏稼業向きにはとても見えない。盗みは隠れてこそこそしなくても強ければどうとでもなるが、そういう人物ならラシエルの命をあっさりと奪っていただろう。残虐な盗賊にしては、甘かった。

「ああ、こんなの俺の生まれ育ったところにはなかったからな。美味

「い食い物を考えだすことに関しては人間も捨てたもんじゃないよな」
人を褒めているつもりらしいが、人を見下す表現が入っている。

とはいえ、別に深い意味はない。魔族にとって、自分たちが人より優れているというのは、蟻が象より小さいのと同じぐらいごく当たり前な考えなのだ。

「私に同意を求めないでよ。魔族の料理が最悪だつていうのは分かるけど」

「紅角族のはまだ人間のに近い方なんだぜ。あんた、どこの料理を食わされそうになったんだ？」

「そういえば、彼らの出身地なんて考えたこともなかった……かも」

ラルフたちにも生まれ故郷や生活していた場所があったはずだが、ラシエルがそれらに興味を持ったことはなかった。彼女が知っていることと言えば、ラルフが高貴な身分の魔族であり、強い魔力を持つ部下がいるということだけだ。

ラシエルは、一緒に暮らしているながら、あまりに情報が少ないことを今更ながら意外に感じた。幼い頃に親元から無理やり離されたことがありながら、彼女は警戒心が薄い。それでも、ラルフたちに対する警戒心が欠片も湧いてこないのは不自然ではないだろうか？

「二人は、有翼種らしいけど」

「翼を持つてる魔族は珍しくないから、それだけじゃあ生まれは割り出せないなあ。」

結局、あんたと、同居してる連中との関係って何なわけ？」

緋耀が倒れたことで有耶無耶になっていたが、彼も関係が気にならないわけではない。ラシエルが紅角族の角に関心を示さない変わり者であったとしても、彼女の同居人がそうだとは限らないからだ。紅角族の敵に、人も魔族も関係ないのである。

「……一人は私が魂約者だと言つてて、他の二人はその部下らしいわ」

緋耀は目を丸くした。口を開くより前に、彼の朱金の目が「驚愕した」と語っている。

「え？ それって、あんたがデユ」

「ちよつとやめてよ、そんなこと言うのは」

「だって、そういうことになるだろうが」

“デユスノミア”

そんな名称を聞いて平気な人間がいるだろうか？

皆、抱く感情に差はあれど、多かれ少なかれ動揺はするだろう。人の集まる場所を出して良い名称ではない。

デユスノミアは、争いと混沌を招く。その存在は、伝説やおとぎ話に登場する架空の人物ではない。前回デユスノミアが確認されたのは、ほんの二世紀ほど前のことである。二百年前、世界は確かに混沌が支配する戦乱の世と化していた。

「らしい、ってというのが妙だな。相手が魂約者だっていうんなら、あんたにだって分かるはずだろ？」

「でも、嘘にしては、相手に益がない気がするのよねえ」

魂約者であるというのが嘘なのでは、とラシエルは何度も考えた。しかし、あの面倒臭いことを嫌うラルフがそんなことをする理由が想像できない。

「それはないだろ。魔力は少ないし特別な役職についているわけでもない小娘に、利用価値を見いだせるか？

魂約者だってというのが本場で、あんたがそれも分からないほど鈍いんだとして……魂約者だからって妙に大事にしてる気がするんだよな。

結局、好かれてるんだな」

「もつとあり得ない」

緋耀は、一人で納得して頷いているが、ラシエルはすぐに否定した。考えるまでもないことだったからだ。ラルフはラシエルが好みではないと言っていたし、魔族が人に好意を持つということ自体が想像の範疇外だ。

同居しても良いぐらいには好かれていることは間違いないのだが、ラシエルはそこまで思い至らない。魂約者が死んで困るなら、どこか安全な場所に閉じ込めてしまおうという手もあるのだ。かつて一人の宮廷魔術師が、魂約者を軟禁する場所としてラシエルの住む屋敷を使ったように。

「安直だけど、一番可能性は高いと思うぜ。魔族が皆、魂約者を大事にすると思つたら大間違いなんだぞ」

眉を寄せて諭すように語る緋耀は、魂約者を酷く扱う魔族を見てきたのだろう。

「魔族は、魂約者と主従関係になるのよね。彼は、自称私の下僕らしいし」

「……あなた、よっぽど鈍いんじゃないのか？ 魂約者も分からないみたいだしさ。」

魔族が、自ら進んで他者に仕えるっていうのはそうあることじゃない。

ちよつとはそいつに興味を持ってやれよ。俺、段々、そいつが気の毒に思えてきた」

緋耀は、心からそう思っているのか同情的な口調だ。彼は、魔族にしては珍しく感情移入し易いタイプのようだ。

ラルフがラシエルの下僕になることは、会つてすぐに決めた事だった。そのため、実は、最初から緋耀が言うほど深い意味があったわけではない。どちらかといえば、ラシエルを主としたのは、ラルフの面倒くさがりな性格に理由がある。

しかし、何も知らないものからすれば、彼の言うことはもっとも

な考えた方であつたし、非常識なのはラシエルの態度の方だつた。彼女はあまりにラルフに無関心で、彼の自分への態度に無頓着過ぎる。それは、常々、ハインリヒが不愉快に思っていることでもあつた。ラシエルがラルフを軽んじているように見えるのである。

「あまり彼らに構っている余裕は心身ともにならないんだけどね。

まさか、魔族と関わる日が来るとは思わなかつたし。今日も新たに魔族に会うなんて……」

私の同居は召喚魔術の失敗から始まつたわけだけど、緋耀はなんで人の国になんて入つたの？」

人が魔族と関わることを想像することなく、できれば会いたくない、と思うように魔族もまた人と積極的に接近しようとしな

緋耀は、ラシエルを気に入つた様子ではあるが、基本的には魔族も人も嫌っていることが言葉の端々に表れている。彼が自ら進んで人の国に足を踏み入れる理由とはよつぽどのものだろう。

「探し物があつてきたんだ。……魂約者の角をな」

寂しそつに、自嘲するかのよう

に緋耀は苦笑いを浮かべた。掴み損ねた何かを思い出してなのか、視線を通して自分の手のひらを見つめている緋耀を見て、ラシエルの中で罪悪感が湧く。興味本位で聞いて良い内容ではなかつた。

「ご、ごめんなさい。よければ、その……私にも手伝わせてもらえない？」

役に立たないかもしれないけど、人だからこそ出来ることもあると思つし」

申し訳なさから勢いで協力を申し出る彼女に、緋耀はしばらく無言だつた。純粹な驚きのせいもあつたし、すぐに信用することができなかつたのだ。裏切られることには慣れていた。それでも、彼は目の前の存在を信じてみようと思つた。

「いいのか？　ありがとう。」

そつだ。ラシエルは何か望みや願ひ事はないのか？」

「宮廷魔術師になるつていう夢ならあるけど」

叶えて欲しい願ひ事の類ではなかつたが、ラシエルが常に願つてゐることがそれだつた。

「へえ、宮廷魔術師か。意外と野心家なんだな。

今はどんな勉強をしてるんだ？」

「……召喚魔術を勉強してるわ」

ラシエルは、戸惑いながら現状について語つた。宮廷魔術師になりたいのだと言つて、無理だとかやめておけというよつな言葉をかけられないのは初めてだつた。

「それなら好都合だ。召喚魔術なら俺も協力できる。

あんたが、魂約者の角を探すの手伝つてくれるんだつたら、俺もあんたの夢をかなえる手伝ひをしてやるよ」

次に黙り込んだのはラシエルだつた。思つても見ない提案に思考が追ひ付かない。何を言われたのか分からない、という顔をして彼女はしばらく固まつた。

緋耀の言つたことは他でもない。召喚の契約を結ぼうというのだ。紅角族は、魔族の中でも洗練された魔力と戦闘能力を持つ一族である。絶滅に瀕してはいるが、彼らは決して弱くはなく、むしろ強い。魔力を増幅させる角を持つため、味方になつてくれると非常に心強い種族だ。

とはいへ、人にも魔族にも狙われているという、大問題がある。そして、ラシエルは、ラルフを召喚したことで起きた問題で、魔族を召喚するには抵抗を感じている。ラルフたちよりは常識的な思考をしている緋耀に好感を覚えていなかつたなら、すぐに断つていただろつ。契約しようと言つてくれること自体はありがたいことなのだ。

「いいの？ 魔族つて人間に召喚されるのを嫌つてるんだよね？」

「何もただでつてわけじゃないんだ。あんたが裏切ったら無効どころか、俺はあんたを殺す。」

ラシエルは、俺に殺されるようなことをしないよな？」

無邪気そうに見える笑顔がむしろ怖く見え、ラシエルは迷わず頷いた。もちろん裏切るつもりなど微塵もない。

「じゃあ、契約成立だな。ほら、この指輪をやるよ。契約の印だ。この指輪にはめ込まれているのは、俺の角の一部だから、魂約者の角に近づくと何らかの反応を示す。探知機的な役割もあるから、身につけていてくれよ」

ラシエルは、手渡された指輪を目の前に持つてきて紅の石を見つめた。彼女の魔力に反応して、微かに石の色が変化している。蝋燭の炎のように揺らめく光と色にラシエルは魅せられた。装飾品としての価値があるのも頷ける。

「角つて……こんなことに使つて大丈夫なの？」

「昔、ちよつと欠けたことがあつて、その時の欠片なんだ。」

ああ、今はなんともねえよ。再生もしてるし。

ただ、知らない奴の手に渡るのが嫌だったから持ち歩いてただけで

……まさか、こんな使い方をすることになるとはな」

「媒介にも最適よね」

紅角族は角を削っただけでも体調を崩すという話だったが、欠けてもなんとか復活できる場合もあるらしい。欠けた部分が小指の爪ほどだったのが良かったのかも知れない。

召喚する際、召喚対象と繋がりのあるものを媒介にして相手に語りかけることができる。呼び出せる可能性を上げるのに有効的な手段の一つであった。

「そういうこと。じゃあ、俺もう行くな。俺の力を借りたいか、何か角に関する情報を掴んだら連絡してくれよ」

緋耀の派手な髪が店を出ていくのをゆっくり見送った後、ラシエ

ルは椅子にもたれて初めての契約の余韻に浸った。今まで期待していたような儀式的な契約を交わしたわけではなかったが、それでも嬉しいものは嬉しかった。

飲みさしだった冷めきった紅茶を飲んで立ち上がり入口へ向かう。扉を前にしたラシエルを店員が引き止めた。

「お客様」

「はい？」

「お会計をお願いします」

まさか食い逃げなんてしませんよねお客様、とそのマニュアル通りの笑顔には書いてあった。不信感を口調には出さず爽やかな口調の店員の声がラシエルの頭の中で木霊する。

「ちよつ、緋耀！！ お金払っていかなかったのー?!」

ラシエルは悲痛な叫び声を上げた。緋耀が食べた大量のケーキ分のお金なんてラシエルが持ち歩いているはずがない。

本当は緋耀に払って欲しかったラシエルだが、契約したばかりの彼を呼び戻す気にはなれず、家に連絡してもらうことになった。お金を持って現れたのは家計を管理しているハイソリヒだった。家に帰ってから半日に渡って彼の嫌味を聞かされ続けたラシエルだが、緋耀との契約がばれずに済んだことにほっとした。彼女は、新たな厄介事を背負ったという自覚が足りていなかった。

それは憧れではなく

ラシエルが図書館で調べ物を終え帰路についた頃、辺りはすでに薄暗かった。ハインリヒの嫌味を思い浮かべて憂鬱になりつつ歩を進める。今の時期のエイレネの日照時間は最も長い。だが、ラシエルの家の夕食の時間は日没時刻とは関係ないのだ。調理担当のクラウスの愚痴も覚悟しなければいけないだろう。

「今日の夕食って何だったかな……」

「鶏肉の香草焼きだよ。焼き加減はラルフ様任せだから、僕に文句言わないでよ」

独り言のつもりだったラシエルだが、それに返事があったところで今更驚きはしない。

先日街中で緋耀という魔族の少年と会って以来、ラルフたちは護衛と称してラシエルに付きまとい続けた。契約のことは秘密に出来ても、ラシエルが魔族と遭遇したことは隠しようがない。今日の迎えはクラウスの担当だったようだ。

「そうなの。ラルフが焼くぐらいなら、ハインリヒに焼かせた方がましなんじゃないの？」

「君はハインが作った料理を食べたことがないから、そんなことが言えるんだ。」

君は僕らのことを味音痴みたいに言うけど、ハインほど危険な味覚の持ち主はそういない」

ラルフは器用なので、彼の作った料理は見た目は悪くない。が、美味しくないのだ。人間からすれば味音痴なので、味見をしても意味がない。ラルフの作った料理を食べたことがあるラシエルは、ハインリヒにだけは調理をさせまいと誓った。

ラシエルはラルフたちに人間の料理の感想を尋ねたことがあるが、

彼らは特に何とも感じていないようだった。彼らは料理に対して、さほど関心がないようだった。多くの魔族は食に対してあまり執着しない。ほとんど食べなくても生活に支障がなく、味を殆ど意識していないのだ。

ただし、獣の特徴を持つ魔族は、比較的味覚が発達しており味の好みがある。紅角族も、角があるという点では獣の特徴を持っていると言える。彼らは、魔族では珍しく料理に対して関心がある種族だった。また翼を持つリード兄弟の方がラルフよりは美食家であるはずだが、彼らはラルフと一緒に生活していたせいかあまり食べ物にこだわりがなかった。

しかし、クラウドだけは、ラシエルと暮らし始めてから調理法に興味を持ったらしい。元々魔族にしては珍しく、食べる量が多かったのも理由の一つかもしれない。最近では料理のレパートリーも増えてきているようだ。ただし、ラシエルが美味しいと思うものを作れるようになった今でも、クラウド自身が特定の料理や味付けを好むことはなかった。三人に食べ物の好みがないおかげで、ラシエルは好きな料理を作ってもらえる。そう考えると、彼らに妙な料理の好みがなかったのは彼女にとって幸運だったのかもしれない。

「どうせならラルフが迎えに来れば良かったのに。」

家で唯一まともな料理を作れるのはクラウドなんだから」

ラシエルも料理は得意な方ではなかった。

「はあ……そういうことは自分で言っつてよ。僕なんかが、そんなことと言えるわけないでしょ？」

認めたくないけど、君はラルフ様に命令する権限があるんだからさ」
一応ラシエルはラルフの主人であり、クラウドはラルフの下僕に過ぎない。リード兄弟からすれば、ラシエルがラルフに対して口にする言葉は、ほとんどが暴言と言っても良かった。彼女が迎え役にラルフを指名したところで、彼は嫌がりはしても怒ったりしないだ

ろう。

「どうせ来るのが面倒だったんでしょう？」

クラウス、悪いんだけど、私まだ用事があるのよ」

「どうせ僕は君に命令できる立場じゃないからね。付き合おうよ。どこ行く気？」

ここで他の二人なら不満を言うどころか、強制的に屋敷に連れ帰ったかもしれない。しかし、クラウスはラシエルの望みを大抵は受け入れた。彼は、周囲に流されることに慣れていた。自分がしたいこと以外でも、ある程度気に入った者が望むなら協力する。聞こえ良く言えば、他の二人よりは協調性があるのだ。

街の門を出て森へ向かう。パクスの近くにある森は魔物の類は少ないが獣は多く生息している。ラシエル一人で行くには、少々危険な場所だ。

「君、僕が迎えに来ることを想定して、計画を立ててたね……本当によい性格してるよ」

「三人の中で一番親しみやすい、ってことよ」

魔族であるクラウスは、人間に親しみを持たれても嬉しくない。本来ならば。

クラウスはラシエルを呆れたように見つめつつため息をついた。

彼は彼なりにラシエルを気に入っていた。

「一番格下ってことだよな」

「相変わらず自虐的ね……間違いでもないけど、比べる相手が悪いんじゃないの？」

薬草を探しながらラシエルは答える。二人は森の中を歩きながら会話を続けた。単なる暇つぶしに過ぎないそれに互いが顔を合わせるのは必要はない。

クラウスは、魔族に背を向けながら平然としている少女に苦笑した。彼女にとって、自分は警戒する対象ではないのだ。根拠のない、

ただ思い込みによる信頼に近い感情。決してラルフやハインリヒがクラウスに向けられないであろうそれに時々酔いそうになる。吐き気を感じながらも、それを拒めないのは何故なのか。彼はその答えの一部を知っていた。

「護衛なしで近所の森にも行けなくせに、よく宮廷魔術師になるうなんて大それたこと思うよね。周囲が心配して止めたりしなかったわけ？」

クラウスは、最初にラシエルの友人だという令嬢を思い浮かべたが、ラシエルは両親のことを思い出していた。彼女が魔術師の道に進むことに一番難色を示したのは、他ならぬラシエルの両親だったからだ。

「父と母には、もう数えきれないくらい止められたわよ。今だに、パクスの隣町にある家に帰ってこいつて手紙が来るぐらいだし……幼い頃は魔術師の才能があるって褒めてくれたのに、今じゃあ夢を追うのを止めるのに理由すら言わない。」

「とても思いとどまる気にはなれなかった」「子供の頃、オがあるように見えても成長したらそんなことなかった、なんてよくあることじゃないか。」

「僕もそうだった……まあ、よくあることであって、君がそうだとはい意味じゃないけど」

ハインリヒが聞いたら色々な意味で顔をしかめそうな内容だ。クラウスは魔力が弱いわけではないし、戦闘能力も高い。本人にその自覚がないだけなのだが、そこが一番の問題だった。

また、彼が他人に気を遣う様はハインリヒからすれば気持ち悪い。そこは、ラシエルにとっても同じだった。

「何よ？ 珍しいこと言うじゃない。気を遣ってくれなくていいの

よ」

不思議そうに言うラシエルにクラウドスは首を横に振る。

「君の魔力の性質については、まだはつきりとしたことは分かっていない。ただ、少なくとも弱くないだろうというのが僕らの出した結論だよ。」

でも、まあ……君は裏表がないから、宮廷魔術師なんて向いてないと思うけどね。

あれは君が夢見ているような綺麗な仕事じゃない」

ラシエルは、立ち上がり振り返った。深い闇にも近い夜の森でクラウドスの赤い目はほほ黒く見える。感情を宿さない虚ろな視線だったが、ラシエルは彼がからかつつもりでそれを口にしたわけではないと気づく。興味本位で言っているのなら、もっと楽しそうであるはずだ。

「僕は、彼らと戦ったことがあるし、城に出入りしていたからね。もちろん魔族の城だけだ」

ラシエルは、彼の話に口をはさむことなく、無言でいることで話の先を促した。

「宮廷魔術師は正義の味方じゃないんだよ。」

王侯貴族のご機嫌とりをしつつライバルたちを蹴落とす必要があるし、戦場では戦果を挙げて、城の中でも危険な存在を見つけたらこっさり排除しなくちゃいけない。

国や王のために尽くす者ももちろん居るよ。けど、自分のために多くの者を陥れ葬って平気な顔をしている奴の方が出世するのも事実なんだ」

「うん、それはなんとなく分かってる」

「……驚いた。君なら否定するかと思ったよ」

最高の契約者であるはずの主のことを疎んでまで、まっすぐに夢を追う少女。彼女は愚かな子供だとクラウドスは考えていた。宮廷魔

術師になる手段を選ぼうとするのは、憧れからその本質を知らないからではないかと。

ラシエルは、瞼を閉じ言葉を続ける。

「前に記憶の一部がないって話はしたよね。

あの頃のことだと思っただけど、お城で約束した思い出があるんだ。どんな人が相手だったのかも覚えてないのに、“強い魔術師になってあなたをずっと守ってみせる”って約束だけは忘れない。

それってきつと意味があることだと思わない？」

夢を追い続けるのは約束のため。手段を選ぶのは、思い出を汚したくないからなのかもしれない。

「君はやっぱり愚かだよ。相手は……約束のことは覚えていてくれて喜んでいるだろうけど」

ラシエルは少し驚いてクラウドを見た。クラウドにとって、自分と兄、そしてラルフ以外が喜んだことでどうだっていいことのはずだからだ。彼女の視線を気にすることなく、クラウドは言葉を続ける。

「でも、その約束をしたのは“パクス”の宮殿だったの？」

「えっ？ 私はこの国を出たことがないから、そこしかないじゃないかい」

「本当にそうかな？ 君は記憶がないんだから、分からない。」

大事なものは約束なのか、それとも約束した相手なのか……もつとよく考えてみれば？」

クラウドは、集まった薬草が入った籠をラシエルから奪うと森の入口に向かって歩き始めた。首を捻りつつラシエルも後に続く。約束も約束した相手も大事に決まっている。しかし、それらがクラウドに何の関係があるのかラシエルにはさっぱり見えてこなかった。

指輪がもたらすもの

ラシエルが身につけている紅角族の角の指輪は魔力を増幅する効果がある。その手の道具を用いることを嫌っているラシエルが、そんなものを所持していることはラルフたちにとっても疑問だった。しばらく何も言わずにいたのは、彼女の様子を観察するためである。手段を選ばず強くなるうというのなら、それはそれで別に問題ないからだった。

しかし、指輪の効果もむなしく、ラシエルの魔術の威力が上がっている様子はない。

「それは外した方がいい。……お前の身につけている指輪のことだ」「これがどうかしたの？」

契約のことがばれたのかと焦るラシエルだったが、なるべく平静を装って尋ねる。誰も指輪について質問してこなかったので、油断していたのだ。

「手に入れた経緯はどうでもいい。興味がないからな。」

だが、悪いことは言わないから、それは外せ」

ラシエルは思わず指輪を庇うように手を握る。急に真剣な顔をして、指輪を外せと言われる理由がさっぱり分からなかった。

不信感を顕わにする少女に、ハインリヒはため息をつく。ハインリヒとクラウスは、ラルフの言うことの意味を当然理解していた。

「紅角族の中には、その手の装飾品を嫌う者も多いのですよ。」

奴らに会うことなどそうないと思いますが、用心するに越したことはないでしょう」

当たり前のことと言えるが、ラシエルからしてみればそれは予想外の内容だった。紅角族から貰ったものだったからだ。貴重なものを持っていることによる危険は覚悟していたが、紅角族が警戒すべ

き対象になるとは考えもしなかったのである。

「紅角族は、魔族の中でも皇魔族や梟翼族などと並んで残虐な性質を持った種族。

彼らを狩ろうとした中にも酷い死に方をした者が多くいます。自ら命を危険にさらすようなことをする必要もないでしょう？

ただでさえ貴女は弱いのですから」

「僕らが一緒なら、大抵の相手は始末してあげられるけどね。

……貧乏くじを引いて戦うはめになりそうなのは僕なんだから、ちよつとは注意してよ」

ラシエルを心配しているともとれる言葉だったが、彼らが言つとそう聞こえない。

「一族によつて多少は差があるのね。……あんたたちつて何ていう一族なの？」

魔族というのは、魔力が強い複数の種族の総称である。中には人間との区別が明確になされていない種族もいる。

「そういえば、君つてそういうの気にしなかつたよね」

出身地や両親の職業など、人が生まれで多少性質の傾向があるように、魔族は種族にそれが出る。そのため、魔族はもちろんのこと、魔族と関わる人間たちも種族のことは気に掛けるものなのだ。

「安心しろ。……俺たちは、一族にしては温厚な性質の変わり者揃いだからな」

「紅い連中ほどではありませんが、先ほど名前を出した二種族も人数が少ないんですよ。

良かったですね。高貴で希少な一族と出会い同居するという貴重な体験が出来て」

「ちよつと、それつて……」

いかに鈍いラシエルでも、彼らの種族の見当はついた。

「今更、知つたところで現状が変わるわけでもないだろう。」

……俺の一族は、紅角族からすれば憎悪の対象だ。

お前が俺の魂約者だというだけでも、お前は奴らから逆恨みを買ってもおかしくない」

今や一つとなった魔族たちの国。しかし、統一されるまでに敵対した者同士の確執がなくなつたわけではない。人間との大規模な戦争が長期間起きていないため、内部での争いは余計に酷くなつていった。敵が外部にいなくなつたせいで元々ないに等しかった結束が余計に綻びたのである。

「紅角族はかつてその角の効力を一部の種族以外には隠していたのですよ」

「彼らと同盟を結んでいた皇魔族たちは、紅角族が邪魔になると同時にその情報を周囲に流した。

紅角族の欠点は人数が少ないことだけじゃなくて、情に脆いことなんだよね」

あまり紅角族に詳しくないラシエルでも、クラウドの言うことは納得できた。緋耀は、情に脆そうだった。聞こえ良く言えば、義理堅いということだ。それゆえに、裏切り者や大切な存在を奪つた者に対しては無慈悲で残酷な行動に出る。

「騙され易いんですよねえ。あれだけ酷い目にあつたというのに、未だにそういう愚か者がいるのが信じられませんかよ」

多くの魔族にとって、他者を信用するなど愚行であり、理解し難い。それは、ハインリヒにとっても同様だった。

ラシエルは悩んだ末に、指輪はしばらく自室の机の引出しにしまふことにした。余計な詮索をつけないうちにも、身につけるのはやめた方が良くと思ったからだ。

もちろん、ラシエルは、緋耀を裏切るつもりはなかった。ただ、

同時に、ラルフの存在を知った時、緋耀が自分を嫌わないという確信は持てなかったのである。また、ラルフたちとの関係が崩れるのも好ましいことではない。

ラシエルには自分がデュスノミアだという自覚は未だない。一方、ラルフたちは、彼女にデュスノミアの片鱗が表れつつあるのを感じ取っていた。

やる気の無い人たち

日が沈みかけると同時にパクスを出て行く一行がいた。隣町の親戚の家に用事があるアマーリエと、その護衛役に抜擢されたラシエルたちだ。実際依頼を請けたのはラシエルのみだったが、当然のようにラルフとクラウスが一行に加わった。

「なんでハインリヒは留守番なのよ？」

魔族と一緒に暮らしている事実を隠したいラシエルとしては、ハインリヒ一人だけで家に残すのは不安だった。クラウスを残すよりはましな気がするが、彼の兄も油断は出来ない。しっかりしているも、魔族は人と考え方が異なる点が多いからだ。

「ハインはあれでも暇じゃないんだ。僕は戦場で辛うじて役に立てるだけの存在だけど、ハインは違うからさ」

「俺からすれば、お前たちが未だに仕事を続けているのが不思議だな」

ラルフの一言に沈黙が落ちる。

兄弟が仕事をしていることはラシエルから見ても気にはなっていたことだった。彼らの上司にあたるラルフが仕事らしきことをしているのを目にしたことがなかったからだ。

あんまりなラルフの言葉に、しばらく何も言えなかったクラウスだが脱力しつつも口を開く。

「僕たちは仕事を辞めたわけではないんですよ。ただでさえ貴方が失踪して騒ぎになったんです。急に職務を放棄したり辞任とか言いだしたら、それこそ何か企んでいるのではと疑われます。」

もつとも、ラルフ様が謀反を起こすつもりなら止めませんし、我々も従いますが」

ラルフは、ラシエルの召喚によって呼び出されてから今まで一度

もパクスから出たことがなかった。もちろん自分の家にも帰っていないし、職場にも顔を出していない。無責任極まりないが、ラルフ本人はそのことを気にもとめていなかった。彼にとっては、仕事は自分の中でさほど重要な事柄に含まれない。

「……………面倒な」

「面倒とかそういう問題じゃないと思うけど……………ちょっと、不安になってきた」

「あんたの言ってることもずれてるわよ。多くの魔族を敵に回す可能性があるってことでしょうが！」

アマーリエの冷たい視線がラルフとラシエルに向く。しかし、護衛を頼む相手を間違えた、と今更思いはしない。最初から分かっていたことだからだ。

召喚魔術を暴走させるラシエル、まだ謎の多い魔族主従、皆旅のお供には問題がある。分かっているても、魔法学校へ護衛を依頼して寄こされたのがラシエルなのだから仕方がない。それに目的地が近くだから大丈夫だろうと思ったのだ。

「その通りだよ。君、ラシエルの友人なんだろう？　なんとかしてよ。」

僕が悩むのはラルフ様のことだけで十分過ぎるんだから」

唯我独尊でやる気がない主に、天然ボケの暴走娘がおまけにいた。ラルフとラシエルに自覚は皆無だったが、リード兄弟にとつて二人の存在は頭痛の種だった。それでも裏切ったりしようと思わないのは、それなりに利点もあったからなのだが……………

「私は、これからの旅を考えただけで嫌になってきたわよ」

「大丈夫だって、ラルフは強いし。たぶんクラウドスも」

「だから……………そういう意味じゃないわ」

パクスに引き返したくなってきたアマーリエの隣でクラウドスは諦めの溜め息を吐いた。

今回の旅は往復半月ほどの短いものだったが、ラシエルにとって収穫はあった。クラウスが予想以上に戦闘では役に立つと確信できたことである。

普段は自虐的で頼りない存在だが、両手に剣を構えて戦う様は頼もしい。小振りの一対の剣が敵を屠る速度はすばやく素人のラシエルでは動きを追うことが出来ない。どちらかというところ力よりもスピード勝負で戦うタイプのようだ。

「あのさ、さつき僕らが強いって言った時も思ったんだけど……君は戦わないの？」

昼間よりもクラウスが元気そうに見えるのは夜だからだろう。夜間に移動するのは魔族である二人のためではないが、確かに彼らは昼間よりも生き生きして見える。一方ラシエルは普段よりは大人しく見えた。日差しのきつい時期のエイレネでは、昼間に出歩くなど自殺行為。それでも、人は本来日が出ている時間帯に行動する生き物なのだ。

「参戦してもいいけど、サラマンダーぐらいしか呼び出せないよ」「進歩が無さ過ぎるよ。まさか、召喚魔術を使う魔術師は、召喚だけできればいいと思っただけじゃないかね？」

一般的には、別に戦う手段を持っているのが普通である。何故なら、召喚対象が術者に牙を向くこともあるからだ。そして、自分に戦闘で勝利することを召喚の契約条件とする者もいる。ある程度の戦闘能力、より良い条件で契約を結び召喚対象を戦場で生かすだけの知恵。それが召喚魔術師には求められる。

「無駄だ。どっちにしても、そいつは攻撃系の魔術が絶望的に下手なんだぞ。お前よりもな」

「ラシエルと君……二人とも、邪魔だから、後ろで大人しくしてればいいよ」

アマーリエは何も言わず後ろに下がった。もともと彼女は護衛さ

れる側なので、戦わないで下がっていることは当たり前だ。

「実技練習が足りないのよね」

「それは……まあいい。帰ったら訓練に付き合っただけから、実戦ではまだ使っただけ」

「さっき使っただけって言ったところだろう……」

ラルフは、もう夜が明けたからもあつてか、気だるそうにぼやく。そろそろ日を避けて休憩を取る準備をしなければいけない。

「だって、クラウドが危なかったんだもの」

「いや、むしろ君の攻撃のせいで僕ロボロボなんだけど。」

これならまだサラマンダーを呼んでくれた方がましだったんじゃないかあ……」

ラシエルの炎の魔術に直撃したクラウドは、衣服を魔術で直すのを諦めて着替えることにした。あまりに焦げすぎていて修復するのが困難であるためだ。

「サラマンダーって、一昨日ラシエルの家で見ただけの赤いトカゲのことじゃないわよね」

「うん、そのことよ。……一応、火の精霊なの。あれでも」

ラシエルは、あのサラマンダーのことを可愛がっていた。しかし、彼がサラマンダーとしてはまだ幼く戦闘ではまったく役に立たないことぐらいは分かる。召喚できても自慢にはならない。

「最初に比べたら、少しは成長していたじゃないか。」

そのうち、強いサラマンダーになるかもしれない」

珍しく今回のラルフのフォローは的確だ。

サラマンダーは脱皮して成長する。以前手のひらサイズだったが、今ではラシエルの腕ぐらいの大きさになっていた。想像以上の大きさの変化だった。やはり普通のトカゲや蛇とは生態が異なるのだから。

「その前にラシエルのせいで死ななきゃいいけどね」

「不吉なこと言わないでよ……」

可愛いサラマンダーの姿を思い浮かべ、クラウドの言葉に嫌な気分になる。立派に成長したところを想像した直後だったので、余計だった。

「もうどうでもいいけど……いい加減にしてくれないかしら？」

これじゃあ、いつ隣町に着けるか分からないわよ」

アマーリエは、そこら変の魔物や夜盗と戦闘するたびに長引く会話にうんざりしてきた。どう考えても、まともに旅をする気があるのは彼女だけだった。

疑心を抱く者

ラシエル一行は、パクスを出て五日が経過する頃にはなんとか最初の方の遅れを取り戻せていた。今回の旅の目的はアマリーエの私用で、ラシエルでさえ詳細は聞かされていない。ラルフたちも関心がなかったたので、特に知ろうとしなかった。しかし、道中は退屈で興味がなかったことも尋ねてみようという気にもなる。

「君って貴族のお嬢様なんでしょう。なのに、なんで馬車で移動にできなかったの？」

ラルフほど面倒くさがりでなくとも、楽が出来るならそちらを選ぶのが人というものだ。それは魔族も例外ではない。

「ラシエル……説明してなかったのね」

アマリーエは、私用以外で馬車を使うことを嫌っていた。どうしても家の名前を背負ってしまうし、貴族仕様の馬車は目立ってしまうからだ。

本当は行商人の馬車に乗せてもらいたかったが、この時期はそうもいかない。隣町のフローラは、かつて大きな力を持ったとされる神族の女性フローラを祀る信仰に熱心な町である。民は質素な生活を好むためにあまり外から入ってきた物は売れない。その上、今は豊穰の祭を目前にしており、町の出入りは厳しく制限されている。紹介状を持つ者しか入ることが出来ないのだ。

話を聞いたクラウスが嫌そうに顔をしかめる。神族を尊い存在として崇める思考を魔族は嫌悪しており、自分たちがそんな町に向かっているとは知ったからだ。ちなみにパクスにも神殿があるため信者は多いのだが、その多くは貴族であり一般市民の信仰心は低い。

「なら、僕たちは町に近づく前に身を隠した方がいいかな」

「仕方ないな……ばれたら面倒だ」

フローラは作物の収穫に適した地域にあり、多くの者は農業か園芸に携わる職についている。今では町中での栽培は禁忌とされているが、あの薔薇の花……ニクスメイデイもフローラで生まれた。

町に近づくと広大な畑と鮮やかな色彩が視界に入ってくる。そんな中、明らかにフローラの町に不似合いな一団があった。黒い甲冑に身を包む彼らの容貌は皆どこか人とは違う。

「嘘……なんでこんなところに魔族が？」

動揺するラシエルとアマリーエと共に魔族二人にも緊張感が走る。民間人ならともかく、魔族の軍人が人間の領土に足を踏み入れるのはそう滅多にあることではない。今は仮にも休戦中なのだ。人間であるラシエルたちには遠過ぎて見えないが、魔族である彼らには甲冑に刻まれた魔族の王家の紋章が確認できていた。

視界を遮る者がいない草原で互いに気づかないはずがなく、甲冑を着た男たちもラシエルたちの様子を伺っている。面倒事は嫌いなラルフでも、彼らを見無視することはできなかった。珍しく先頭に立って歩き出したラルフに他のメンバーも続く。

魔族たちはラルフたちのことを知っているらしく、数名がラルフがクラウスの名を呟くように口が動いた。多少なりとも驚きが混じっていたようだ。双方共に人間の領土で会うことになるとは思っていなかったのだろう。

「何があった？」

いきなりのラルフの問いに戸惑うことなく一人の青年が前に出て口を開く。青年がこの隊の隊長のようだった。

「ラルフ様、クラウス様……お久しぶりでございます。

先日、パクス王家側からはぐれ魔族が現れたという報告を受けたので、探しに来たのです」

はぐれ魔族というのは、人間の領土へ不法侵入した魔族を指す。昔は魔族側に規制が設けられていなかったため人間側で対処するし

かない対象だったが、今は違っていた。

「その人が？」

横で傍観していたラシエルがラルフの横から顔を出して尋ねる。男たちの中心で一人の男が取り押さえられていた。

「いいえ、彼もはぐれ魔族には違いありませんが、報告にあつた者とは違うようですよ。」

「こちらは？」

「俺の魂約者だ」

ラルフと共に行動していたため最低限の敬意は払っていた青年だったが、人間相手と少なからず侮っていたのだろう。慌てて非礼を詫びる。ラシエルは首を傾げたが、青年は気にしなかったようだ。

「見つかったんですね。……本当におめでとうございます！」

陛下もお喜びになることでしょう。もうお知らせになったのですか？」

「いや……必要ないだろう」

「僕は一応報告した方がいいと思いますけどね」

単に面倒なだけであろう主にクラウドは溜め息をついた。一方、ラシエルたちは事情が飲み込めずに混乱していた。何故、態々ラルフの魂約者が見つかったことを魔族の皇帝に言う必要があるのか？

口を挟もうとしたラシエルの前を閃光が走った。捕らえられていたはずの男が短剣を投げたのだ。攻撃対象だったらしいラルフは平然とそれを手でつかんで受け止めている。

いつの間にか拘束していた縄から逃れていた男は、続けて炎の魔術を周囲に放ち囲んでいた軍人たちから距離を取った。そのまま逃亡するかと思われたが、どうも彼の標的はラルフであるらしい。

再度こちらに近づいた男は、クラウドによって行く手を阻まれる。男の放った魔術は、クラウドの短剣によって弾かれる。武器で魔術を弾くのは一見簡単に見えるが、容易にできることではない。攻撃

の軌道と魔術の正確な内容を把握していて、なおかつ高い命中率と的確な速度で動くことができる能力があつて初めて可能になる。

「ラルフ・クラウディウス……魂約者を欠く皇子。」

魂約者を見出したとあつては放つておくわけにいかない。

陛下の御世のため不安要素は取り除かなければ」

「へえ、それが狙いでこの周辺に潜伏していたんだ？」

大して興味もなさそうにクラウスが尋ねる。それぞれ理由は違つが動揺する人々の中で、クラウスとラルフだけは冷静だった。彼らにとつて、驚くような要素はこの状況で存在しないから当然だ。

「……まさか、ケイオスの一族で忠義心などを持つ者がいようとは」
クラウスの反撃にあつて負傷した男に殆ど戦意は残っていないようだ。もともと、高い魔力を保有するクラウディウス家の直系であるラルフとリード家のクラウス両者を同時に相手にして勝ち目はなかった。

ケイオスというのはリード家のかつての家名である。混沌を愛するケイオス家は、クラウディウス家との長い戦いに敗れた後、勝者に従つと誓つた。ケイオス家は、クラウディウス家に繋がれその意に従つという意味を込めて家名を「リード」と改めたのである。しかし、ケイオス家は鼻翼族であり、野心家が多く不義理であつたため裏切り者が後を絶たなかつた。優秀ではあるが、いつ裏切るか分からない。それがリード家の者たちに対する周囲の考えだったので。「クラウスは忠臣という柄でもないと思うが」

「ラルフ様は僕らの行動を制限しないばかりか、面倒だからという理由で多くの権限を与えて下さつてますからね。」

それに……力の差が歴然としているラルフ様を裏切つてまで欲しい地位も権力も別にないなあ」

結局僕らはラルフ様が好きなんですよ、と続けるクラウスにラルフは顔を顰める。

「性質の悪い冗談だ」

「ラルフって皇子様だったんだ？」

「……一緒に暮らしてよく気づかなかったわね」

呟くラシエルにアマーリエが突っ込みを入れる。

「血筋に固執しない魔族にとってはあまり意味のない立場だがな」
「だからって、それなりの立場にいたのよね。仕事さぼって問題ないわけ？」

返答しない主に代わり、「良くはないけれど」と言ってからクラウスは事情を簡単に説明する。

「魔族の国家統一に貢献はしたから、後は放置してても陛下は何も言わなかったんだよ。」

単に諦めてるのかもしれないけど」

ラルフのやる気の無さは周知の事実であり、彼をよく知るものは諦めていた。中にはラルフの言動は演技ではないか、と疑う者も少なからずいたがラルフの真意を探ることは徒労に終わった。

真意もなにも、ラルフは自分に正直に生きている。いくら面倒くさがるのラルフでも、稀にだが真面目に行動する時もあるのだ。それが、疑われる理由の一端になっていた。

「皇帝はラルフさんの父親？」

「いや、弟。前皇帝が兄」

「なるほど。それで、弟に帝位を奪われたラルフが帝位を狙っていると思ってる人がいるわけね」

アマーリエは納得して頷き、それにラシエルも続く。

「ああ、そういうこと」

「力はラルフ様の方がありません。なのに、ラルフ様は帝位を継ぐうとはしなかったのです」

魔皇軍の小隊長は残念そうに語る。それは現皇帝に対して不敬ともとられる言葉だが、事実であった。

「何か裏があると疑われても仕方ないわねえ」

「でも、実はなかったのね？」

数ヶ月ラルフと一緒に暮らしてきたラシエルは、ラルフの立場は気づかなかつたが彼の性格はある程度把握していた。

「あるわけがないよ。」

ラルフ様を陥れることが出来る人なんて、あの頃の城内にはいなかった。

兄弟仲は悪くなかつたし、何よりラルフ様は帝位に興味なんてなかつたからね」

ラルフに攻撃を仕掛けた男は、当たり前のように話すクラウドとラシエルを怪訝そうに見ていた。

「し、しかし、それは魂約者がいないことを気にしていただけで、今はその問題が解決されてしまった。」

普通に考えたら、帝位を狙うはずだ」

「愚考だね。その頭は飾りなの？」

ラルフ様が謀反を企むなんて、あり得ないよ。

この方には魂約者を得ても欠けているものがある。

それは、やる気さ」

「野望ほどラルフに似合わない単語もないわよねえ」

たとえラルフほどの力の持ち主であろうとも、野望を叶えるにはそれなりに手間がかかる。皇帝の地位が望みなら、叶えた後もやらなければいけないことが沢山存在する。そんなことをラルフが望むわけがなかった。

「なんだか良いのか悪いのか微妙ね……」

「デユスノミアを魂約者に持つて生まれた男がなぜこうも……」

アマールイエと魔族の男の喧きは空しく響いた。内容を否定できるものは誰一人としていなかった。

男は連行されたが、ラルフの計らいで罪を軽減された。本当にラ

ルフの謀叛を疑い阻止しようとしただけなら、男には価値があると判断を下したからだ。多くの魔族が未だ混沌を望む中で、今の皇帝の治世が続くことを願う人材は貴重なのである。今はまだ戦場へ赴く気になれないラルフにとってもそうだった。

罪深き薔薇は薫る

色とりどりの薔薇を前に、アマリエはうつとりと溜め息を吐いた。ラシエルは、それを呆れたように眺めている。薔薇はラシエルの庭に沢山咲いており、見飽きているからだ。

「目的の品は手に入りそうなの？」

自分の世界に入っている友人に対する言葉はどこか冷たい。

「ええ、時期が悪いかと思っていたのだけれど、三日ぐらいでなんとかなりそう」

「仕事のためっていうより、自分の趣味よね、それ」

「そうでもないわ。フローラで取れる薬草が高品質なのは事実だもの」

アマリエは薬師の資格を所持している。開業しているわけではないが、他の薬師に頼まれて薬を処方したり、患者の治療の手伝いはしているらしい。また、魔力ある薬草に関心があるようで、霊薬の製法も研究中のようだ。そんな彼女の行動に身内は良い顔をしないが、本人は気にしていなかった。

今回は薬草と薔薇が目当てでフローラに来たのである。フローラの薔薇は霊薬の調合に必要なのだ。

ここにはニクスメイディこそないが、他にも珍しい薔薇が多く栽培されている。

「妙だな……この香は」

「ラルフ？」

背後の呟くような声の主にラシエルは振り向かずには話し掛ける。

町中に入るのは遠慮しようとしていたラルフたちは、結局中に入ってきていた。はぐれ魔族がラシエルたちと遭遇することを警戒していることである。

「気づかないの？ この町は、ニユクスメイデイの香りがする」

「まさか。だって、あの薔薇はここでは禁忌なのよ」

嗅覚が鋭いクラウスが真剣な顔をして言っているのにラシエルは困惑の目を向ける。クラウスが嘘をつく理由に心当たりがないからだ。

宿に着き迎えた一泊目の夜、咽返るような強烈な香りにラシエルは目を覚ました。それは悪い匂いではないのだが、強過ぎて頭が痛くなるほどだった。疑いようがないほど馴染んだ香り。ニユクスメイデイのものだ。昼間はそんなはずが無いと思っていたラシエルだが、これだけ香りが強ければ否定できない。

「アマーリエも起きたのね」

「流石にこれは酷いわ」

一体どうなっているのか気になった二人はまず外の様子を窺った。町中は明かりのついている家も殆ど無く、静まり返っている。部屋の中から見えている限りでは、皆寝てしまっているようにしか見えない。

ラシエルが廊下に出ると、ラルフたちが既に二人を待っていた。

クラウスは嗅覚が鋭いせいか、口元を布で覆って不快そうにしている。

「一体どういうこと？」

ラシエルが問うが、当然ながらその場に答えを知る者などいない。ラルフが面倒くさそうに首を振っただけだった。

「宿の客は皆この香りで眠ってしまったっているようだ。」

恐らくお前たちに効果があまりなかったのは、嗅ぎ慣れているせいだろうな」

ニユクスメイデイは睡眠を促す。深い眠りに囚われた者は、そう

簡単には目覚めない。宿には、意図的に夜の女王の香りが満たされているようである。しかし、狙いが分からない。ラシエルたちの荷物が狙われた形跡は無いし、宿の中で彼女たち以外に動く者もいない。

「宿の外も、似たような感じだよ。薔薇の香り、特にニユクスメイデイの香りが充満してる。」

これで、平気なんて皆どうかしてるよ」

さっさと町から出て行きたいと言わんばかりに、クラウドは喚き立てた。傍目から見れば情けないことだが、本当に苦痛らしく目には涙が滲んでいる。

この日は、様子を見るということで四人は同じ部屋で休むことにした。ラシエルとアマールエが一つの寝台を共有し、もう一方はラルフが使う。ラルフが、クラウドを気遣うという展開はなかった。ラシエルは、少しは気にしていたが、自分より立場が上の者を床で寝させるわけにいかないと辞退したのだ。

部屋には結界を張り香りが入ってこないようにしてから眠りについた。寝台は二人で使うには狭かったが、先ほどの香りに比べればましと言えた。

翌日、ラシエルは明るい内から町の人の様子がおかしいことにも気づき始めた。恐らく昨夜生まれた不信感から、周囲を警戒していたためだろう。

町中には虚ろな目をしている者が多く、皆何かに憑かれたかのようになり必死で働いている。真面目に仕事をしているというよりは、別のことに取り取られているのに手だけは動いているように見える。

「中毒患者の集まりだね、ここ」

「まさか、ニユクスメイデイの？」

ニクスメイデイは加工すると麻酔作用を持つ薬物になり、使用には副作用が伴う。生花のままでもあらゆる効果を発揮する危険な花だが、加工することによってより危険な存在となる。

ただ、ここフローラでは栽培そのものが禁止されている。本来なら、この町であの薔薇の香りがするのはありえないことなのだ。

「禁断症状が出ているものは少ないから、そうともいえないだろう。使用量を調整している者がいるということだから、余計に厄介とも言えるが」

「戦争中でもないのに、一体何のために？」

「俺の知ったことではないが、一つ確かなことがある。

面倒事だ。関わらない方がいい」

相変わらずのラルフの言葉に、一行は溜め息をついた。しかし、誰もそれに否を唱える者はいない。関わりたくないのは、皆同じだったからだ。

ニクスメイデイの主な禁断症状としては幻覚が挙げられる。徐々に集中力が続かないようになり注意力が散漫になってくる。気分が滅入り始めると憂鬱な状態が続くようになり、苛立ちなどの負の感情が頭の中を占領。最終的に、幻覚が見え始めるようになる。

痛みの緩和。（正確には麻痺して分かりづらくなるだけだが）集中力の向上、気分の高揚、前向きで建設的な思考。（一時的なものだが）プラス面の効果もあるにはあるが、それも特定の状況下で知識があり管理するものがちゃんという状態で行われてこそ有効な薬となる。

今回の場合、状況が問題だ。ニクスメイデイが存在するはずのない町で、町民全体がその薔薇の薬を使用しているのである。町全体での使用というのはまだ仮定だが、町のどこかで使っている者がいることは間違いなかった。しかも、管理する者がいるということ、組織だった犯行になる。

ニコクスメイディに関与せず、町を去るというラシエルたちの望みは滞在三日目にして消えた。アマーリエが失踪したのである。

残された三人は、夜になるのを待って捜索を続行することにした。危険を伴うが、異様な事態が起きているのは主に夜のようだったからだ。アマーリエは放置して町を出ようというクラウドの案は、もちろんラシエルによって却下された。

「なんで僕がこんなことを……」

香の発信源を探るのは、嫌がるクラウドに任せる。彼は心底嫌そうにしながら、二人の前に立って歩き始めた。場所を特定するのは、そんなに難しいことではなかった。

町の中央にある神殿の奥から、それは漂ってきていたのである。相手は、薔薇の力を過信していたようで、ラシエルたちが夜に行動するとは思っていなかったのだろう。見張りはほとんどおらず、騒ぎを起こすことなくラシエルたちは内部に潜入することができた。

「アマーリエ！」

神殿の地下に一杯に広がるのは、赤紫色の薔薇だった。中央には開けた場所があり、何やら魔方陣のようなものが描かれている。アマーリエはその上に横たわっていた。意識はないようだ。

アマーリエの側に立つのは一人の男。この神殿の神官だった。ラシエルたちも町に入る際に、一度だけ会っている。

「これはこれは、新しい生贄が自ら来てくれるとは助かる」

「神殿の神官長殿が犯人だったとはね。」

秩序を尊ぶ神族の信者が、古の邪法の真つ最中なんて呆れるよ」

「邪法？」

生贄を用いる魔術は、邪法もしくは禁呪として使うことを禁じられている。魔族では法律で制限こそされていないが、使う者はほと

んどいなかった。

夜の闇を愛するニユクスメイデイですら、植物の一種。本来なら日の光の射さない地下で育つのは困難なのである。この大量のニユクスメイデイを育てるために、生贄を用いる邪法を使っているのだらう。

薔薇の影から出てきた人々が三人に近づいてきて悲鳴を上げて離れる。ラルフとクラウスは、明らかに操られている人間にも容赦はなかった。正気を失っている人間は力が強くスピードは速いが、それだけだ。倒すのは簡単だった。

「やつと……まともな助けが現れたか……」

「町長さん？　なんで貴方までここに」

地下室の壁に鎖で繋がれたボロボロの男の存在にラシエルは初めて気づいた。以前、町に来た時に会ったことがある町長の変わり果てた姿に、ラシエルは驚きつつ近づく。

ラルフとクラウスに神官とアマリーエを任せてラシエルは町長に事情を聞くことにした。

神官長は、その職につくまでは誠実で高潔な神官だった。そんな表向きの顔に騙されて、皆は彼の過去の傷を忘れていた。男は若かりし頃、恋人を失っており、彼女を精神的に追い詰めたのが町の人々であったことを。恋人の女性は、あのニユクスメイデイの生みの親その人だった。夜の女王をこの世に出した責任を問われ、町の人々に責められ続けた彼女は、最期、自らが作り出したニユクスメイデイの薬を服用して自決した。

「彼女を必要以上に追い込んだのはわしらの責任じゃ。」

何も、悪用するために作ったわけではなかったのだから……だが、あの薔薇の為に一時期町が追い詰められていてな。皆、誰かを悪者にしなければ、やってられなかったんだらう。わしも、その一人だった」

ニユクスメイデイの効能に最初に目をつけたのは軍だった。戦争で使う為に、大量のそれを欲した軍によって町は占領。他国との取り合いも発生し、町は荒れに荒れた。

「そう、彼女を追いつめた者達に復讐を。

そして、私はこの薔薇の力を証明したかった。

最も恨みがある相手だが、町長にはそれを見届けて貰わねばならぬ」

クラウドに取り押さえられた神官が町長に向かって言う。彼もまた正気を保っているようには見えない。

夜の女王を大量に栽培すれば、巨万の富を築くことも可能だった。実際、ここ数年町は着実に発展を遂げている。裏でニユクスメイデイの取り引きが行われていたのだ。

それを隠すために町の人々にニユクスメイデイを使って強力な暗示をかける。故に皆、虚ろな目をしていたのだ。

「彼女は、女神フローラそのもののような人だった」

「神族は確かに時に残酷だけど……こんなことを望んだりしないわどこか遠くを見つめて呟く神官に、目を覚ましたアマリーエが苦笑しそうに言う。無事であることにラシエルはほっとした。

「彼女は……優しく優秀で……植物に対する姿勢は熱心で誰よりも真剣な女性だった。

その彼女が、今のような使い方をすることを望んでいるとは……わたしには思えないが」

「ああ、でもこうでもしなければ、町にこの薔薇を取り戻すことなど出来はしない。

彼女が愛した薔薇でこの町を満たしたいのに、貴方たちは、ニユクスメイデイの栽培を禁止してしまった。

こうすれば、ニユクスメイデイの側にいれば、彼女はずっと私の傍らにいてくれる」

ラシエルの呼びだして連れていたサラマンダーが火を放つ。湿気の多い地下であつても、魔力ある炎は勢いを失うことなく周囲に燃え広がった。

「薔薇がっ！ 彼女の薔薇が……なんてことを」

灰に変わってゆく薔薇の前に、神官は泣き崩れる。夜の女王の香が余計に彼の感情を揺さぶっているのだろう。彼の言うことにまともりが無いのは、頭が上手く働いていないせいだ。

神官だけを残してラシエルたちと町長は地下を後にした。

「幻に囚われたか、愚かな」

神殿を出る時にラルフが吐き捨てるように言った言葉は、彼には珍しく感情がこもったものだった。ラルフは、その神官の狂った姿に知人を重ねていた。恋情ゆえに狂った哀れな男の姿を。その男もまた炎の中消えていった。

「夜の女王に誘われ、狂気に染まる者は珍しくない。

あれは、使い方を間違えれば危険な花だからな」

デウスノミアもまた夜の女王と同じような毒がある。それをラルフは知っていたが、それを口にするとはなかった。

「あんたは、それを私にくれたことがあつたと思っただけ……」

「言っただろう？ 使い方さえ間違わなければいいんだ」

ラシエルたちは、翌日町を出た。アマーリエの手には町長から謝礼にと貰った大量の薬草がある。四人は疲れた顔をしていたが、この町にこれ以上滞在しようと言いだす者はなかった。町の人の不思議そうな視線を受けながら四人はさっさと町を後にした。

ラルフの結界によって四人は無事だったが、町の皆はそうはいかない。火の手が地下から地上に上がってくることはなく、死傷者は出ずに済んだ。ただ大量のニクスメイデイが燃えたことで、その香りの被害を受けたのである。町の民はここしばらくの出来事をほとんど覚えていなかった。

しかし、それは幸運だったのかもしれない。おかげで町はかつての平和な状態を取り戻し、事件の真相は町長とラシエルたちの胸の内に仕舞われた。

法の象徴を追って

ラシエルたちがパクスに戻って数日。彼女たちはフローラでの出来事を忘れ平穏な日々を送っていた。それが再度、新たな任務によって乱されるなど誰が予想しただろう。ラシエルはまだまだ未熟な魔術師見習いであるばかりか、落ちこぼれなのである。そんな少女に立て続けに依頼が来るなどあり得ないことだ。

ラシエルに学園側から新たな任務が言い渡されたのは、アマール工の依頼から一月も経たない内のことだった。任務は盗まれた“デイクの天秤”という魔道具の奪還である。デイクの天秤はエイレネの国宝。どう考えてもラシエルに任せられる仕事ではない。

「陰謀の匂いがするよね」

クラウスのネガティブな一言はいつものことだが、これには他の三人も同意せざるを得ない。

「でも、私なんて陥れても何もよいことなんてないと思うけど」

「ラシエルがどういう人物なのか試そうとしているとも取れます。

国宝はその餌といったところでしょうか」

「魔族を召喚できる危険人物が何か企んでないかってこと？

……冗談じゃないわ」

企んでいたなら面白かったのにね、と言うクラウスをラシエルは睨みつける。

「デイクの天秤なんてガラクタ、今時欲しがるような奴の方が珍しいだろう」

正邪を判定する天秤は、法の象徴でもある。天秤を前にした人物の罪を判定するのが天秤の能力だが……残念なことに、その力は殆ど失われている。魔道具は耐久年数があり、永遠に使えるわけではないのだ。ゆえに天秤は、今では実用は不可能であり、あくまで秩

序を保つ法の象徴としてのみ存在していた。

「魔道具をどうするかというよりは、搜索する様子を見るのが主旨
かもしれません。」

面倒なことに変わりはありませんが」

「断れない依頼だし、とにかくやれるだけのことをやるしかないわ
ね」

ラシエルは魔術の勉強に励んでいた方が何倍も楽しいと思いつめ
息を吐いた。

天秤の行方を知るのには意外と簡単だった。国宝には目印の呪いが
かかっている。結果によって正確な位置を判断しかねる状況らしい
が、大まかな方角ぐらいは知ることが可能だった。簡単に行方が分
かったことで、誰かの畏なのではないかという疑惑は深まる。

「今回の留守番はクラウドスのね。大丈夫なの？」

「仕事は終わらせてきました。」

留守番ぐらいならクラウドスでも大丈夫でしょう」

酷い言われようだが、クラウドスはあまり頭を使うのが得意ではな
いので仕方ない。デスクワークはインリヒが担当している。

「帰ったら屋敷内が血の海だったなどということはあるまいな。」

……片付けるのが面倒だ」

ラルフにとって、血を流した相手が誰だろうとどうでもよかった。

本気で片付けが面倒だとしか思っていないのだ。

「クラウドスが危険だっというのが未だによくわからないんだけど」

「そつえば……貴女の前では大人しいですね」

ラシエルにとって、クラウドスはネガティブで大人しいが戦闘能力
は高い皮肉屋という認識しかない。クラウドスの狂気を目の当たりに
してきたインリヒやラルフからすれば、最近のクラウドスの様子は
異常とも言えた。

「クラウドスに限らず、ラシエルの側にいると魔族は負の感情を喪失

しやすいらしいからな。

お前も心当たりがあるだろう」

「ラルフ様は理由をご存知で？」

「確信はないが」

いきなりのラルフの言葉に、訳が分からないという顔をしているラシエルと違いハインリヒは納得したように頷いた。

「何よ、それ。私から何か出るとでもいうわけ？」

「その発想は間違いではないな」

「良いではないですか。悪い効果があるわけでもなし」

「あのねえ……そんなこと言われたら気になるでしょうが」

ラシエルがいくら訊ねても二人はその話を続けようとはしなかった。ラルフは単純に説明するのを面倒だと感じていたし、まだ確信を持ってはいなかったからだ。

三人は、借りた馬に乗りパクスを出た。今回も目立たない方が良いのだが、急ぐ必要があったからだ。行き先は、パクスの南に位置する街、ハルモニアである。

十日ほどで町に着くことが出来た。ハルモニアは、そこかしこから怒号や喧騒が聞こえてくる騒がしく荒っぽい印象を受ける。それでも無秩序な訳ではない。街はハルモニア軍の総帥とその指揮下にある軍隊によって治められている。罪を犯した際の処罰が厳しいため小さな争い事は絶えないものの大きな事件は起き難い。そういう町だった。

ハルモニアはエイレネの一部というより、エイレネに従属する小国とっていい。独自の統治権を有する軍隊が治めているからだ。

ハルモニアには自警のための軍隊が存在する。そんな特殊な軍隊が生まれ、存在を許容されているには訳があった。エイレネの海軍

があまり戦力を持たないからだ。軍資金の殆どは陸軍の軍備にあてられるからである。エイレネにとって最大の敵は同じ大陸にいる魔族であったためだ。

他の大陸からの進軍を阻んできたのは、ハルモニアの海賊たちだった。ハルモニアは、今でこそ貿易商として稼いでいるものが多いが、元は海賊たちの町だ。彼らは海産物が多く獲れる時は漁をして、それ以外の時は船を襲って積荷を奪って生活してきた。気性が荒い者が多いのは、その名残である。

海賊は時と共に姿を変え、ある者は貿易商に、ある者は自警団員や用心棒のような仕事を始めた。後者をより集めて構成されたのが、ハルモニアの軍隊である。またハルモニアの軍隊は、傭兵としての側面も持っている。エイレネ王家から要請があれば、傭兵として戦場に行くこともあった。ハルモニアは、いざという時に軍隊を貸す代わりに、エイレネからの税の徴収を免れている。

ハルモニアには、国内外から商品だけでなく多くの人間も集まってくる。この街は、エイレネの中でも特に魔族の出入りも激しい街だった。ハルモニアには独自の法が存在する。魔族の出入りは、他のエイレネ内の町や村に比べて規制がゆるい。それは、ハルモニアの人間の自分の力に対する自信の表れでもある。

おかげでラルフとクラウスも得に魔族であることを隠すことなくのびのびと行動できるわけだが……今はそうもいかない。ラシエルがデユスノミアではないか、と疑われている可能性があるからだ。すでに学園内でラルフを召喚しているためラルフたちが魔族であることを隠すのは不自然だが、関係を悟られるような行動は取れないなるべくよそよそしく、ラシエルとラルフたちは契約上だけの繋がりしかないと示すような行動することになった。

「情報収集は単独で行いましょう。その方が効率が良いでしょうし」「そうだな。こんな仕事は早く終わらせるにかぎる」

「身の危険を感じたら、すぐに私かラルフ様を召喚するんですよ」
ラシエルの身を守るのは、ラルフのため。それを最初の頃は強調していたハインリヒだが、最近ではラシエル本人を守ろうとする傾向がある。ハインリヒは、基本的に身近な者に対する面倒見は良いのだ。やる気のない主と暴走する弟の面倒を見ていたため自然にそうなった。

聞き込みをしていたラシエルは、正午前の強い日差しを避け近くにあった喫茶店に入った。飲み物でも飲んで少し涼んでから出ようと座る席を探すラシエルの目に飛び込んできたのは、鮮烈な赤だった。見間違いようもない派手な深紅の髪。数ヶ月ぶりに見る緋耀だった。

「緋耀？」

「ラシエルか。……久しぶりだな」

「ごめんなさい。連絡が取れなくなって怒っているわよね」

少し気まずそうに声を掛けてくる緋耀を見て、ラシエルは不安になった。裏切られたと思っていたらどうしようかと考えたからだ。

「いや、よくよく考えれば想像が付きそうなものだよな。」

魂約者に、咎められたんだろう？

そりゃ、怒るよな。他の魔族から貰った指輪なんて身に付けてたら指輪は取り上げられちゃったか？」

「いいえ、それはないけど……なんで私が他の魔族から貰った指輪を付けたら魂約者が怒るの？」

紅角族の角は、紅角族の敵意をあおるから危険だって注意されたから身に付けるのは控えていたんだけど……」

「へっ？ そうだったのか。俺はてっきり……」

じゃあ、指輪はまだあんたが持つてくれているんだな。良かった」
ほっとした顔をした緋耀は、ラシエルを同じテーブルに誘った。

彼は、契約の時にキーキ代を払い忘れたことを覚えていたらしく、

お詫びに今回はラシエルの好きな物を奢ると申し出た。ラシエルはせつかくなので、早めの昼食をとることにした。ラルフたちとは特に昼食の約束をしていなかったからだ。

二人は互いの状況を話し合った。緋耀は、未だに探している魂約者の角の行方を掴めないと言う。

「デイケの天秤ねえ……あんたも魔族の魂約者を持ったばかりに変だな。」

良かったら、搜索に付き合ってもいいぜ。

暇じゃあないが、あんたには先日世話になったからな」

「ケーキ代なら、今回で忘れてあげるわよ。ちよっと少ないけど」

「あんた正直だなあ。でも、そっちじゃねえよ。」

あんたは俺の正体を知っても聖騎士に突き出さなかったし、倒れた俺を助けようとしてくれただろ」

目の前で人の良い笑顔を浮かべる緋耀に、ラシエルは好感を持つと同時に複雑な感想を持った。ハインリヒとクラウスが紅角族を“情に脆く、騙されやすい”と評したことを思い出したのである。

緋耀に言われ契約の指輪をラシエルは取り出した。身に着けていなくても、魔力を封じる布で覆って持ち歩いてはいたのである。

「上手くいくかは分からないけどな。ん……こんなものか？」

「あれ？ 魔力を感じなくなった？」

緋耀が指輪に施したのは魔力を周囲に感じさせなくする魔術である。これで、指輪の石が、少し見ただけなら紅角族の角だとは分かり辛くなった。魔力による色の変化もなくなったので、見栄えも少々悪くなったがその方が好都合だった。装飾品として狙われる危険性も回避できるからだ。

「これで、持ち歩いてても分かりづらくなっただな。あと、この鎖もやるよ。」

指輪だと目立つだろ？」

首にかけて持ち歩けという意味だろう。ラシエルは礼を言い、細い鎖の首飾りを受け取って指輪を通し、首に掛けた。

その様子を見ていた緋耀が、ラシエルの腕に以前はつけていなかった装飾品に気づいた。青紫色の石で出来た腕輪だ。

「その腕輪、魔力を感じるな。魔道具の一種か何かか？」

「いいえ、魂約者に貰った媒介。召喚しやすいようにって」

緋耀の時と同じように、ラルフたちから魔力のこもった物をラシエルは受け取っていた。それがなければ、召喚に失敗する可能性があるからである。ラルフは腕輪を、ハインリヒからは短剣を、クラウスは手鏡をラシエルに贈った。

「へえ、あなたの魂約者ってやっぱり独占欲が強いのかな。」

腕輪は、魔族だと所有の証なんだぜ。ほら、奴隷に足かせとか手錠とか掛けるだろ？

だから、足輪や首輪と並んで所有物に身につけさせる装飾品なんだ」
指輪は小さいからそうでもないんだけどな、と緋耀は続ける。

「うほっ……」

いや、それは無い……んじゃないかな。

あいつのことだから、適当に選んでそう」

ラシエルは緋耀の予想外の指摘に、咳き込んだ。否定するラシエルに返されたのは、呆れたような視線だった。

「だから……適した物を当然として選んだんだろ？」

知らないのか？ 先代のデウスノミアの魂約者は、デウスノミアに恋焦がれた故に戦争を起こした。

代々デウスノミアの魂約者ってのは、独占欲が強くて嫉妬深いんだぜ」

あんたも気をつけろよ、と笑って緋耀はラシエルと別れた。緋耀は深刻な顔をしていなかったが、ラシエルはそうはいかない。今回の仕事が終わったら今までのデウスノミアのことを調べてみよう」と

思い始めた。

追跡者は混沌の象徴

天秤の奪還は難航していた。場所の特定はさほど難しくはなかったが、所持者が問題だったのである。

「なんでまた、ハルモニア軍の総帥が、天秤を持っているのかしら」今の総帥はアレウス・イノ。イノ一族は、島国に住んでいた神族の末裔であり、水と天候を操る魔術を使うことが出来る。それゆえに、海に関わる者たちの中では特別な存在だった。アレウスの今の地位も、それとは無関係ではないだろう。立場も能力も、天秤を取り戻すにあたっては障害だ。

「貴女を試すのに協力しているにしては、不自然ですね。どうも、軍人たちが緊張しているように見えるのです」

「相手がラシエルでは、あそこまで警戒するとは思えないからな」ハルモニアは魔族でも出入りが可能な街。人間も指名手配中の罪人でもない限り、自由に出入りできる。戦でハルモニアが参戦したことによって大敗した国は多く、敵は多い。それは昔からのことで、今になって警戒態勢を強め緊張感が漂うのは妙だった。

「もしかすると、ラシエルに用事があるのはエイレネというよりハルモニアなのではないでしょうか」

「それじゃあ、ハインリヒはハルモニアが私を誘き出す為に天秤を盗んだとでもいうの？」

ラシエルの問いに頷いたのはハインリヒではなくラルフの方だった。彼は無言でハルモニアの広場にある像を指差す。

剣を掲げる美しい女性の像。先々代のデュスノミア……ベローナを称えるものだ。

魂約者と出会う前、ベローナは、イノの一族の男性と結婚し幸せな日々を送っていた。しかしある日、ベローナの前に現れた魂約者

が嫉妬からベローナの夫を手にかけてしまう。その事件を発端に戦争が始まると、彼女は復讐のため自ら武器を取り立ち上がり、戦争の勝利に大きく貢献したという。

先代のデウスノミアであるエリスは魂約者であった魔族と結婚したため評判が悪いが、ベローナはまだまじだった。それでも、エイレネではベローナは戦争の引き金になった存在とされている。称えるのは彼女の出身地だったハルモニアだけだ。

「あいつらは、秩序と調和を築くには、時に混乱も必要だと考える連中だからな」

島国に住む神族は、内陸の神族と違い混沌も愛する。秩序そのものよりも、それを築く段階を好む性質ゆえか。子孫であるイノ一族も同様に、平和を尊びながら新たな戦場を望んだ。

「ハルモニアは、デウスノミアを戦いだけでなく、勝利の象徴として友好的に見ている珍しい人々が住まう地です。デウスノミアが現れたなら接触しようとするかもしれません」

ハインリヒの予想とは異なり、ハルモニア側は動かなかった。痺れを切らした三名は、フローラの時同様に夜になって行動を開始した。いざという時、魔族二人が能力を最大限に出し切るためである。ハルモニアは真夜中でも開店している店があり、夜でも多くの人々が外を出歩いている。軍の施設周辺も警戒態勢が取られている今なら人気が多いかと思われたが、見張りの数は少なかった。

「畏じゃないの？」

「そうかもしれませんが、今のまま大人しくしては、いつまで経っても仕事が終わりませんよ」

昼間に堂々と天秤を返すように要求する、というラシエルの案は却下された。その方法が有効なら、エイレネ王家はラシエルに天秤の奪還を依頼しなかつただろう。

「どちらにしる、面倒なことだ」

見張りを気絶させながらラルフが欠伸をする。三人の前に鮮やかな深紅が視界に入ってきたのは、それからすぐのことだった。やる気のないラルフの表情が一瞬だけ緊張で強張る。ここ最近感じていなかった殺気を感じたからだだった。

「……クラウドデイスの流血公。
何故、貴様がここに!？」

ラシエルは、緋耀とラルフたちが鉢合わせしてしまったことに慌てた。紅角族がラルフの一族を恨んでいると聞いていたため、二人を会わせたくなかったのだ。心配していた通り、今ラシエルの目の前で、緋耀はラルフに殺気を向けている。

“クラウドデイスの流血公”

クラウドデイス皇家が大陸の魔族を統治するための戦争が終わるまで、ラルフはそう呼ばれた。クラウドデイス家による侵略行為開始から魔族統一戦争終了までの期間はおよそ百五十年。その間に、最も多くの命を奪ったのが彼だったからである。

「紅角族の族長の息子だったな……生きていたか」

緋耀は紅角族の中でも目立つ容姿をしている。族長が命を賭けて庇おうとした、鮮やかな深紅の髪の少年をラルフは微かに覚えていた。彼は他人にあまり興味を持たないので、それは奇跡と言っているかもしれない。何故なら、彼らが会ったのは半世紀ほど前のことなのだ。

「ラシエル……まさかこいつがあんたの……魂約者なのか？」

「え？ ええ……私はよく分からないけれど、ラルフはそう言ってるわね」

緋耀が騙されていたと怒り出すのでは、と考えていたラシエルは戸惑った。しかし、緋耀にその様子はない。困ったように顔を顰め

ただけだった。

「まだ自覚がなかったのか」

横でラルフが呆れたように溜め息を吐く。

ラシエルは、三人にどういう経緯で緋耀と知り合ったかと、出会ってからラルフの一族と紅角族の過去を聞いたことなどを説明した。どうでもよさそうな表情でそれを聞いていたラルフと違い、他の二人は頭が痛いという表情をしている。

「やれやれ、これでラシエルが角の指輪を持っていた理由が分かりましたね。」

見ての通りこちらに戦意はありません。そちらがその気なら、考えなくもないですが」

ラルフとハインリヒに緋耀と戦う理由はなかった。あるとすれば、防衛のためぐらいである。クラウディウス家に恨みを持つだけでも処断の意味があるように思えるが、ラルフにとってはどうでもいいことだった。

「クラウディウス皇家は一族の仇だが……流血公は俺の命の恩人でもあるからな。」

今は、ラシエルの魂約者として見ることにする。

で、ここにいてるってことは、天秤を取り戻しに来たってことか？」

緋耀もラシエルたち同様に天秤を気にして、軍の本部周辺を探っていたらしい。

「……ええ。出来れば穏便に済ませたいのだけど」

難しいだろう、と続けようとするとラシエルの言葉を男の声が遮る。「穏便に済みますよ。こちらに敵意はないのでね」

男は白い軍服に赤紫色のマントを纏っていた。鮮やかながらも毒々しいマントの色は、デウスノミアの象徴であるニクスメイデイの色と同じ。ハルモニア軍でそんな格好をしているのは総帥のアレウスしかない。

アレウスは、黒髪に鋭い真っ青な目をした壮年の男だった。

友好的なアレウスに警戒しつつ四人は招待を受けた。アレウスは、ラシエルたちが忍び込んでくるのを待っていたのである。ディケの天秤の存在を公には出来ないというのも理由だったが、正面から乗り込んでこられては、都合の悪い用事があったのだ。

アレウスの望みはすぐに分かった。彼自身が隠すことなくはつきりと口にしたからである。

「我々はラシエル殿をハルモニアの象徴として迎え入れたい」

別の言い方をすれば、デウスノミアであるラシエルをハルモニアで保護したいのだという。アレウスは、理由としてエイレネがデウスノミアを排除しようとする可能性を語った。

「一応……アレウスさんの考えは分かりました。けれど、何故天秤を盗む必要があったのです？」

動揺していたラシエルだが、天秤を取り戻す気をなくしたわけではなかった。そもそも、自分の住んでいる国が敵になるとは考えたこともない話だ。

「イレーネの動きを見る為だ。彼らは隠れて生活しているからね。ディケの天秤は、神族イレーネがエイレネへの信頼の証として贈った品。それが失われたとあれば……」

天秤を贈ったイレーネも黙っていないだろう。彼らが動き出せば、どこに隠れているのか分かるかもしれない。

イレーネは神族の一族名である。彼らは数が少ない故に隠れ住んでいるが、強力な力を持つ一族だった。かつて窮地をエイレネの王に救ってもらった恩があるため、エイレネとは友好的な関係にある。

「イレーネも加担するか」

「貴方方の勇気は認めて上げましょう。しかし、無謀過ぎるのではありませんか？」

「イレーネとエイレネの両方を敵に回すなど愚かな」

冷たく言い放つハインリヒに、アレウスは飄々とした態度で応じた。

「分が悪い賭けは嫌いじゃなくてね。」

ああ、そんな呆れた顔はやめてくれ。もちろん、勝算ならある。

クラウディウスとうちが組めばいい」

クラウディウスとは他でもない。ラルフの弟が皇帝として治める魔族の国だ。

「確かにそれなら……」

「勝てるかもしれませんが、陛下が動くでしょうかね」

ラルフが無言で首を振る。

「あれは頭が固いからな」

「ラルフ皇子が味方にいるだけで、十分勝算はある気もするがね」

「買い被り過ぎでしょう。……だって、やる気がないもの」

「流血公が戦後は昼行灯になったって言うのは本当なのか？」

あれだけよく働く嫌な野郎だったのに」

皇帝の弟の流血公が仕事を放置して、屋敷に引き籠もってしまった、というのは魔族では有名な話である。ラルフ本人としてはただ役目を終えて隠居したつもりだったが、周囲は好き勝手に理由を想像して陰口を叩いていた。その状態は、皇帝がラルフの兄のルドルフから弟のルートヴィヒになってからも続いていた。

一方でラルフが仕事をしなくなって喜んだ者もいた。何故なら、ラルフがよく働いていた頃、彼によって多くの魔族や人の命が失われたからだ。

ラルフは能力的に見ると一騎当千の存在といえる。しかし、問題は勝算があるかないかなどではない。何故なら、ハルモニアが天稗を返しても、ラシエルがデュスノミアであることに変わりはないからだ。

「エイレネもイレーネも、過去に囚われデュスノミアを排除しよう

とするだろう。

貴女の味方は魂約者とその部下、そして俺たちしかない」

アレウスは、ラルフの態度を見て、ラシエルがデウスノミアなのは間違いないと確信した。ラシエルが戦乱を起こす存在には見えなかったが、それは然して重要ではない。ペローナもエリスも、魂約者が魔族である以外は普通の女性だったのだ。彼女たちは自分の意思とは関係なく、戦乱の世を作った。過去の事実が重要なのである。「過去にこだわっているのはあなたたちもでしょう。」

デウスノミアを象徴化し、ハルモニアを独立させようなど……」

ハルモニアがエイレネの敵に回るとは、そういうことである。

「お前たちが望むのは新たな戦乱の世か。」

結局、どちらもやるうとしていないことに変わりはないな」

デウスノミアを消そうと動く者、守ろうと動く者、どちらかが存在する限りこの争いは食い止めることが出来ない。ペローナやエリスを手に入れるために行動を起こした魂約者がいたように。ラルフとラシエルが争う理由がないのを補うかのように、周囲が争いを始める。

「しかし、このままパクスに戻ったところでどうなるというのです？魂約者のラルフ皇子が魔族側に向けあって、あちらで保護するつもり？」

魔族三人は返答に窮し黙る。気安く答えを出せるものではない。

沈黙を破ったのはラシエルだった。三人とは違い、彼女の目に迷いはない。

「私はデイケの天秤を持ってパクスに戻る。」

このままパクスに帰らなければ、自分が災いをもたらすことを認めたことになるわ」

アレウスは、ラシエルの目をじっと見つめた後、考え込むように目を閉じた。

「……分かりました。」

天秤はお返ししましょう。何、咎められはしますまい。

「エイレネは今すぐに、我々と事を構えるつもりはないでしょうからな」

「あっさり引き下がるのですね」

「デユスノミアが戦乱を招くのは望むところですが、彼女自身と争うのは本意ではありません」

アレウスの言葉は、本心だった。デユスノミアは、戦いの象徴であり自分たちをより素晴らしい戦場へと導いてくれる存在。彼にとつて、デユスノミアは信仰の対象なのである。

「いざという時はお力になりましょう。またのお越しをお待ちしております」

ラシエルを丁寧に見送るアレウスを見て、ラルフたちは顔を顰める。争いを招く存在を引き寄せ、魅了する。それもまた、デユスノミアの本質だった。

迷惑な二人

天秤が無事王家に戻り、ラシエルたちに日常が戻ってきた。エイレネやイレエに不穏な動きはなく、ラシエルは安堵したが他の者たちは余計に警戒を強めた。周囲から見れば、まったくそうは見えなかっただろうが……

ラシエルとリード兄弟は、庭でお茶を飲んでいたら、今日、パクスでは珍しく空が曇っていて涼しかったからだ。

「誰よ……この硬いケーキを焼いたのは？」

見た目は普通のケーキを前にして、ラシエルは今日のおやつを諦めた。

「人間というのは脆弱で、困りますね。少し硬いぐらい問題ないでしょう」

「食べられないどころか、凶器になるぐらい硬いと思うわ」

ケーキを焼いたのはハインリヒだった。自分の失敗を失敗だと認めたくないわけではない。彼にとって、そのケーキは食べ物に分類するに申し分なかった。

人より丈夫な歯を持つクラウドも食べることが可能なようだ。魔族は、胃腸も丈夫なので、消化も可能だろう。

クラウドは、一口かじると不思議そうにケーキを眺めながら呟いた。声には驚きが滲み出ている。

「でも、ラシエル、これ味は悪くないよ。……奇跡だ。

きつと明日は炎が降ってくるに違いないよ」

「クラウドス……槍が降ってくるよりある意味危険よ、それ」

「ラシエル、客だ」

室内で昼寝していたラルフがアマリエと共に庭にやってきた。

ラルフの顔は眠そうだが、寝起きだからというわけでもないだろう。

それはいつものことである。

「こんにちは。」

ラシエル、お祝いに来たわよ」

ラシエルは、天秤奪還の功績が認められ、下級魔術師の資格を与えられたのだ。これで、学園外からでも、魔術師として依頼を請けることが可能になった。特に特権などはないが、一応見習いから脱して魔術師になれたといえる。

アマーリエが花束をラシエルに渡す。淡い桃色の薔薇だった。

「可愛い。アマーリエ、ありがとう。」

でも、せっかくなら薔薇以外にしてくれれば良かったのに」

色が濃いものばかりだが家の庭には大量の薔薇が植えられている。

「元気そうで安心したわ。」

おめでとう。今後が不安だけど、なんとか魔術師にはなれたんですものね」

「嬉しいんだけど、そこは素直に喜べないのよね……」

「絶対裏があるに決まっているからね。」

魔術師になったのをいいことに、次々難しい仕事を押し付けて潰す気なのかもしれないよ。

そして、それに毎回巻き込まれる僕たち……気付けば混沌の時代が」

「お前は黙っている」

ラルフが鬱陶しそうにクラウドに命じる。クラウドは素直に口を閉じた。彼の言ったことは、実際あり得ることだ。ここ最近の、学園と国がラシエルにしてきたことはあまりに不自然だった。

ラシエルはアマーリエにも状況を説明することにした。危険なことに関わらせたくはなかったが、彼女は既に関わっている。フローラまでの護衛依頼も、学園側が何かを狙ってやったことかもしれないからだ。

「呆れたわ……そんなことがあったのに、暢気にティータイムなん

て流石ね。

もしもの時の、逃亡先のこととは考えてあるの？」

「いざとなったら、ラシエルを連れクラウドデウスへ帰る」

答えたのは、問題の中心にいるラシエルではなく、魂約者のラルフだった。彼は即答した。すでに、彼らの中では決定事項なのだ。

「ちよつと、そんなこと私は聞いてないわよ！」

「本当に危険な状況になったらですよ。

それが嫌なら、あなたが無害だと周囲に理解させるしかありませんね」

クラウドデウスが、人間の国より安全かというとなんかそう簡単にはない。ただ、ラシエルがデウスノミアだから排除しようと思う者が少ないだけだ。それでも、三人にとってラシエルを守り易くなるという点では、パクスより遥かにまじだった。

「幻の神族イレーネねえ……」

兄からもこつそり情報を引き出してみるわ。ホーラ神殿とイレーネは無縁でもないし」

「あやしまれないかしら？」

聖騎士で神族を魂約者に持つエウノミアであるため、アマーリエの兄アルマは、滅多に家族に会う機会はない。ただ、彼は手紙をよくアマーリエ宛に出していた。

「問題ないわよ。

アルマの手紙に書かれた愚痴の大半は神族に対するものだもの。

その中にイレーネに関するものもその内出てくるかも」

神族への侮辱や不敬にあたる文章や機密に関わる内容は、神殿を出る検閲の際に削除されてしまう。しかし、アルマは手紙の内容を一見不自然に見えない暗号文にすることでそれを回避していた。バレたら大変なことになるのに、それを平然と続けているのだから、アマーリエもラシエルと同じぐらい肝が太い。

「今のエウノミアは魂約者のこと嫌っているんだったよね。」

なら、むしろラシエルよりも彼こそが揉め事の理由になってもよさそうなものだけど」

「ああ、それは無理。」

兄さんは、魂約者に逆らえないもの」

だからこそ、わざわざ離れた場所にいる妹に愚痴の手紙などを出すのだ。

どちらが強い立場にいるのか明確な関係なら、揉めるのはむしろ難しい。デウスノミアが関わる争いは、彼らが魔族の魂約者の要求をはねのけたことが発端となることが多い。

どちらが優位か決まった時点で、争いは終わる。エリスの場合は魔族側が勝利してエリスは魂約者の妻となり、ベローナは魂約者を倒して人間側が勝利して戦争は終わった。

「ラシエルたちも争う理由なんてなさそうよね」

「くだらない喧嘩ならよくしてるけどね。」

昨日も、ラルフ様が魔術で洗濯物を乾かしたら皺だらけになって、ラシエルが怒ってた」

その後、ラルフが面倒くさがりながらも、魔術で皺を伸ばそうとしたが失敗し、結局ハインリヒがアイロンをかけた。

「あれは、一方的にラシエルが怒鳴っていただけなので、喧嘩ではないでしょう。」

珍しくラルフ様が家事の手伝いをしたというのに……感謝こそすれ、あのような態度をとるなど」

「三日前に、私のお気に入りのカップを割ったのは、ラルフが悪いわよ」

「僕が魔術で治してあげたじゃないか」

「妙な魔術のせいで、より修復不可能になったけどね……」

何でも魔術でしょうとするとするから悪いんだ、とラシエルが三人を説

教し始めたのをアマーリエが止める。

「あんたたちが仲良しなのはよく分かったわ。

……そもそも、ラシエルがちゃんと魔術を使えばなんとかなるよ
うな事ばかりな気がする」

家事に魔術を使う必要性がないのだが、アマーリエはそこには気づかなかった。彼女は趣味や仕事で実験器具を洗ったり、後片付けをするにはあるが、家で掃除や洗濯をすることがない。

「こいつが家事に魔術なんか使ったら……屋敷が半壊するな」
「ラルフが言えるようなことじゃないと思うけど」

「前に、ラルフ様が掃除をしようとして屋敷全体の埃を払う魔術を掛けた時は、地震かと思ったなあ」

「とにかく……ラルフ様、クラウス、ラシエルは、日常生活で魔術を使わないで下さい。」

私の仕事が増えます」

アマーリエはこの日、デウスノミアとその魂約者が周囲に迷惑をかけることは間違いない、と再認識した。

夜明けの羽音

日が沈み、鈴の音に似た優しい音が聞こえ始める。不思議なことに、それは種族を問わず魅惑的に聞こえる音色だった。

「これが、鈴竜の羽音……なんて澄んだ音」

ラシエルは、目的も忘れてうつとりした表情で耳を澄ませる。

音は近くにある洞窟の内部から聞こえてくる。

音は洞窟の中に巣を作っている鈴竜の羽音だった。鈴竜は薄い虫のような羽を持つ小型の竜だ。羽をすり合わせることで音を鳴らす。彼らは幼い頃は、自分の身を守るような力がつくまでの間、その音色で周囲の生き物を操って手助けをさせる。成長してからは、催眠効果が失われるが、コミュニケーションの手段として使うと言われている。

効果は人にもあり、この音色に惑わされた人間が鈴竜の親に襲われて亡くなるケースも少なくはなかった。小柄の竜族には肉食で獰猛な種が多く、彼らもそうだった。

ラシエルに鈴竜退治の依頼が来たのは、三日前のことだった。依頼内容は、町の近くに竜の巣が出来たので被害が出る前に駆除して欲しい、というもの。初級魔術師のラシエルには、普通は回ってくるはずがない仕事だった。

今の鈴竜は子育て中で、普段にも増して危険な存在だからだ。親はもちろん危険だし、子供の羽音の力も油断できない。

しかし、魔族だけはあまり羽音の影響を受けない。それが、鈴竜退治の依頼がラシエルに来た理由とされていた。

正当な理由に聞こえるが、実際のところは分からない。ラルフたちは、これもまたラシエルを始末するための罠ではないかと考えている。

「ちょっとしつかりしなよ。一緒に来るって言ったのは君なんだから……」

音に惑わされてこっちに迷惑かけないでよね」

鈴竜退治は、彼らの動きが鈍い昼間の内に倒すのが一般的だ。今回ももちろん日暮れまでに終わらせる予定だった。鈴竜の数が予想以上に多く、日没に間に合わなかったのである。

「ラルフの方は大丈夫かな？」

「不要な心配でしょう。あの方が簡単にやられるはずがない。それより、こちらが不味いですね……羽音に釣られて他の魔物が寄ってきている」

ラルフは別行動を取っていた。彼は、ラシエルたちとは別の巣を襲撃している。鈴竜の巣は二箇所あり、同時に襲撃することにしたのである。一つずつ襲撃する手もあったが、それだともう一方の巣の竜たちに警戒されてしまい退治するのが困難になる可能性があったからだ。

「やっぱり僕らだけで、何とかしようっていうのが間違っていたんじゃないのかな。」

魔術は得意だけど文官のハインと、魔術師モドキの人間だけじゃ鈴竜の相手は難しいよ。

……実質的には僕しか戦闘要員がないじゃないか。これはもう逃げるしか」

僕一人だけじゃ無理に決まってる……とクラウドはいつも通りネガティブな発言を始める。

「どこに逃げるんです？」

鈴竜は仲間意識が強いので、その内報復しにやってきましたよ」

「味方が多ければ……なんとかなるんじゃないかな？」

「エイレネでのラシエルの立場はより悪くなるでしょうね。」

今もそう変わりありませんが」

「とにかく倒しましょう」

撤退したいのは皆同じだったが、今の三人には目の前の敵を倒す道しか残されていなかった。

援護してもらったために呼び出したサラマンダーは、羽音とラシエルの命令の板ばさみにあっておるおろしている。他所で戦闘中のラルフはともかく、緋耀も呼び声に答えない。援軍は望めそうもなかった。

倒しているのは鈴竜というより彼らが呼び寄せた魔物の数の方が多かった。少しずつ鈴竜の巣までの距離を縮めていき、三人が巣の内部に到着したのは夜明け前だった。

ラシエルは、卵の中に一つだけまだ割れていないものがあることに気付く。他の子供と同時期に生まれる予定だった卵にしては、小さいようだった。だからなのか、巣の入り口の隅に追いやられてしまっている。

「生まれると面倒だし、割っちゃえば？」

「でも……あ」

クラウスの現実的な言葉に迷うラシエルの目の前で卵が割れ始めた。鈴竜の子供が顔を出すのは、三人の予想より早く、妨害する間もなかった。

「ほら、生まれちゃったじゃないか。仕方ないなあ」

クラウスは剣を赤子の竜に向けた。思わずラシエルはそれから庇うように、竜の子供を抱き上げた。

「生まれたばかりなのよ」

黒い鱗と同じ色の真つ黒な目がラシエルに向けられる。生まれたばかりの竜はラシエルたちを敵だとは認識していないように見えた。もしもこの子を味方に出ることが出来れば……そんな思いがラシエルの中で芽生え始めていた。

「だからこそ危険なのですよ。こちらに渡しなさい」

「魔術師は竜を育てて使役することもあるわ。」

国に許可を取れば、育てててもいいはず」

「僕らはそれを退治にきたんだよ。分かっているの？」

孵化したばかりで湿った羽が乾けば、新たな羽音加わる。リード兄弟はラシエルの考えが読めず苛立っていた。

異変が訪れたのは、二人が危惧していた状態になってからのことだった。ラシエルの腕の中を抜け出した鈴竜が、彼女の傍を離れないまま羽音を出し始めたのである。

クラウスは警戒して再度剣を向ける。それを今度はハインリヒが止めた。他の鈴竜や魔物たちに異変が起きたからだ。

「そっか、こいつ……ラシエルを親だと思ってるのか」

刷り込みによって、最初に見た相手であるラシエルを親と認識した鈴竜は当然のように本来の仲間を敵だと判断した。

状況を理解したクラウスとハインリヒの行動は早かった。動揺する鈴竜と魔物を退治したり追い払うのは、今までと違い容易なことだった。サラマンダーと同様に、今まで鈴竜の子供の羽音に従ってきたものたちは二つの相反する命令に困惑したのである。

「僕らの苦労ってなんだったのさ？」

「勝ったんだからいいじゃない」

「……で、そいつはどうする？」

ラルフが駆けつけると、すでに全ては終わった後だった。巣には鈴竜や魔物の死体が転がっている。

ラシエルは周囲を見回した後、申し訳無さそうに腕の中の竜に目を向けた。仲間を殺してしまったことに対する罪悪感を抱くのは彼女だけだ。

「うん、そうね。とりあえず……」

レヴァント。この子の名前はレヴァントにしよう」

レヴァントは意味が分かっていなかったようだが、自分に向かって何かを言うラシエルの手嬉しそうに擦り寄った。

「……もう飼う気だね」

「どうなっても知らないからな」

ラルフたちの不安を他所に、飼育許可はあっさり下りた。退治しにいったはずの鈴竜を連れて行っても、学園の事務職員は咎めることはなく驚きもしなかった。召喚魔術師の支配下にあるなら問題はなかったし、こんな行動を取る者が珍しくなかったこともある。

「鈴竜は絶滅危惧種ですからね。」

我が国には保護施設はありませんが、魔術師や竜に詳しい専門家が保護という名目で飼育することは許可されています」

幸か不幸かラシエルはある程度の能力がある魔術師だと認識されていた。成績が悪いのはそれを隠していると勘違いされているのである。デウスノミアなら危険な存在でなければいけない、という皆の思い込みが原因だった。でも、だからこそ許可が下りたのである。ラルフたちには、飼育を許可したこともまた誰かの思惑が働いているように思えた。普通に考えれば、危険な存在が力をつけることは防ぐべきことのはずだからだ。なのに、それを許すということは、排除する理由を作ろうとしているとも受け取れる。

「また新しい悩みの種を増やして……困った人ですね」

少し遅めの昼食を食べながらハインリヒは顔を顰めた。

「悩みといえば、過去のデウスノミアについては何か分かったの？」

「それは一応調べただけ……少し引つかかることがあるのよね。私、クラウディウスへ行けないかな？」

デウスノミアであることを受け入れていないラシエルにしては思い切った考えだった。リード兄弟は、少し驚いて彼女と主に視線をやる。ラルフはラシエルがそう言い出すのは予想していたのか、特

に驚いた様子はない。

「現段階では難しいだろうな」

「陛下にご相談してみましよう」

「ハイン……」

「ラシエルは連れて行くべきですよ。」

陛下に紹介するためにも」

面倒事が嫌いなラルフにとって、ラシエルをクラウディウスに連れて行くのはいざという時にとる最終手段だった。一方リード兄弟は、後々揉めないためにもラシエルと陛下の仲を友好的なものにしておきたかった。

「私はエリス……王妃のことが知りたいんだけど」

陛下に紹介するという言葉にラシエルは不安そうな表情になった。彼女としては、そんな大事にするつもりはなかったのである。

クラウディウスの皇帝はラルフの弟だと聞いてはいても、庶民であるラシエルからすれば一国の主直接会うのは恐れ多いことと思えてしまう。その上、相手は魔族の王。少なからず恐怖を覚える対象だ。

彼女はただデウスノミアだったエリス王妃の情報を得るなら、クラウディウスにいくのが一番だと考えただけだった。人の国に残る資料だけではどうしても偏った情報しかなかったからだ。

「それなら、ラルフ様に聞けばいいのに。」

僕らはまだ生まれてなかったけど、ラルフ様は会ったことあるんだから」

「え……じゃあ、ラルフって二百歳過ぎてたの？」

魔族は長命。中には千年近く生きる者もいるといわれている。ラシエルもそのことは知っていたが、ラルフたちの年齢についての話を聞くのは今が始めてだった。

「それどころか三世紀は生きてたと思う」

ラシエルは、改めてラルフにエリスの事を聞こうと期待のまなざしを向けた。そんな彼女の様子にラルフは、面倒くさそうに口を開いた。

「残念だが、俺はエリスとは殆ど顔を合わせたことがない。

殆ど部屋から出てこなかったからな」

「……引き籠もり同士じゃ、会う機会がないよね」

「ラルフって昔はちゃんと仕事してたんじゃないかって……」

まるでラルフもその頃から引き籠もりだった、とでも言うようなクラウスの言葉にラシエルは疑問に思った。軍に所属していたようだし、戦場にも出ていたなら引き籠もりと呼ぶのはおかしい。

「昔はというより、気が向いた時は、と言った方が正しいでしょうね。」

今よりはましだったようですが……」

三人はそれぞれの思いから、諦めの溜め息を吐く。皆が食事の手を止める中、レヴァントだけがもくもくと食事を続けていた。

昏き焰

パクスの喫茶店で、ラシエルは緋耀と待ち合わせしていた。喫茶店は、前に緋耀がケーキを大量に食べたのと同じ店を選んだ。

二人が会うことになった理由は他でもない。ついに緋耀の魂約者の角の一部が見つかったのである。

「これだと思うのだけど……」

「ああ、確かにそうだ。」

……感謝する」

緋耀は、親指ほどの大きさの欠片をかすかに震える手で受け取った。角は、緋耀に反応してかすかに光を発している。それは、再会を喜んでいるかのようにも見えた。

「これだけしか見つけれなくて、ごめんなさい」

パクスに流れてきたばかりの品ならラシエルも謝罪しなかっただろう。欠片は、随分と前からパクスの街中に存在していたものだったのだ。しかも、ラシエルの所属している学園の倉庫で、それは発見された。

「いや、気にするな。」

学園内の倉庫に入れる許可を貰えたのは、魔術師の資格を得てからだったのだ。

なら、仕方ない。それよりも、よく持つてくることができたな」

粉末状になったものすら見つからない可能性もあったから嬉しいのだと緋耀は儂く笑った。

自己満足に過ぎないこの行為に他者を巻き込んだという自責の念もあったのかもしれない。

「仕事の報酬の前借なの。」

あっさり許可が下りたのは、あちら側の企みもあるんじゃないか、ってハイインリヒは言ってた」

「それって、大丈夫なのか？」

「心配してくれて有難う。」

でも、相手の出方も見たいし……今のところは大丈夫だから」

「何からあつたら俺も呼んでくれよ。」

あんと俺は召喚の契約を結んでいるんだから」

店を出て、二人は日が暮れかけた通りを歩きながら会話を続ける。緋耀は、この日、大好きなはずのケーキを少ししか食べようとはしなかった。

「もちろん。期待してる」

「ところで、あんたっていつも誰かが護衛についてるはずじゃなかったのか？」

「今日は遠慮して貰ってるの。緋耀に家まで送ってもらおうから、って言うて」

「そうか。」

でも、もうちょっと警護を徹底した方がいいみたいだな」

緋耀の話を軽い気持ちで聞いていたラシエルは、彼の様子がおかしいことに気付いて周囲の気配を探る。かすかに魔力の気配がしていた。ラシエルは人の気配を読むことはできないが、魔力の気配を感じ取る能力は高い。

「魔術師？」

「刺客の魔術師にしては、魔力が弱そうだ。」

どちらかといえば、魔力が付加された武器を使っているといったところかな」

緋耀の冷静な態度に、ラシエルは安堵する。襲撃者が大した相手ではないと思っただからだ。しかし、ここで二人の感覚の相違が問題になってくる。

常に身の危険を感じながら生きてきた緋耀と違い、ラシエルは命の危険にさらされているという自覚に欠けていた。

刺客は、顔を覆面で隠している以外は普通の服装をしていた。襲撃するまでは、周辺の一般人の中に混ざっていたためだろう。

長い間一人で旅を続けてきた緋耀にとって、誰かを守りながら戦うという行為は久しぶりのことだった。同時にラシエルと二人だけで戦うのは初めてのこと。二人の連携が最初から上手くいくはずはなかった。

魔法がまともに使えない魔術師のラシエルが足手まといであることは、すぐに明らかになった。当然ながら、刺客はラシエルを集中的に狙ってくる。そもそも、彼らの狙いは緋耀ではなくラシエルなのだ。

「ラシエルっ！」

「痛……大丈夫、だと思う」

「大丈夫なわけないだろう。このままじゃあ、出血多量で死ぬぞ」
刃物で腹部に傷を負ったラシエルの動きが鈍る。彼女を庇う緋耀も、身動きがとれなくなりつつあった。

ラシエルは必死でラルフたちの助けを呼ぼうとするが、何かに妨害されているらしく彼らは呼び声に答ええない。

ラシエルはふと足元の自分の血に目を向けた。代償があれば、意識のない相手でも呼び出せるかもしれない。

「我が血を持って代償とする。」

誰でもいいから、呼び掛けに答えて！」

こうなったら、この場を混乱させるような化け物でもなんでもいいと考えていた。

「やめなさい。」

厄介な相手が出てきたらどうするのです？」

「あ、ハインリヒ……来てくれたんだ」

いくら呼んでも答えてくれなかった人物の一人が来てくれたこと

にラシエルはほっとして、笑みをこぼす。貧血のせい、それは儂い微笑だった。

普通に考えればラルフが来た方が自然だったが、魂約者の危機は必ずしも片割れに伝わるものではない。まして魂約者の存在を認識できないラシエルにとっては、ラルフではなくハインリヒが駆け付けたことは妙だとは思えなかった。

「遅いじゃないか」

「私は、彼女の護衛だけが仕事ではありませんのでね。」

あまりに帰りが遅かったので、様子を見に来たのですが何事です？」

「帰りに……襲撃されて」

「貴女はもう黙っていなさい」

緋耀が敵を退け、ハインリヒがラシエルの傷に癒しの魔術を掛ける。回復系の魔術は術者にも、対象にも負担が大きい。しかし、事態は深刻だった。ハインリヒは、内臓の一部が破損していることを確認すると、迷わず魔術を使うことにした。他の応急処置をしようにも、この場では難しい。

「どこの手の者かまでは分からない。」

数が多いし、腕はまああってところ」

国が雇ったにしてはお粗末だったが、個人的恨みで雇ったにしてはおかしい。ラシエルが殺意を抱かれるほどの恨みを買っているとは考え辛かったので、デユスノミア絡みであることは間違いなさそうだった。

「その割には押されているようですが？」

ハインリヒにとって、主から守るように命じられている対象が深手を負っていることは屈辱的なことだった。己の油断が招いた事とはいっても、どうしても目の前の紅角族の少年にも苛立ちを覚えてしまう。自然とラシエル本人には怒りを覚えなかった。それは、彼女が怪我をしているせいではないようだろう。

「さすがは梟翼族、嫌な野郎だな。」

嫌味を言う暇があったら、ラシエルをこの場から移動させるか加勢

するかしてくれよ」

「言われずとも」

ハインリヒは、そう言うの大掛かりな魔術を使うべく立ち上がった。彼としては、ラシエルさえ無事ならそれで良かったが、相手は自分の守るべき存在に傷をつけた人間である。排除したいと思うのは、自然なことだった。

ラシエルの召喚の魔術が発動したのはその直後だった。

地面に流れた血が生き物のように、一つの方陣を描き出す。混沌とした強大な魔力の一部が周囲に広がる。

その場にいた者は皆、すぐに想定外の存在が召喚に答えたと気付いた。警戒したのは敵ばかりではない。

「この気配は、危険どころじゃないんじゃないか？」

召喚方陣の上に姿を現したのは、漆黒の鎧をまとった男性だった。魔族だと主張しているのはその魔力ばかりではない。彼の纏う鎧には、クラウディウス皇家の紋章が刻まれていた。

異様だったのは、その鎧とマントが先ほどまで戦場にいたかのよう血で汚れボロボロになっていたことだった。

「こんな魔族の存在は報告にないが……」

「何者だ？」

これまで一言も発言しなかった刺客たちの中に口を開く者が出始めた。それだけ動揺しているのだ。

「それは、何を問うている？」

我が名か？ それとも、我を構成する情報か？

どちらにせよ、愚かな事よ。

我は、今から滅する存在の間に答えを与えるほど酔狂ではない」

男の声は、低く威圧的だった。よく通る美声でもあったが、彼の声を聞いた者はそれに気付くより先に恐怖を覚えるだろう。

しかし、この場で恐怖を感じたのは緋耀とハインリヒだけだった。

襲撃者たちは、断末魔の叫ぶを上げる間もなく地に伏したからだ。

ラシエルは意識が朦朧としていて、男の存在に気付くのが他者より遅れていた。

男は、そんなラシエルに近づいていく。彼の髪は鎧同様に漆黑で、瞳は深い紫色をしていた。

「貴方が……私の呼び声に答えてくれた人ね。ありがとう。でも、貴方ほどの魔族がなぜ？」

魔力に敏感なラシエルには、ぼうつとしている状態でも、近づいてきた男が強い魔族であることは分かった。

男はしゃがみ、弱弱しい声を出すラシエルを抱き起こし、彼女の傷に手を触れる。彼が何かの魔術をラシエルにかけようとしていることは容易に知れたが、誰も二人に近づくことはできなかった。

緋耀にしてもハインリヒにしても、男との力の差は歴然としていたし、男がラシエルに危害を加えるようには見えなかったからだ。

男は大切なものに触れるようにラシエルに触れ、その目は襲撃者に向けていた冷たい物とはまったく違っていた。彼には他の存在などもう視界には入っていないようだった。

「契約者よ、それは無意味な質問だ。」

答えなど知れている。我は、契約に従ったまでのこと」

男の声もまた、今までのそれと違いどこか柔らかなものだ。

「けいやく……でも、私貴方のことを」

男は彼女の言葉を遮るように、そつと顔をラシエルに近づけ額に口付ける。その深い藍を閉じ込めたような紫の瞳は、ラルフとよく似ているとラシエルは思った。

ラシエルの体から力が抜けるのを見て、ハインリヒが二人に近づく。緋耀もそれに続いた。

ラシエルがただ眠ってているだけだと確認して、ハインリヒはほつと溜め息をつく。一方、緋耀は、男の見覚えがありすぎる顔に困惑していた。

「そんな馬鹿な……どうして、貴様が」

「紅角族か……全て狩り尽くしたものと思っていたが、未だ生き残りがいたとはな。

あれの気まぐれか？」

緋耀は明らかに男に敵意を向けていたが、彼にとってどうでもよいものようだった。ただ、ラシエルに対してと違い男の声は冷たい。

「貴様の……貴様のせいだ」

緋耀にとつて、男は二度と相見えることがないはずの相手だった。そう思っていたからこそ、彼は胸の内を焦がす憎悪を忘れていたことができたのだ。

激昂する緋耀を、ハインリヒは冷めた目で見つめていた。ハインリヒもまた、男の顔には見覚えがあったが、特に思いいれのある人物でもない。彼は、緋耀が男と争うのは勝手だが、自分を巻き込んで欲しくないと思っていた。何より問題なのは、男の腕の中にはラシエルがいることだ。

男は緋耀が剣を向けても、動じることはなかった。ただ、彼もハインリヒ同様にラシエルのことは気になったのか、彼女をハインリヒに渡した。

「今の我には刃を向けるだけ、無駄だ。

我はもはや滅びたも同然の身……

我をこの世に留める者も滅ぼせる者ももはやこの契約者以外に居らぬ」

男はラシエルに再度視線をやると目を閉じて、呟いた。役目を果たしたとばかりに男は立ち上がりマントを翻す。男の気配は微塵も残ってはいなかった。

憂鬱な朝

ラシエルは怪我を負った日からずっと眠り続けていた。一週間目の今日も、まだ目覚める気配はない。

習慣からついつい夜明けに起きてしまったラルフはラシエルの様子を見に来て絶句した。

見覚えはあるが、ここにいるはずがない男がラシエルの枕元に跪いていたからである。ハインリヒから報告は受けていた。だが、直接目にした今でもまだ信じることができない。

ボロボロだったマントは今では修復され、窓から入ってきた風で少し眺めの美しい黒髪が揺れる。瞳の色はラルフと似た深い紫色。年齢は四十代ぐらいだろうか。

ラルフの記憶の中では威厳のあるその表情は、今では穏やかで優しさすら感じられる。ただ、その魔力だけが、かつてのように威圧的でラルフを圧倒した。

「生きていたのか？」

男はラルフの問いには答えず、ただラシエルのみを見つめてぶつぶつ何やら呟いている。

「可愛いラシエル……早く目を覚ましておくれ。

傷はもう治っているはずなのに、なぜ目覚めない？」

「……眠らせた張本人だと聞いているが？」

男の言葉を聞き取ったラルフは呆れた。どうしてこの男がここにいるのか、その内容だけで理解できた気がする。

男はラルフの方を見ようとしたが、反論はしてきた。

「あの時の彼女には休息が必要だった。

今の眠りは我が力によるものではない」

「その姿を維持するためにこいつの魔力を喰らっているのだらう」

「それは普段からだ。

今更、それが理由で眠り続けるわけがない」

「開き直るな」

ラシエルの魔力が弱く不安定な原因の一つは、この男の存在にあったのだ。

「何が悪い？」

我は彼女と契約して、彼女をずっと見守ると決めた。本人の承諾を得た上での契約に他者が口を挟むなど」

ラルフに話しかけられ続けるのが鬱陶しかったのか、男はようやく立ち上がってラルフの方を向いた。その表情は先ほどの物より幾分か冷たい。それでも、まだ先日の襲撃者に向けたものほどではなかった。

男のことを無視するように、ラルフはラシエルの側によって顔を覗き込む。数日間眠り続けている割に、顔色は悪くない。妙なことだが、体調を崩すよりはいい。

足元からがさごそと動く音がして見下ろすと、鈴竜のレヴァントがいた。ラルフは寝台へ上ろうとしているレヴァントを掴んで庭に放り出す。それをラシエルが見ていたなら咎めただろう。

しかし、レヴァントが勝手に遠くに行く心配はしなくてもいいし、自分の身を守ることまでできる。ラルフには、レヴァントを庭に出しても問題はないように思えた。

それよりも眠り続ける人間の側に、鋭い牙と爪を持つレヴァントを近づけることの方が問題だ。

「別に何も悪いとは言っていない。
原因が別にあるのなら、しばらく様子を見るまで」

思い出したようにラルフは再び口を開いた。今度は男の表情が呆れたようなものに変わる。それには近しい者に向ける親愛の情めいたものが浮かんでいた。

「お前……そのマイペースなところ変わらん」

「あなたも、特定のモノに執着するとそれしか見えないところが変

わっていない」

「これは執着ではない」

「では、何だ？」

男はしばし沈黙した後、それは穏やかな表情と口調ではっきりと答えた。

「愛だ」

「……………頭痛がしてきた」

聞きたくないものを聞いてしまった。ラシエルの部屋を出たラルフの顔には、そんな思いがはつきり表れていた。

廊下で部屋の中の会話を聞いていた緋耀は、困惑した様子で立っていた。

彼はラシエルの容態を気にして屋敷を訪れていた。ラルフたちのことは快く思っていないが、それとこれは別だと考えている。

「あれって本当にあいつなんだよな？」

俺、確信が持てなくなってきた」

「間違いないな。」

俺も信じたくないが……………」

「ラルフ様が、そんなことおっしゃるなんて珍しいですよね」

朝食の用意が整ったことを知らせに来たクラウスは、苦笑した。

感情的な主を見ることは珍しいことだ。まして、困っているラルフとなるとなかなか見ることが出来ない。

ラシエルと一緒にいるラルフは、以前よりも感情が豊かになってきた。ハインリヒは、それをデユスノミアの影響ではないかと指摘していた。しかし、クラウスは悪いことだとは考えなかった。むしろ、興味深いことだと思っっている。

「あれがラシエルに甘いことは、耳にして知ってはいたが」

「確かに……………実際に目にする和我が目を見わずにはいられませんね」

「ラシエルはあいつとも知り合いだったのか？」

ラシエルと男が以前から関わりがあったかのようなラルフとハイ
ンリヒに、緋耀は首を捻った。彼女がラルフたちと出会う前から魔
族と縁があったのが意外に感じられたからだ。

「本人は覚えていないようですが」

「あんたたちは、何か知ってるんだろう？」

「ええ。噂程度でしたら」

噂と聞いて、緋耀の中で疑問が増える。緋耀から見れば、あの男
とラルフは近い存在である。その男とラシエルの関係を噂でしか
知らないというのは、不思議に感じた。

緋耀が帰る気配を見せないので、クラウスが朝食に誘うと彼は少
し迷う様子を見せた後に頷いた。ハインリヒは嫌そうな顔を一瞬見
せたが、特に止めなかった。今の彼らに争う理由などない。

「これではつきりしましたね。」

ラシエルの失われた過去が」

「何か分からないが、本人に知らせなくていいのか？」

「記憶を失った理由が分からない間は、教えない方が良いでしょう。
それに、今の彼女には必要ない」

「命を狙われているこの状況なら、戦力はあつた方がいいと思うけ
どな」

契約の記憶がないとあの男を召喚するのは難しいだろう。ピンチ
にならないと呼び出せないようでは、手遅れになるかもしれない。

「さすが紅角族。甘いですね。」

あなたは、あの方を憎んでいるのではないのですか？」

紅角族は、他者を信用しやすい。かつてハインリヒは、彼らの騙
されやすい性質を侮蔑した。しかし、今の彼には緋耀の考えを嘲り
辛いものがある。ハインリヒもラシエルのことを少なからず心配し
ていたし、それがラルフの魂約者に向けるものなのか判断がつきか
ねていたからだ。

「それとラシエルのこととは話が別だろ」

「あれがラシエルと契約していたとは思わなかった」

「おいおい、あいつをあれ扱いかよ」

「あなたも大概失礼ですよ」

ここに居る者たちにとつて、一応、あの男は魔力が上だった。地位も上と言えるが、それは瑣末なことに過ぎない。魔族が何より重要視するのは、力だからだ。

ただ、今のあの男の言動を見てみると、どうも敬うことに抵抗を覚える。

「あれがラシエルに力を貸すのなら、好きにさせておけばいいが」
害をなすなら、そうはいかない。ラシエルは自分の魂約者なのだから。

魔力を喰らうのは代償だとすれば、悪くないだろう。あれだけの魔族を従えることが出来るなら、他の魔術が使えなくてもお釣りがくるぐらいだ。

「あの様子なら、大丈夫だろ」

「複雑そうですね」

「そりゃあ……この手で殺せるもんなら、そうしたいさ。
でも、あいつは死人なんだろう？」

かつて一族を裏切った男を緋耀が許せないと思うのは、当然のことだった。男がラシエルの契約者であつても、憎いことには変わりがない。あの男は、自分の命を気まぐれからかもしれないとはいえ、一度は救ってくれたラルフとは違うのだ。

だが、緋耀は、感情的に見えて、実は冷静に物事を見ることが出来るタイプだった。彼が今までなんとか生き残つてくることのできたのは、そのためだろう。

「……幽霊とでもいうつもりですか。やめて下さいよ。
それなら、まだ生きていた方が何倍もましです」

幽霊が苦手なハインリヒが、否定するのは当然のことだった。それに、クラウスにも見えている時点で、男は幽霊ではない。

「幽霊というよりも生きた屍だろう。あれは」

「おいおい、あいつに不死属性なんてつけたら、それこそ最強最悪じゃねえか。」

で……あなたは、ラシエルをあいつに取られてもいいのかよ？」

「あれはもとより俺の物ではない」

ラルフの言葉に嘘はなかった。周囲からどう見えているかはともかく、彼自身はラシエルを特別扱いしている自覚すらない。

緋耀は、ラシエルがラルフから腕輪を貰ったという話を聞いて以来、ラルフがラシエルを好いて執着しているのだと思いつ込んでいた。

「今はそういう話をしている場合ではないと思いますけどね」

「不死者は別に不死身なわけじゃないよね。」

でも、あの方の場合は、ラシエルと契約して死から逃れたわけだから、ラシエルがいる限りは不死身ってことになるのかな？」

「じゃあやっぱり最強かも、とクラウスは続ける。皆も同意したが、同時に先ほどの男の様子が思い浮かぶ。」

「ラシエル……」

眠りから目覚めないラシエルを前に彼女の名前を悲しそうに呟く男の姿を。

「今のあいつは人畜無害そうだな」

「ああ、ラシエルに危害を加えたりしなければな」

「また、厄介事が増えた気がします」

「増えたんじゃないかって、今まで気付いていなかったただだよ」

変化する日常

ラシエルは眠りについて二週間目で目覚めた。彼女が起きた時、
緋耀もあの謎の契約者の姿もなかった。彼らはラシエルの無事を確
認した後、すぐにその場を去った。ラシエルは、謎の契約者のこと
を知りたがったが、男の正体を知っている三人はそのことを話さな
かった。記憶が必要な時がくれば、思い出すかもしれないし、これ
は本人と男が解決するべき問題だと考えたからだ。

ラシエルが謹慎処分を受けたのは、彼女が目覚めて三日目のこと
だった。契約者のことに気を取られて、注意力が散漫になっていた
せいもあつたかもしれない。新しい厄介な仕事が舞い込む前だった
のは、幸いだったといえるだろう。

「ああ、嫌だ。

これも僕のせいになるのかな？ それってとっても理不尽だよ」

クラウスはラシエルの前にいきなり現れるなり、そう呟いた。

大した怪我はしていないものの、ラシエルは泥だらけで、何度も
転んだことが一目見ただけで分かる。

それは、学園での召喚魔術の授業中の出来事だった。ラシエルは
初級魔術師になったが、学校を卒業したわけではない。今でもまだ
授業は受けていた。

今は召喚魔術の実戦練習を行っていると、ラシエルも他の
受講者相手に戦闘中だった。

クラウスは、探し出してきた腕輪、短剣、鏡をラシエルに手渡す。
何者かによって媒介を隠されてしまっていたのだ。とは言っても、
誰が隠したのかは簡単に推察できた。ラシエルの対戦相手とその他
数名が気まずそうな顔をしていたからだ。

クラウスはそれ以上何も言わず、ラシエルに背を向けて対戦相手

と向かい合っ。

「僕が現れて不思議そうだけど、何もおかしくないよ。

だって魔術師と召喚対象の関係が契約だけだって誰が決めたの？」

翼がラシエルの視界を覆う。黒と白が入り混じったその羽は片翼しかないことが気にならないほど美しく見えた。

クラウスが対戦相手に魔法攻撃を喰らわせたと気づいたのは、爆音で分かった。ラシエルは、慌てて翼の後ろからにおいて状況を確かめる。

魔術が下手なクラウスにしては珍しく直撃したらしい。ラシエルと同じぐらいの少年と彼が召喚したワイバーンが地面に横たわっていた。

「梟翼族だつて？」

まさか、あの連中が落ちこぼれ魔術師になんて従うわけがないのに……」

少年の顔が恐怖に歪む。クラウスが翼を出したのは自分の種族を教えるためだった。それだけで、以後ラシエルに馬鹿なことをする連中を抑制することが出来る。

ラシエルが魔族を召喚できるということは噂になっていたし、直接目にした生徒もいた。なのに、その後もラシエルの実技の成績が悪いままだという。彼女が魔族を召喚できたのは何故か？ 当然、皆不思議に思った。勝手な作り話も多く飛び交った。しかし、ラシエルが実は凄い魔術師だからだと考えるものは一人もいなかった。

「落ちこぼれ？ 誰のことを言ってるの？
ねえ……訂正してよ。僕はとっても残念なことに気が短いんだ」

剣の切っ先が少年の首に当てられる。クラウスの怒っているようには聞こえないのんびりした口調が余計に恐怖をあおっていた。

「や、やめてくれ。訂正するから……ラシエルは優秀な魔術師だつて」

「クラウドス、やめて。」

そもそも、私は優秀じゃなくて落ちこぼれで間違っただけだから」「君の魔力は弱くなんてない。彼らよりずっと強力なんだ。」

これは弱者が強者に刃向かった報いだよ」

剣を鞘にしまいながらもクラウドスの戦意は失われていない。少年はクラウドスの足元から慌てて逃げ出そうとしたが、クラウドスは彼の服を無造作に掴んでそれを阻止した。

ラシエルは、首を振る。今大切なのは、自分の魔力の強弱ではない。

「そういう問題ではなくて」

「なら、君にも理解できるように理由付けするよ。」

彼らは君を傷つけようとした。これは正当防衛だ」

「傷つけようとしたなんて……陰湿だけど、詰まらない嫌がらせよ」
召喚対象との媒介を隠すのは、ただの嫌がらせでは済まされることではない。ラシエルも本気で詰まらない嫌がらせだとは思っていなかった。ただ、これまでのラシエルに来た依頼内容に比べれば、大したことないと思えたのは事実だ。

「これが？」

君は事態を正確に把握できていないらしいね。

一歩間違つたと死人が出てたよ。それとも、君はそれを望んでいるのかな？」

「クラウドス、いくらあなたでもそれ以上言つと怒るわよ」

「騒ぎを大きくしたくないのは分かるよ。」

けど、奴らに好き勝手させていい理由にはならない。

君の周りに無関係な人間がいるからって、命を狙われない保障でもあるの？」

言葉に詰まるラシエルにクラウドスは続ける、だから君は甘いんだよ、と。ラシエルは、無意識に今は安全だと思いついていた。学園

内にも自分の命を狙う者はいるかもしれないというのに。

敵は少しずつだけど確かに手段を選ばなくなってきた。先日の襲撃のことを思い出して、ラシエルは背筋が寒くなった。自分の身の心配だけをしていればいい訳ではなくなってきた。

実戦練習はクラウスが現れたために中断されていた。魔族の召喚が出来る生徒は、学園内にはラシエルしかない。

魔族の青年の怒りが少し和らいだことを察した講師は、ラシエルたちに近づき処分を言い渡した。少年は謹慎処分にならなかったが暫くベッドの上で過ごすことになりそうだった。

クラウスは不満に思ったが、人間の子供相手にやり過ぎた自覚はあるらしく何も言わなかった。

「謹慎処分なんてさ、いつ目覚めるのか分からない状態よりはずっといいよ」

「そうね……しばらくは平和にのんびり生活できそう。」

ラシエルは、諦めたように、でもどこかほっとしたように溜め息をついた。

クラウスが自分に向けている感情が何なのかよく分からない。けれど、ラシエルは同居している三人の魔族のことが嫌いになれないし、彼らもまた同じなのだということは分かっていた。

ラシエルはクラウスの背に目をやる。

帰宅する時にはもう彼の背に翼はなかった。

「本当に猛禽類みたいな翼があるんだね？」

初めて見た」

「ああ……片方しかないから、あまり見せたくないんだけどね。」

「かつこ悪いから」

クラウドにとって、片翼しかないことはコンプレックスだった。翼は空を飛ぶためのものではないから、片翼でも生活には支障がない。それでも、翼が一つだったせいで幼い頃は差別されたし、魔力が弱いのはそのせいだと言われ続けて来た。ある程度の地位と権力を得た時、彼の翼について揶揄するものはいなくなつた。だからといって、クラウドの過去の嫌な思い出がなくなるわけではない。

「そう？　綺麗だつたよ」

クラウドは困つたように苦笑した。ラシエルの言葉からは同情は感じない。彼女は素直に思つたことを口にしただけだつた。

「綺麗……ね。……ありがとう。」

でも、そういうこと、ラルフ様の前では言わないでよ。僕、面倒臭いの嫌いだからさ」

「そんなこと言つたら、ラルフが妬くみたいじゃない。

ないって。だって、彼も面倒臭いこと嫌いだもの」

「だから、怖いんじゃないか」

面倒臭いことをどう片付けるか。向き合つのは面倒なら、気にしないかもしくは根本から消し去つてしまえばいい。ラシエルはラルフの非情さを残虐性をまだ理解しきれていない。クラウドは主の無自覚な嫉妬が自分に向かうことがないように願つた。

夜は微笑む

ラシエルは甘い香りが漂う中を歩き続けていた。それは、かつてフローラの村での嫌な体験を思い出させる。

不快に感じないのは、匂いがきつ過ぎないからだろうか。不思議に思いながら歩を進めるラシエルは、黒衣を来た女性の姿を目に止め立ち止まった。

黒く長い美しい髪と怖いほど白い肌を持つ女性だった。彼女もラシエルの存在に気付き、静かに近づいてくる。

「ようこそ私の庭へ。
哀れで愛しい我が娘」

冷たい美貌を持ちながら、穏やかな微笑を浮かべる彼女にラシエルは安らぎを覚えた。どこか懐かしい、ほっとする空気を纏う女性だ。

「あなたは？」

「私は夜であり、そなたの夢でもある」

いきなりの不躰な問にも、女性は機嫌を損ねることなく答える。夜を名乗る女性は、なるほど確かに夜の月のような神秘的な美しさを持っていた。

「よく分からないけれど、ここは私の夢の中なのね？」

夢という単語は、ラシエルに自分の現状を思い出させる。通常は夢を夢と認識するのは容易い事ではない。だが、切欠があれば別だ。

「そうだ、我が娘よ」

「どうして私を我が娘と呼ぶの？」

そう呼ぶのが当然であるかのように女性はラシエルを“我が娘”と呼ぶ。

「私にとっては夢見る者は全て我が子のようなものゆえ」

女性は、優しく愛おしい存在を思うような微笑を浮かべ、答えた。ラシエルには、その意味を完全に理解することなどできない。しかし、深く問うたところで女性は明確な答えをくれないだろう。

「この庭の薔薇は全部ニユクスメイディなのね。まるで家の庭みたい」

「この薔薇は夢の象徴。ここにあってもおかしくはない。美しく優しく、とても残酷な花よ。まさに夢のようであろう?」

うんざりしたように言う少女に、女性は苦笑した。

「あなたは、まさか」

女性の名を言おうとしたラシエルを彼女は止める。人差し指がラシエルの口元にそっと当てられる。白い幻のような手が自分に触れていることが、ラシエルには不思議に思えた。

「もう目覚めるがよい。」

また、心配を掛けては可哀相だからのう」

女性の声が遠ざかるのを感じながら、ラシエルは目を開いた。

カーテンの隙間から日の光が差し込んでいる。レヴァントが廊下への扉を引つかいているので、日が昇って大分経つのだろう。この幼い鈴竜は、食べ物を与えてくれるのが青い髪の青年だと認識していた。それでも一番なついているのはラシエルなのだから、不思議なものだ。

着替えを済ませたラシエルは、レヴァントと共に朝食を食べに行くことにした。もう夢の中の出来事などほとんど覚えていなかった。謹慎処分中のラシエルは、せっかくなってきた時間を魔術の勉強に費やすことにした。

召喚魔術は相変わらずだったが、なぜか今日は魔術の調子が良い。午前中の結果に満足したラシエルは、午後からは普段よりも高度な魔術に挑戦することにしたのだが……

「謹慎処分中にこんな派手な爆発なんて起こしても大丈夫なの？」

「ああ……掃除は僕がする。僕が片付けた方がまだましだから」

床にしゃがみこんで落ち込んでいるラシエルにクラウスが声を掛ける。屋敷中に爆音がとどろいてすぐに同居している魔族たちは部屋に駆けつけた。侵入者の気配がないからといって、油断は出来な
いからだ。

だが、部屋に向かうまでの緊張感もラシエルと室内の様子を見れば霧散した。ラシエルは魔力の暴発のせいでボロボロだったが、無事だったし、魔術を使ったのがラシエルだと分かったからだ。

「魔力が不安定になっていますね。」

先日から微量ですが魔力が増加しているので、その影響でしょう」

「単に私の日頃の努力の賜物じゃないの？」

強くなった割に妙に疲れるからおかしいとは思っていたけれど……」

ラシエルの召喚魔術の腕前が上達していないことは、先日の媒介を隠されたせいで召喚を行えなかったことが証明している。魔術も今日の様子ではあまり上手くなっていない。しかし、以前に比べれば少しずつ魔力は強くなってきていた。

「制御しきれしていない魔力が暴走してるんだ。」

もしかすると、二週間眠ったままだったのもそのせいかな？」

「記憶にない契約による召喚、大量の魔力消費、怪我による体力低下……様々な理由が考えられますね」

「結局あの人も原因の一つか……」

ラルフは、ラシエルが召喚した男のことを思い浮かべた。記憶にない契約者を召喚することが魔術師の負担になる。本来ならそんな事態が起きないためその可能性は思い浮かばなかったが、ありえないことではない。

部屋の片付けをするためにラルフとラシエルをリード兄弟が部屋

から追い出す。

「二人がいると余計に散らかるので、出て行って下さい」

「ラシエル、ラルフ様と一緒に訓練したらどうか？」

魂約者の存在って魔力に影響を与えることもあるんだよ」

「やってみてもいいけれど……」

ラルフが魂約者だと思っていなくても、試してみる価値はあるかもしれない。ラシエルは、ここ最近はラルフの側で魔術を使う機会が少なかったことを思い出していた。

「確かに魂約者の存在は魔力に影響を与える。

だが、それは普通の場合だろう？

もし安定しなければ被害にあうのは俺だ」

「ラルフ様は強いから、被害にあっても平気じゃないですか」

「……そうですね」

面倒臭そうなラルフに対して、リード兄弟の態度は冷たかった。

二人には、屋敷内で一番立場が上なのが誰なのか分かり始めていた。誰が何と言おうと、彼女の訓練を止めることなど出来ない。我俣ではないが、頑固なところがある幼い魔術師の性格はもう把握している。

それに、よくよく考えれば、ラシエルはラルフの主人なのだ。ラルフ本人がそう断言している。たとえハインリヒがそれを忌々しく思っているとしても、それが変わることがない。

「意外ね。ハインリヒなら、ラルフが嫌がることは避けると思っていたのに」

「二人が魂約者であることは変えようがない事実。

いい加減、あなたが自覚するためにも、有効でしょう」

「それもそうだね」

「俺はもう寝る」

「じゃあ、ラルフの部屋で続きをしましょう」

自分の寝室へ行こうとするラルフをラシエルは引き止めた。彼女の中では、これからの予定は決まっていた。

「……庭に出るぞ」

庭にあるニクスメイドイが燃えたりしないよう、開けた場所で訓練は行われた。しかし、コントロールが悪いラシエルの魔術にそんなことは無関係だった。少しだけいつもよりも濃い薔薇の香りが屋敷の周辺を包んだことは、幸い大きな騒ぎにならずにすんだ。

「ほほ……そなたの片割れの気の毒なこと」

夢の庭園で美貌の女性は楽しそうに笑う。

「笑い事じゃありませんよ。」

もう少しで大変なことに……ハインリヒがすぐに消火してくれましてたけど」

燃えたのは薔薇だけではなかった。強力な魔力を持つラルフがただ攻撃を甘んじて受けるわけがなかったが、ラシエルの魔術による攻撃は予想ができない。あり得ない方向から遅いかかる謎の攻撃をかかわすのは、彼にとっても難儀なことだ。

「良き仲間にも恵まれたようで何よりじゃ。」

此度の試みは成功すると良いが」

「試み？」

「なに、こちらの話ゆえ、そなたが気にすることではない。

魔力の安定、私も微力ながら助力しようぞ」

「それは心強いです。」

でも、自分の力でどうにかしたい気もするんですよ」

「ほんに面白い娘よな。」

安心せよ。私はただそっと見守るだけじゃ。手出しはせぬ」

「危なくなったら他の皆は助けて下さいますか？」

関係のない他人はもちろん、迷惑だけど嫌いになれない同居人たちが、自分の我侭で酷い怪我をしたりまして亡くなるのは嫌だった。「言ったであろう？」

夢を見る者は等しく我が子だと。我が子を助けられる状況で助けぬ

理由はない。

もちろん、そなたのことも守ろう」

争いを司るのが嘘のように優しく女性は微笑んだ。

海神の末裔

ラシエルの謹慎が解けたのは、本人たちが予想していたより早かった。はぐれ魔族の急増とハルモニアに属する島で反乱が起きたことで、人手が足りなくなつたからだ。

宮廷魔術師たちは、パクスとその周辺の街や村の警戒と外交で忙しく他所にまで手が回らない。ラシエルはハルモニア軍総帥アレウスの希望もあつて、再度ハルモニアに向かうことになつた。

アレウスが言っていた通り、デイケの天秤についてはお咎めがなかつたらしい。盗んだのはハルモニアに逃げ込んできた盗賊ということになつているが、それをエイレネ側は信じていないだろう。ただ、現状で敵を増やすつもりはないのだ。

緊張した面持ちでアレウスのもとを訪れたラシエルを、アレウスはにこやかな表情で迎えた。

「アレウスさん……お久しぶりです。

悪い事が起きているのに、随分と嬉しそうですね」

ラシエルも思わず嫌味の一つもいいたくなるというものだ。遠路遙々来て歓迎されるのはありがたいが、どうも戦力として期待されているのは違う気がする。いや、絶対違う。

「なに、平和過ぎて腕が鈍るよりは何倍もいい。

ラシエル殿にも会えたしね」

「これですます、僕たちに向く目は厳しくなるね」

同行していたクラウスも、アレウスに呆れた目を向ける。ラルフは興味がないようで、沈黙したまま窓の外を眺めていた。

「アレウスさん、私はベローナとは違うんですよ。

それに、ベローナさんも戦争を望んでいたわけではないでしょう?」「もちろんそれは分かっているよ。」

今回は、デウスノミアとしてのあなたではなく、魔族を召喚できる魔術師としてのあなたに用事があったんだ」

「依頼内容に偽りはないと？」

「あなた方を二度も騙すほど愚かではないつもりだ」

アレウスは、困ったように苦笑した。

今回のラシエルの仕事は反乱を鎮めることではなく、はぐれ魔族の討伐である。はぐれ魔族は、五人前後のグループで活動しており、同行している人間の魔術師もいるという。そのため、魔術と魔族に對抗できる者が必要だった。

「君たちって戦争屋なんだよね？」

僕らを巻き込む必要性をまったく感じないんだけど」

ハルモニア軍にも魔術師はいる。水と天候に関する魔術を得意とするアレウスもその一人だ。クラウドからすれば、海の側なら彼らでも魔族相手に戦うには申し分ないように思えた。

「我々は、今南の方で起きた反乱を鎮めるために奔走しているね。」

はぐれ魔族にまで構っている余裕がないんだよ。

それに、ラシエル殿にとっては名をあげるいい機会だろう？」

アレウスは、ラシエルの夢を知っているらしい。少し調べれば分かることなので、不思議なことではない。

余裕がないという話も嘘ではないようで、彼の顔には疲れが見える。笑顔でいると分かりづらいが、真剣な表情になるとそれがよく分かった。

ラシエルたちがハルモニアについて三日、はぐれ魔族の捜査は難航していた。なぜなら、ハルモニアには魔族がいること自体は珍しいことではないからだ。

今回も、単なるはぐれ魔族なら無視されていただろう。エイレネ

国内で不穏な動きをしているという疑いがかかってさえいなければ、ラシエルは、海鳥や遠方から聞こえてくる海竜の鳴き声を聞きながら海を眺めていた。パクスやラシエルの生まれた村からは海が見えない。

レヴァントは、ラシエルの足元で眠そうにしながらも蟹を追いかけている。鈴竜は本来夜行性だが、ラシエルと生活することでラルフたち同様に昼に行動するようになっていた。それでも正午頃は眠そうにしていることが多い。蟹を追って海に飛び込みそうになったレヴァントをラシエルは抱き上げた。レヴァントはまだ上手く飛行できないし、泳げない種族のはずだ。

「何か珍しいものでも見えるか？」

「あえていうなら、海が珍しいですね」

「そうか。ラシエル殿は内陸部の生まれだったな。」

魔族の連中は？」

アレウスは、仕事の合間にラシエルのところにやってきては雑談をしていく。彼なりに気分転換のつもりのもので、はぐれ魔族が見つからないことは特に気にしている様子はない。

「クラウスは街中へ情報収集に。ラルフは昼寝してました」

「そうか……青い髪の男に喧嘩を売らないよう、街の連中に注意しておいた方がよさそうだな。」

クラウスは素人には絡み易そうな相手に見えるだろうから」

「揉め事は禁止って言ってるんですけどね。」

どうも、意外と気が短いみたいで……」

女の子と一緒にいると揉め事が起きやすいかもしれないというクラウスのネガティブな発言により二人は別行動をとっていた。実際それは間違った考えでもなかった。それに、魔力が強くなったせいでラシエルの魔術は暴発しやすくなっている。二人が一緒に行動している揉め事に直面するのは避けたいところだ。

かといってラシエルを一人で行動させるのも危険である。ラシエルが港にいたのは、ハルモニア軍の人間が常に居て見晴らしが良い

場所だからだ。おまけに人通りも多いので情報収集もしやすい。

「こいつって魚も食うか？」

アレウスはラシエルの腕の中のレヴァントを指差した。

「雑食だから食べると思いますよ」

ラシエルの訝しそうな視線を気にせず、アレウスは近くにいた漁師に話しかけ始めた。小魚が入った籠を片手に戻ってくる。

レヴァントは最初、魚の臭いをかいで警戒していたがすぐに食べれる物だと気付いたらしく、もくもくと食べ始めた。それをアレウスは面白そうに見つめている。

「鈴竜は凶暴だと聞いていたが、こうして見るとなかなか愛嬌があるな。」

海の方にいる竜族は、飼っても人には懐かないんだよ」

「え……でも、海の竜は温厚な性格なんですよね？」

海は大型の竜族が多い。竜族は大型になればなるほど知能が高く、温厚な性格のものが多くという。そのため、ラシエルは陸の竜族よりも人と仲良くしやすいと思っていた。

「彼らは温厚というか……非常にマイペースだね。」

人を襲うことは少ないが、それは彼らが人に興味を持たないからなんだ。

あの船の辺りを見ているといい」

「あの船がどうかしたんですか？」

不思議そうにアレウスの方を振り返ったラシエルの背後で大きな水音がした。再度海の方を見ると、アレウスが言った船の側に大きな竜が水面から顔を出している。

ずんぐりしたトカゲのような見た目のレヴァントと違い、その竜は細長く蛇に近い体系をしているようだ。全身にある鱗は濃紺で鈍い光を放っている。少しだけ開いた口の中に見える牙は小さいがそれぞれ尖っていて、噛まれると軽傷では済まなさそうだ。知性を感じ

じさせる目を見なければ、今にも周囲の船や生き物に襲い掛かりそうに見える迫力のある外見をしている。

船にいる人間は、一瞬竜の方を見たが、すぐに自分の仕事に戻っていく。彼らにとってその竜は見慣れた存在らしい。

港の方でも竜の登場に驚いているのは、余所者だけのようだ。

竜も人には目もくれずに港付近を泳ぐと、すぐに海の中に潜ってしまった。

「ほら、あんな感じなんだ」

「なるほど……なんだか、ラルフみたいですね」

「確かに彼も、興味がない相手にはあんな感じだろうな。」

「どうだ？　せつかく海に来たんだ。海竜とも契約してみるか？」

やはりこの人は仕事でラシエルを呼んだことを忘れていないのではないだろうか。ラシエルは何を言っているんだと思ったが、仕事の進み具合が悪くてやる気がなくなってきたのは事実である。海の竜に興味がないわけでもない。しかし、先ほど自分が言ったことを思い出して、すぐに契約はやめておくことにした。

「興味はありますけど、やめておきます。」

マイペースなのはラルフ一人で間に合ってますから」

夜に祝福された娘たち

ラシエル達がハルモニアに滞在して一月余りが経過した。ハルモニアの傭兵も商人も表向きは捜査に協力的だったが、実際は違っていた。彼らの多くは戦乱を望んでいたし、ラシエルがデユスノミアだと知る者はごく一部のものだけだったからだ。

見慣れた紫の薔薇の園をラシエルはのんびり進んだ。いつもならうんざりする庭のニユクスメイデイも今では少し恋しい。

ようやく見えてきた自ら以外の人影に顔を上げる。その人は長い黒髪を結び上げ、赤紫のドレスをまとっている。美しい彼の女性は前にもまして目立ついでたちをしていた。

「お久しぶりです。夜。^{ニユクス}」

ラシエルには夢の中で現れる麗人が、誰なのか検討がついていた。彼女には多くの名が存在する。中でも“夜”は、一番存在そのものに近い名だろうと思った。

ニユクスと呼ばれた女性もまたそれを否定することなく、艶やかな微笑を浮かべる。

「待っていたぞ。我が娘。

疲れているようじゃな。

私の助力を望むかえ？」

女性はラシエルをテーブルに招いた、ティーカップからは心地良いハーブの香りが漂ってくる。ラシエルはニユクスの間に答える前に、一口それを飲んだ。夢の中のはずなのに、癒される気がした。

「私が追っている者たちの居場所をご存知なのですか？」

「私の正体を知っていないながら、面白いことを言う。」

この世から夜がなくならない限り、私の目から逃れることが出来る者はいないというのに」

知っていることは、さほど驚くことでもなかった。ただニユクスがそれを教えてくれる素振りを見せたことに、ラシエルは困惑した。知っていたとしても、気軽に提供してくれないものだろう。

「彼らもまた貴女の子供ではないのですか？」

以前言っていたことと矛盾しているのでは」

夢を見る者は全て自分の子供のようなものと語った彼女が、鼻屑をするのは妙だった。

「ふむ……私が直接居場所を教えるのは、不公平かもしれぬ。さりとして、私の祝福がそなたに力を与えるのは仕方なきこと。

私にすら、止める術などないのだからのう」

ニユクスは哀しそうに笑顔を曇らせた。彼女にも意のままにならぬことがある。

「ニユクス？」

「夜はそなたに味方するであろう。

目覚めるがよい。愛しい我が娘、ラシエル」

ラシエルが不安そうな表情になっていることを目に留め、ニユクスは困ったように微笑んだ。

夜の女王の言葉も虚しく、はぐれ魔族たちの行方はつかめなかった。それでも、ラシエルは彼女を信じて昼夜が逆転した生活を続けた。

夜の方が魔力が安定しているのは確かだ。ラルフとクラウスは、ラシエルの行動を訝しんだがそれに習った。本来夜行性の彼らにとっても夜の方が都合が良かったからだ。

進展が見られたのは、一週間目の夜のことだった。ハルモニアが完全に自分たちの敵というわけでもない。そう気付いた相手がラシエルたちの排除をするべく動いたからだ。

苛立っていたのは、お互い様だったということだろう。迂闊に街の外に出るわけにも行かず、彼らもまた動けなかったのだ。

彼らはラシエルと共にいるのがラルフ・クラウディウスとクラウド・リードだと知っていた。知っていながら、先制攻撃に出たのは腕に覚えがあつたからだろ。魔族はラシエルたちが聞いていたより数が少なく三人しかいなかったが、皆魔術と剣術共に優れており、後方で援護に徹している魔術師もただものではない。

「腕が鈍った僕で大丈夫かな……とつても不安だよ。

だから……ちよつと卑怯な手を使つても仕方ないと思うんだ」

腕に傷を負い怯えた態度を見せるクラウドを追撃した魔族が地に伏す。男は悲鳴を上げる間もなく首を切り裂かれていた。

「どこら辺が鈍つてるのよ！」

炎の呪文を唱え終わり、ラシエルがクラウドに向かって突っ込みを入れる。

声だけでなく、炎もまたクラウドに向かって飛んでいった。

「ちよつと……何するの!？」

……ごほつごほつ、酷いよ、ラシエル。僕になんの恨みがあるつていうのさ？」

「今回は敵にも当たっている。

良かったな。命中率が上がって」

「おまけに味方にも当たってますけどね」

黒焦げになつた魔族を見てラシエルを褒めている(つもりの)ラルフにクラウドが恨めしそうな声を上げる。

ふざけているような三人に、魔術師と残つた魔族は逃亡を図ろうとした。

ラルフとクラウドが逃亡者の行く手を阻む。

ラシエルは地に跪き、迷わず自分の指に短剣の刃を当てた。数滴の血が地面に広がる魔族たちの血に混ざっていく。短剣はハインリ

ヒから貰ったものだったが、彼を呼び出すつもりなどない。ラシエルの頭の中には、契約者を名乗る謎の魔族の姿があった。

あれ以来試してみても男が呼び声に応じたことはない。しかし、今回は違う。ラシエルたちは戦闘中であり、夜なのだ。

地面の地が震えゆつくりと方陣を描き出す。この場にいる誰も見覚えがないそれは、間違いなくあの襲撃の日にあの男を呼び出したものと同じだった。

召喚方陣から姿を現した男の口から、低く威圧的でありながら甘美な声が紡がれ、漆黒のマントと髪が風に揺れた。

「夜は闇を満たす。」

我が戦場にこれほど適した時があるうか？」

男の登場にクラウスとラルフは、なんともいえない表情になった。ラシエルだけが純粹に嬉しそうな顔をしている。

「うわあ、また出たよ」

「ああ……これで楽が出来るな」

「ラルフ様ってある意味とつてもポジティブですよ。僕も見習わなくちゃ」

いつも通りのやる気のないラルフを見て、クラウスは感心した。

見習いたいという言葉も皮肉で言っているわけではないらしい。ラシエルは、二人のやり取りを横目で見て、脱力する。

「クラウス、これは見習わなくていいと思うわ」

「ああ、ラシエル、手の傷を見せなさい。」

我を呼ぶ度にラシエルが傷つくのは我慢ならぬが……今の我にはこれが精一杯だ」

ラシエルの手を自ら取った男は、そつと指先に口付けた。周囲の者には傷を癒したのだとすぐに分かったが、ラシエルはそれどころではない。会って間もない男の取った行動に赤面してうつむいた。

気を取り直して、召喚に応じてくれた礼と傷を治してくれた礼を

しよう顔を上げると男はすでに移動した後だった。

距離を縮めてくる男に魔術師は威嚇するように杖を掲げた。杖には魔力を増幅する効力があつたが、男は気にする様子はない。

「クラウディウスの者か。一体何者だ？」

魔術攻撃を弾かれ、魔術師の頭に被っていたフードが風で舞う。

魔術師は不気味な仮面をつけていた。素性を隠すためのものだろう。しかし、ラシエルが召喚した男にとっては意味を成さない。

「ほう？ 我が顔を忘れたとはな。

やはり人の一生とは我らに比べて随分と短いものだ。

半世紀ほど前にはエイレネーの宮廷魔術師としてクラウディウスとの外交を任されていた貴様が耄碌しているとはな」

魔術師は男の言葉にたじろいだ。ラシエルは困惑する。彼の言うことが本当なら、目の前にいる魔術師は元宮廷魔術師ということになる。そして、契約者の男は魔術師と面識があるらしい。

「まさか……いや、そんなはずはない……」

昏き焔の君……なぜ貴方ほどのお方が、そんな小娘などと」

魔術師の声は震えていた。男が誰だか知っているからだ。魔術師にとって、男はこの世にいないはずの、いやいてはならない存在だった。

「守る価値があるほど想っているのだな」

「まさか、貴方はかつて愛する片割れを追い詰め狂気に追いやった。その貴方が守るなど……」

魔術師は驚愕したように、侮蔑したように吐き出す。男の内容は、魔術師にとって意外なもので、同時に男がもはや恐れるに値しない愚かな存在になったようにも思えるものだった。

「そうだな。……我に限らず魔族にとって、本来守るなど愚行に過ぎぬ。

欲しい物は力で奪い己が物とする。恋心を抱いた相手にすらそれは適用される。

貴様の同士が今にも貴様を盾にして逃げようとしているのも、魔族

としては正しい姿と言えよう」

男が手をかざすと漆黒の黒い槍が姿を現して、逃げようとしている魔族に遅い掛かった。

その直後の一瞬の隙を狙って、魔術師は姿を消す。話をしている最中でも、こっそり長距離移動の魔術をつかう準備をして機会をうかがっていたんだろう。

戦意をすでに消失していたラルフたちも、魔術師の逃亡を阻止することはできなかった。

「逃がしたか」

「はぐれ魔族三人は始末したんだし、一度報告書を出して様子を見た方がいいかもしれませんね。」

すぐに捕まるほど、あの魔術師が間抜けだとは思えないですし」

はぐれ魔族は捕縛する予定だったが、こちらを襲撃してきたとなれば話は変わってくる。今回の処置は正当防衛になるだろう。

「クラウドとラシエルは、アレウスの元へこいつらを連れて行け。」

俺はこいつに話がある」

「はあ……分かったわ。クラウド、行きましょう」

ラシエルも男と話したいことは沢山あったが、それは時間が掛かりそうだった。会話している間に捕らえた魔族たちに逃げられても困る。

クラウドは、ラルフが面倒だからはぐれ魔族を押し付けたのではないかと疑ったが、素直にそれに従った。もしそうだとしても、彼は逆らえる立場ではない。

日が昇ろうとしている水平線を眺めている男の背にラルフは声を掛けた。

「何を考えている？」

「いや、若かりし頃の過ちを思い出させられるのは、なかなか堪えるものだな」

男は弱々しい笑みを浮かべて振り返る。魔術師の言ったことを思い出しているのだろう。ラルフは男の過去については触れずに、今の男が何を考えているのか読もうとせずに諦めた。

「変わったな」

ラルフにとつてこの男は変人や狂人と言つてもいいぐらい理解し難い男だった。それでも今よりは分かりやすい欲望に従つて動いていたように思える。

「ラシエルが教えてくれたのだ。我が本当に望んでいたのは何だったのかを。」

ただ、我は彼女の側で共に穏やかな時を過ごしたかっただけなのだと

「ラシエルは代わりか？」

男がラシエルを大切に思っていることは伝わってくる。ラルフの中にある男が浮かべたこともないような穏やかな表情がそれを物語っている。

「まさか。彼女とラシエルは別物だ。それを教えてくれたのもラシエルだった。」

最期の時を前に安らぎを与えてくれたラシエルには感謝している。この契約は……ただ、ラシエルと不肖の身内を見守りたいという我儂なのかもしれんな」

「さつさとあの世に行ってくれ」

心底迷惑そうにラルフが顔を顰める。言いながら、男が素直に要求に応じないことなど分かっていた。

「あの世とやらがあるなら、いずれ逝くさ。」

お前に安心してラシエルを任せられるようになったらな」

男は悪戯を思いついたように無邪気に笑って姿を消した。

自覚

「あの、もう一度言ってもらってもいいですか？」

ラシエルは、アレウスに胡散臭いものでも見るかのような目を向けていた。

「昨日の魔族の遺体が逃亡したんだ。

信じられないのは分かる。そう……滅多にあることではない」

アレウスもまた困惑している様子だった。死体が自らの足で逃亡したと部下に報告された時は、ふざけているのかと注意しそうになったぐらいだ。あり得ないことではないが、あつてはならないことだった。

「そんなのよくあつたら困ります」

「困るとかそういう次元の問題なのかな……」

クラウスはパンを口にしながら呟く。食事の席でし辛い話題であるにも関わらず、そのことを咎めたり不愉快に思うものはこの場にはない。ただ、厄介なことが増えたと思うだけだ。

「面倒だな」

「そう面倒……それも少し違うと思いますが」

「いや、面倒なことになった。

これが貴方たちがあつた仮面の魔術師の仕業だとしたら、一度倒した相手とまた戦わなくてはならなくなる」

仮定で話しているようで、皆それが事実だと分かっていた。仮面の魔術師以外に、こんなことをする必要があるものなどどこにいる？ いたとしても、彼らの仲間だろう。

死体を操る魔術は存在はしている。ただ、忌み嫌われ、使うことを禁じられているのだ。

「でも、ラシエルとあの方の契約も似たようなもんだよね？」

ラシエルが二度呼び出した謎の契約者は、既に亡くなっているはずだった。それが滅びたはずの肉体を持ち、自分の意思で動いている。人によっては、ラシエルが死体を操っていると思うかもしれない。

「死体を操っているというよりは、魂をこちらに留めているといった類のものだな」

「それは死霊魔術の一種なのではありませんか？

もしそうなら、パクスや神殿の上層部には知られないようにした方が良いでしょう」

死霊をこの世に留める魔術は、死体を操るよりも危険で高度な魔術だ。よっぽどの理由がないときにしか用いられることはない。

アレウスは、案じているようだった。彼にとっては、ラシエルが強い力を持っているのは歓迎だったし、禁忌とされている魔術に手を出していても問題はなかった。ただ、彼女が重い罪で処断されるような自体はなるべく避けたい。

「生きてるようにしか見えないのに」

ラシエルは男の手と唇が暖かかったことを思い出し、頬を染めた。それをラルフは何ともいえない表情で見ている。

「お前が召喚した時だけだろうがな」

「今は、逃げた死体がどこにいったのかを考えるべきだと思うな。

被害者が増えたら、僕らの立場は悪くなるだろうしさ。もう悪くなってるだろうけど」

アレウスはクラウスの言葉に頷いた。

「評判は悪いな」

だが、問題なのは、自信過剰の馬鹿者共が多いつてことのほうだ」

事件が解決せずに世の中が混乱するのはいいが、気に食わないこともある。事件を解決できないような魔術師をアレウスが優遇していることや、そんな魔術師をエイレネが送り込んできたことだ。ハ

ルモニアの人間にとって、エイレネとハルモニアは対等でなければいけない。

ラシエルたちが解決できないのなら、自分が。そう考えた者も少なくはない。街では傭兵と魔族の喧嘩が相次いで起きるようになった。おかげで怪我人が後を絶たない。

「その内、無駄な死人が沢山でそうだよ。血の気が多過ぎなんじゃないの？」

自分の短気さや魔族の残忍さを忘れたかのような発言ではある。しかし、彼もまた主同様に必要以上の争い事は好まない性質だった。面倒だからというのもあるが、何か問題が起こしたり周囲で問題が起きると、損をするのは自分であると思っっているからだ。

「反乱で皆気が立っているから余計だな」

仕方ない奴らだ、とアレウスは苦笑しながら珈琲を飲む。この街では、喧嘩自体は珍しいことではない。

いつも通りの少量の朝食を胃に治めてくつろいでいたラルフは、面倒臭そうに立ち上がった。

「暇を持て余している時でも変わらんだらう」

珍しく自ら進んで情報収集に行くようだ。いつになくやる気的主を見て、今の状況に飽きたのかな、とクラウスは思った。余計なことをいってやる気を削ぐ必要もない。クラウスも出かける支度をすることにした。

「早く捕まえることが出来ないことが、そんなに不満なら、協力してくれれば良かったのに」

「ラシエル、世の中って言うのは理屈に合わない理不尽なことばかりなんだよ。」

だから、諦めが肝心さ。

君の八倍近く生きている僕がいうんだ。間違いないよ」

「クラウスはそういうネガティブな考えには自信があるわよね……」

でも、それなら、別に辛く思うことも悲しく思うこともないじゃない。あるがままを受け入れるつもりなんだから」

「そうだね。でも、僕はまだまだ未熟だから、嫌なことは嫌なんだよ。」

言っていることが矛盾しているのも、魔族では……いや人でもよくあることだろう?」

「お前らは……探す気があるのか?」

不機嫌だという感情を表に出すはよくあることだが、ここまで苛立っているラルフも珍しい。クラウスとラシエルは互いにどうしてだろうと顔を見合わせたが、答えが出るはずもなかった。

死体安置所がある建物の内部は酷い有様だった。血が壁や床に飛び散り、肉片らしきものの片付けもまだ終わっていない。施設の職員が殆どが怪我を負ったため、人手が足りていないのだ。

手や足に包帯を巻いた人が三名ほど片付けに追われているのが見える。

「どつちに逃げたのか分かっているんですか?」

「分かっている。」

だが、三体とも違う方向へ向かったらしい」

目的地を分かりづらくするためだろう。アレウスの言う通り、施設の外の血痕は三方向に向かっていた。

アレウスも三人を手伝いところだったが、彼には本来の業務があったし立場の問題もある。彼は申し訳なさそう顔をしながら、執務室へ向かった。

ラシエルはあまり気が進まなかったが、施設の職員に死体の状態を尋ねることで死体のそれぞれの特徴を捉えることにした。足取りを掴むにしても、固体識別ができないようでは支障がある。

「じゃあ、僕は首が落ちかけている死体を追うよ。」

僕が葬り損ねたようなものだからね」

「俺たちは、背中に傷がある死体を追おう。
全身火傷を負った死体は脆いだろうから、それほど心配もあるまい」
魔術師を探し出すことが出来れば、それに越したことはない。しかし、それは難しいだろう。自らの意思で行動できない死体を追う方が何倍も容易なはずだ。

死体の目撃情報とラシエルの魔力追跡能力を生かしての追跡が始まった。今回も襲撃するつもりだったからか、死体は予想していたよりも簡単に補足できた。

「痛みを感じない奴を相手にするのは厄介だな。

ラシエルは後ろに下がって援護しろ」

「え、でも、また攻撃があたってしまうかも……」

昨日は、ラルフとクラウスの両方が同じ場所にいたからいいが、今日はラルフしかない。もしも、自分の攻撃のせいでラルフに隙が出来てしまったら……。ラシエルはそう思うと不安だった。

「クラウスの悪い癖が移ったか……」

俺がお前の攻撃にあたったぐらいで負けるとでも？

侮られたものだな」

言葉通りに受け止めれば怒っているようだ。だが、ラルフの顔には何も感情が浮かんではいなかった。

ラシエルは、彼の真意を探ろうとしてすぐに諦めた。

「分かった。遠慮なく攻撃させてもらう」

今のような状況でそんなことを考えている余裕はない。ただ、遠慮せずに魔術を使えばいいのだ。

「援護は攻撃とは違うと思うが……まあいい。好きにしる」

背に槍傷がある死体に切りかかりながらラルフはぼやいたが、それに返事はない。ラシエルは呪文の詠唱に集中していた。

ラシエルが放った炎の魔法は、奇跡的に目標に命中した。崩れていきながらも近づいてくる死体を他の魔術で足止めしつつ、ラルフはラシエルの方へ視線を走らせた。背後にもう一つの気配を感じたからだ。

焼け爛れた死体がラシエルに襲いかかるのを目にして、駆け寄る人よりは数段に速い移動速度でも、ぎりぎりだった。

魔術を使う間もなかったので、体で庇うしかない。ラルフの肩を剣が貫く。目の前に突き出た剣の切っ先を見て、ラシエルは青ざめた。ラルフは痛み顔を顰めることすらなく、ラシエルを抱えて敵から距離を取る。

傷を負ってから数分後、やっとラルフは微かな呻き声を漏らした。剣には毒が塗ってあったらしく、ラルフの肩を激痛が襲う。

「ラルフ」

「気にするな。鬱陶しい……」

いいから、後ろに下がっている」

痛みを我慢している状況では、ラシエルの気遣う声すら煩わしく聞こえた。

ラシエルは地面落ちている微かな血を見て、あの契約者を召喚しようと考えた。すぐに己の血を垂らし、召喚を試みるが、男が応じる様子はない。

「なぜ……まだ日が暮れていないから？」

どうして、こう肝心な時に私の魔術は役に立たないのよ！」

どうにかして彼を助けたい。この魂約者に力を与えることができたら。ラシエルは自分の思いに驚いた。自分はいつの間にか彼を魂約者だと認めていたのかもしれない。

目の前で傷を負いながら戦うラルフを見る。彼の苦痛がこちらにまで伝わってくるような気がした。

ラシエルは、魔力の感知には自信がある。自分の魔力とラルフの

魔力は、帯びている気配が似ている。まったく異なるものだと思っていた。どうして今まで気付かなかったのだろう。性質は真逆、ゆえに対称的で、まるで対になっていくかのような魔力だった。

似た性質の魔力は影響しあう、また性質が正反対の魔力もまた影響しあうのだ。

魂約者が側にいれば、それを意識していれば、魔力は安定する。今までは効果がなかった。でも今なら……

彼が本当にラシエルの魂約者なのなら、ニユクスと縁があるのも納得できた。ニユクスはデウスノミアを守護する存在だからだ。

「彼にニユクスの加護を」

ニユクスの力を借りる魔術の詠唱を行う。ラルフは一瞬そんなラシエルの方を見て怪訝そうな顔をしたが、すぐに目の前の敵に向き直った。

今は夜ではない。でも、デウスノミアは夜の縁者なのだ。力を得られないわけがない。

ラルフの剣が紫の炎を上げ始める。ニユクスメイデイを思い出させるようなその炎に死体たちはひるむ。感情を持たないはずなのに、それは恐怖を感じているように見えた。

ラルフの剣が容赦なく彼らの体を引き裂く。死体は紫の炎の包まれ、灰へと変わっていく。先ほどまで何度切り刻んでも立ち上がってきていて魔族は、やっとあるべき状態に戻った。

死もまた彼女と縁深い事象である。魂だけでなく肉体にも死が訪れたのだ。

クラウスが追い込んできた屍も同様の末路を辿った。

「凄いじゃないか。ニユクスの魔術なんていつの間にも得とくしたの？」

「睡眠学習ってやつかな」

夢の中でニユクスに出会わなければ使えなかったかもしれない魔

術だ。間違いででもない。

「それはまた……楽で便利だな」

「私への皮肉のつもりじゃないわよね？」

ラシエルは今までいくら勉強しても練習を積み重ねても、まともな成果が出なかったことを思った。今回のことがニユクスの慈悲や気まぐれだけではなく、今までの努力の成果でもあればいいのに。それでも思わなければ、魔術師なんてやっていられない。

「帰るぞ」

ラルフは毒を中和し終えたのか、いつも通り気だるそうな表情になっている。ラシエルは、安堵する一方で何の変化もない彼の態度に苛立ちを覚えた。

そして、魂約者だと自覚したということは隠しておくことにした。自分が彼の片割れだと胸を張っていえるだけの力を手にするまでは「結局、魔術師は見つからなかったね」

その後も搜索は続けたが、仮面の魔術師の姿はどこにもなく、数日後ラシエルたちは一度パクスに戻るようになった。

災いは人の姿をして

パクスに戻ったラシエルたちは、聖都で新たに事件が起こるのを防ぐべく行動することになった。

魔術師を逃したことを咎める声もあったが、ラシエルを派遣すると最終決定を下したのは現宮廷魔術師たちだ。責任は彼らにもある。エイレネでは宮廷魔術師たちの地位は高い。だから、表立ってラシエルたちを咎める者はそういなかった。

それでも、ラシエル本人は落ち込んでいた。宮廷魔術師たちの信頼を裏切ってしまったと感じたからだ。

リード兄弟がそれを知ったら、呆れただろう。ラシエルを陥れるためにハルモニアに向かわせた可能性もあるからだ。

ラルフがラシエルを庇って負傷したと知り、ハインリヒは眉を顰めたが、ラシエルを罵ったりはしなかった。怪我はすでに完治していたし、それよりも仮面の魔術師の方に興味があるようだった。再び戦うことになるだろう相手だ。興味を持たないわけにもいかないだろう。

ラシエルもまたこれからのことを気にしていた。仮面の魔術師を含む強力な敵が現れた時、また同じことが起きるのではないかと、デュスノミアだと自覚したことで、ニユクスの力を借りることが出来るようになった。しかし、そればかりに頼るわけにもいかない。

“デュスノミアは混沌と争いを招く”

ラシエルは、自分がそうなのだと思うと怖かった。

夜になって訪れたニユクスの庭でも、ラシエルの表情は暗いままだった。迎える側のニユクスは、今宵も優しい笑みを浮かべている。「はぐれ魔族を倒しただけでは、不服と見える。

もう一杯どうじゃ？」

二杯目のお茶を勧められ、ラシエルは断った。ティーカップから漂う香りは落ち着くものだったが、今の彼女の心を癒すことは出来そうもない。

「いいえ、あれで満足しています。ラルフたちに出会う前の自分を振り返れば……」

でも、怖いのです。私が魔力を上手く扱えないことが災いを招くのではないかと」

これまでも不安がなかったわけではない。ラシエルは自分が魔力の制御を不得手だという自覚はあった。問題は自分がデウスノミアだと自覚してしまったことだ。

ニユクスは落ち込むラシエルを見て、目を細めた。不安は、ラシエルが夢とは別に己に近く執着すべき存在が出来たという意味も持つ。失うことを恐れる時、人は不安を抱くのだから。

アマリーエが大切でなかったわけではない。ただラルフのように共に歩む運命にある存在とは違っていた。

「そなたはもつと片割れを信じてもよいのではないか？」

今までのデウスノミアと魂約者の多くは争う道を選んできた。だが、そなたらはそうではない」

ラシエルは視線をテーブルから上げてニユクスを見つめた。彼女は優しくそれでいて真剣な視線をラシエルに向けている。

数多の戦乱と幾人ものデウスノミアを見てきた者の心を想像することなど出来ない。ニユクスが何を思い、過去を語るのか……読み取ろうとしても上手くいかない。それでも、ニユクスが興味を抱いているのは分かった。ラシエルとラルフの関係が今までのデウスノミアと魂約者の関係とは異なることに。

「私個人の力よりも二人の関係の方が重要だということですか？」

「二人だけではない。周囲の理解も必要となる。」

忘れてはならないのは、力そのものが争い、混沌を招くわけではな

「ということじゃ」

「力があれば人はそれを利用してしようとする。ただ、戦争を起こすのは力そのものではなく、それをを用いる人だった。」

デウスノミアという存在も同じなのかもしれない。夜は言った。

「多くは争う道を選んできた」と。それは、争わず平和に一生を終えたデウスノミアと魂約者もいたという意味にもとれる。デウスノミアの存在そのものが争いを招くわけではなく……デウスノミアでなくても争いは起こせる。

「そう……ですね。なんだか勘違いしていたような気がします。」

デウスノミアだって自覚しても、私は私なのに」

「今までもラシエルは自分たちが災いを招く存在ではないと証明しようとしてきた。これからも、それを続ければいい。争いは起きるかもしれない。けれど、今まで正しい信じてきた事全てを否定する必要などない。デウスノミアだったからといって、何が変わるというのだろうか？ ラシエルは生まれた時からデウスノミアだったというのに。」

「愛しい我が娘。私との縁を不運と嘆くか、幸運と喜ぶかすら……
全てはそなた次第。」

私はただここから見守るだけしか出来ぬゆえ」

「幸運でしたよ。少なくとも、先日の戦いでは。」

きつと、これからも」

「そうであつて欲しい。未来への希望を失わない。前向きとも楽天的ともいえる思考が、今のラシエルを作ってきた。それが、儂い記憶の中の約束だけを頼りに夢を抱き続けることを可能にしてくれた。」

「そなたはそなたの思う道を行くがいい。」

「いずれ己が力を御せる日もこよう」

「実のところラシエルの魔力は弱いわけではない。彼女が強力な魔力を持ち制御する器の持ち主でなければ、ニユクスの力の受け皿に

はなれないのだから。夜の加護を得て、紫の焰を召喚した時点でそれは証明されていた。

「はい。ありがとうございます」

ラシエルの表情が少し明るくなったのを見てニユクスは再度紅茶を勧めた。次にラシエルに必要なのは十分な休息だ。ニユクスがラシエルに出していたのは、ニユクスメイドの花弁を少量ブレンドした紅茶だった。

その後はラシエルがハルモニアで出会った海竜の話など、他愛無い話題が続いた。何者かの足音が聞こえてくるまで、それは続いた。「我が庭園への来訪者はもとより少ないが……これは久しい客のようじゃな」

「私は帰った方がいいですよね」

ラシエルは、足音の主が気になった。穏やかな性格だと思っていた夜が、次の来訪者を歓迎していない様子だったからだ。

「ふむ……あれとは、いずれ顔を合わすこともあるうが、今は時ではない。

そこに迎えも来ていることじゃ。続きはまたの機会に」

「迎え？」

「ラシエル、帰ろう」

ラシエルが夜の視線を辿って振り返った先には、あの契約者の姿があった。彼はそこにいたのが当たり前のような顔をして、ラシエルに手を差し出してくる。

「なぜ、貴方が」

「ラシエルを守るためだ。……それに、彼女とは我も縁があった」

「昏き焰の君……そなたにとっては、辛い縁であつたらうな」

「確かに忌々しいと思つたこともある。

だが、我はこの縁を利用して生きてきた。今もそうだ。

“彼女”のことを貴女のせいにするつもりはない」

手を取り庭を出て行くこととする男の背にニユクスは問うた。彼は振り返ることなく夜の言葉を否定する。男の目にも歩みにも迷いはなかった。

「なぜ、また貴方がいる？」

朝食で顔を合わせたラルフは、見慣れた男の顔を見て嫌そうな表情になった。リード兄弟は、関わりたくないのか、見なかったことにしている。

「お前の代わりに迎えにいったただけだ。夜はラシエルに友好的だが、彼女の縁者皆がそうではないからな。

今度はお前が行くといい」

「あれの話し相手は疲れる……睡眠中まで面倒な事をする気はない」
いつも通り気だるそうな表情のラルフは、そういうことなら任せると続けた。男は呆れた表情になったが何も言わなかった。事情をなんとなく察したからだ。

「あれってまさか、夜のことじゃないわよね？」

「女と女の姿をした存在はどうしてこう、口を閉じていることができないんだ？」

「それは、偏見だと思っけれど……」

そもそも、夜が相手の嫌がることをするとは思えないし」

あまりしゃべらない女性だっている。ラルフが実体験をもとに嫌味を言っていると分かっても、ラシエルは腹が立った。夜はラシエルのおしゃべりに付き合ってくれるが、ラシエルが静かに過ごしたい時には口を開かない。

「ハルモニアに行った時は毎日のように夢に出てきてくれたおかげで、寝不足だった」

「ああ、それで機嫌が悪かったんですか。

良かった。僕のせいじゃなくて」

それまで黙って食事をしていたクラウスが思わず呟く。ラシエル

も納得した頷いた。彼にしてみれば、この上なく不愉快だったに違いない。

「あれ……でも、それならラルフも彼女の力を借りる魔術が使えるんじゃない」

「それは難しいでしょうね。魔族は自分より強い者の力を借りる系統の魔術は不得意ですので……」

なぜかは分かるでしょう？」

「魔術の相性は性格に関係するからね。そう考えると、僕は結構得意な方なのかな？」

クラウスの考えは、ハインリヒの説明を否定するものに思えた。

彼は、他者を敬っているから自分を卑下しているわけではない。むしろ、全てを否定的に見ているのだから、その手の魔術は不向きだろう。他の魔術でも、自信がある程度必要なので向いていないのだが。

「……それはどうかしら」

「試さない方がいいだろうな」

他の二人も何も言わなかった。魔術が苦手な魔族もいる。

ラシエルたちが去った後のニユクスの庭は、同じ場所とは思えないほど陰鬱な空間になっていた。空の月も星も姿を隠し、庭園の薔薇は毒々しいほどの芳香を放っている。それでもその場にいる二人はそれを気にも留めていない。

「随分と肩入れしているんですね。珍しいこともあるものだ」

ニユクスの傍らに立った男は面白そうに、だけど同時に詰まらなさそうに言う。

庭の変化がニユクスの心情の変化を表しているかに思えたが、それでもないらしい。ニユクスは新しい客人にもお茶を勧めた。

ラシエルに出した物とは違う血のような色をした茶だったが、どちらともニユクスメイディを使っている点は同じだった。普通の人間

なら命を落としてもおかしくない凶悪な幻覚剤。どこか血の臭いに似た香りを発するそれに、男は平然と口をつけた。飲みなれた者にとつて、それは幻覚どころか快楽や苦痛さえもたらしてはくれない。「意外性に欠けるお前より良いかもしれぬ。」

血の匂いの耐えぬ子よ。争いや混沌をもたらす者とはお前のような存在を指すのだから」

「それはどうか。」

私も彼女も、一人だけでは大したことなどできはしない。いつも、我々はただの切欠に過ぎなかった。

そうでしょう？」

男がニユクスにそう問いかけた時、もう彼女の姿はそこにはなかった。

契約者は集う

仮面の魔術師はハルモニアで騒動を起こして後は姿を見せていない。しかし、宮廷魔術師たちは彼が再度現れることを想定して警戒している。

ラシエルたちには報酬が必要最低限しか出されなかった以外は特にお咎めもなく、新しい仕事はすぐに用意された。それは、聖都内の警備だった。何者の如何様な思惑によるものかは不明だったが、ラシエルたちは今回の仮面の魔術師との戦闘要員に入っているようにらしい。

退屈な早朝の見回りを終えて、昼食を食べつつラシエルはレヴァントたちに視線を向けた。彼はサラマンダーの尾にしがみ付いて楽しそうにしている。召喚の練習も兼ねてサラマンダーも呼び出しておいたのだ。

「エルピスとレヴァントって意外と仲良いわよね」

「エルピス？ ああ、あのサラマンダーのことか。」

あれは仲が良いというより……鈴竜が一方的にサラマンダーになっているんだらう」

レヴァントを尻尾で追い払おうとして失敗したようにも見える。

「羽が燃えたりしないのかしら？」

「鈴竜も内陸部で暮らす竜だからね。レヴァントは、熱いのは平気なんだと思うよ」

陸上で暮らす竜は熱に、水中で暮らす竜は冷気に強い。また竜の鱗は鎧や盾の材料にされるほど丈夫で、魔力に対しても耐性があるとされている。

鈴竜の羽は薄く脆く見えるが、触れたことがあるラシエルはその硬さには気付いていた。見た目よりは頑丈なのだろう。身の危険が迫ればレヴァントには羽音がある。いらぬ心配だったか、とラシエルは彼らから視線をそらした。

「やっぱりラシエルは能天気とういうか、大物だよな」

「いや、単に馬鹿なんじゃないかと最初は思ったよ」

隣のテーブルからアルマとクラウスが口を出す。アルマは聖騎士でありながら特に不満もなさそうに魔族と同じテーブルでお茶を飲んでいた。

彼も妹のアマーリエ同様にあまり魔族に対する偏見が無い。流石に始めはラルフたちとラシエルが同居していると聞いて驚いたようだったが……

「あのさ、何から突っ込みを入れていいのか迷う状況なんだが、面倒だから省いてもいいか？」

聖騎士の青年は魔族を目の前にした直後にただそう言った。

「そうしてくれ」

細かい事を気にせず面倒なことが嫌いなラルフが異を唱えるはずもない。ラシエルは呆れたが、デウスノミアだと騒がれることを思えば今のアルマのような態度をとられた方がいいに決まっている。

ラシエルは、聖都の警備をする際にアルマと組むことになったと聞いた時、魔族の皆を紹介する時はアマーリエに同席してもらおうと思っていた。ところがアマーリエは危険だからという理由で両親に外出を禁じられてしまった。そのため、アルマはラシエルと魔族たちの関係などを知る前に彼らと直接顔を合わせる事になってしまった。

「君も君の妹と同じでなかなか変わっているよね」

「俺たちなんて、神族に比べりゃあ大したことないね」

まあ、最近のアマーリエの手紙の内容からして何かあると思ってたよ。でなきゃ、俺でももうちょっと驚いてた。

そもそも、魔族が人間を変わってると思うのは、俺が神族が変な奴ばっかりって言うのと同じじゃあないのか？」

アルマはクラウスの言葉を否定する。魔族と人が仲良くしている

(ように見える) 光景は、多くの者は異常だと感じるかもしれない。しかし、では神族と人が共にいるのはどうか? 彼にとつての日常もまた一般的なものとは言い難いものだった。もつとも、そのせいで彼は自分自身の感覚がずれている自覚がない。

「私たちの感じる違和感が種族の差のせいだと?

ラシエルが平凡な人間だったなら、あるいはラルフ様が多くの魔族たちと同じような感覚の持ち主であったなら、私たちの今の関係は成り立たなかったでしょう」

ハインリヒの言葉は主のことを貶しているようにも聞こえるが、それを咎める存在はここにはいない。ラルフ本人も三百年以上も変だと言われ続けて来たので今更気を悪くすることもない。

「まあ、いいんじゃないの?

これなら神殿側に私たちのことがばれずに済みそうなんだから」

「ああ、それなら少なくとも俺の魂約者にはすではばれてると思う。ラシエルのことを“夜の娘”って呼んでいたからな。今までは意味が分からなかったけれど、それってデユスノミアのことなんだろう?」

アルマが何気なく口にした言葉で場が静まり返る。

「それって……危険なんじゃないの?」

「どうだろうな……」

少なくともラーナはラシエルに敵意を抱いてはいないようだった。

魔よけのお守りを俺に預けるぐらいだし」

アルマは思い出したかのように(実際そうなのだろう)、銀色のブローチをラシエルに手渡す。三つの輪が絡み合う幾何学的なデザインの銀製のブローチだった。

ラーナというのはアルマの魂約者である神族の女性の名前だ。もちろんラシエルはラーナと面識などなく、彼女から何かを贈られる理由などない。

「魔避けなんて、むしろ僕らへの悪意しか感じないよ」

「だが、それからは何の力も感じない。

ラーナとやらの意図が分からんな」

「何かのお呪い用のアイテム？」

形からしてお守りだというのは納得できなくもない。今は力を感じなくても何か発動の条件があるのでは、とラシエルは考えた。

「いや、お守りみたいに思ってくれていいけど、一応契約の品ってことで。」

それから、俺の魂約者から伝言。

俺のこと聖都防衛と護身用にこき使ってくれってさ……

あいつの方が強いのに、なんで自分じゃなくて俺なんだか。

やっぱりあいつらは何考えているのかさっぱり分からん」

つまりアルマを召喚して戦闘に使えということである。

ラシエルはアルマの言葉に首を傾げた。ラルフとリード兄弟はラーナが何かを企んでいるのではと疑ったような表情になったが、ラシエルはそれよりも気になることがあった。ラシエルは人間を召喚したことなどないし、しようと思ったこともなかったのだ。

「えっ……人間って召喚できるんだ？」

「貴女つて人は……」

少なくとも魔族を召喚するよりは簡単なはずですよ。

身近な存在であればあるほど召喚に応じてくれる可能性が高くなるのですから」

「今ではあまり召喚しないよね。」

奴隷制度が廃止される前は、戦場では珍しいことでもなかったって聞いたことがある」

戦場で兵士を召喚する行為は昨今では滅多に見ることができない。それは召喚した魔術師と召喚対象の間に生じる関係に理由があるとされている。

魔族の国では今でも奴隷のような存在がいるが、人間の国では奴

隷のいない国が増えていた。エイレネでも数世紀前に奴隷制度を廃止している。

「つまり人間を召喚するのは人権を侵害する行為だというわけね」

「えっ、俺ってラシエルの奴隷扱ってこと？」

「……下僕は一人で十分よ。」

召喚が召喚対象を束縛する行為だというのは分かっていたけど、そう考えるとエルピスにも迷惑を掛けていることになるのかもしれないわね」

「そうかな？」

このサラマンダーは君に呼ばれるのは嫌がっていないと思うよ。鈴竜と遊ぶのはどうか知らないけど」

レヴァントはエルピスの尻尾と戯れることに飽きたのかラシエルの膝の上でうとうととしている。まだ幼いのであれだけで疲れて眠くなってきただけなのかもしれない。エルピスはラシエルの足元から彼女の顔を見上げていた。心なしか先ほどよりもくつろいでいるように見える。ラシエルはエルピスをレヴァントの遊び相手にするのはやめておくことにした。せめてもう少しこのサラマンダーが成長するまでは。

「とにかく相手はあの仮面の魔術師。」

神殿側も私たちと対立している場合じゃないってことじゃない？」

「仮面の魔術師を排除したいのは事実のようですが、神殿側を完全に信用するわけにはいきません」

「これに警戒心を持ってといっても無駄だ」

「警戒したり疑うのは僕らの役目ってことだね。任せておいてよ」

クラウスのはちょっと違うのではないだろうか。アルマは不思議そうな顔をしているが、他のメンバーの何ともいえない視線がクラウスに向く。

「……魔術師の正体についてなんだけど、貴方は心当たりがあるん

「ですよ？」

ラシエルは同じテーブルを囲んでいながら一言もしゃべらない男に問いかけた。夜でなければ召喚できないのではと考えていた男は今日は昼間でも召喚できた。まだまだラシエルの魔力は安定していないようだ。

「ダリウス・クレメント…… エイレネとクラウディウスの和平のために尽力した宮廷魔術師だ」

彼は生前、ダリウスと何度も顔を合わせたことがある。数十年会わなくても分かるぐらいダリウスの魔力は記憶に残っていた。魔力は持ち主によって違う性質を持つ。ラルフやハインリヒのように暗く冷たい魔力を持つ者もいれば、ラシエルのように暖かくあらゆるものを包み込むような魔力を持つ者もいる。もちろんそれは目に見えるものではない。ただ魔力を持つものなら近づけば感じ取ることが出来るのだ。

「彼は外交面で活躍したこともあって、魔族に知り合いも多くいましたからね。」

魔族と共に行動していてもおかしくない」

ハインリヒに続いてラルフとクラウスも納得したように頷く。ラシエルだけは、あまり信じたくことだったので不満そうな表情を浮かべた。元宮廷魔術師が国内を騒がす犯罪者だとは思いたくない。

「へえ……ダリウスのおっさんが仮面の魔術師だとはなあ。」

人間で短い間ですっかり変わっちまうから、怖いよな」

「緋耀!？」

勝手に庭に入ってきている緋耀に驚いたのはラシエルだけだった。他のメンバーは気配に気付いていたらしい。ラルフたちは緋耀を今のところは味方だと判断していたし、アルマは魔族の皆が警戒している様子がないので知り合いだと判断した。

「あ、話声が聞こえたもんだからさ。いや、勝手に入って悪かった。」

でも、さっきの内容なら、もうちょっとこつそり話す事をおすすめするぜ」

「なんでこんな時期に、また聖都になんているんだか」

パクスは以前よりも警備が厳重になっている。パクスは魔族の侵入を禁じているし、緋耀はただでさえ敵が多い立場なのだ。彼がわざわざパクスにいる理由がラシエルには分からなかった。

「それに、また真昼間に歩いて」

「ちゃんと食事はしてるから大丈夫だって」

緋耀はラシエルの前で倒れたことを思い出して申し訳なさそうな顔になった。それでも目の前の甘い物には手を出さずにいられないらしい。ラシエルは止めようとしたがすでに遅かった。

「……個性的な菓子だな」

どうコメントすべきか困っているような緋耀にラシエルがお茶の入ったカップを差し出す。

「フオーはいらないのよ。ハインリヒの作る食べ物危険なのはいつものことなんだから」

「あれ……ちよつと待てよ。」

深紅の髪魔族つて！

緋耀の髪の毛の色は鮮やか過ぎて記憶に残りやすい。一時的にでも緋耀を追っていたアルマが覚えていたのも仕方なかった。

「ああ、そっぴや、あんたに追われてたこともあったな」

「彼もラシエルの知り合いなのか……」

彼らを知らない者が見たら突っ込みどころ満載な集まりだが、彼ら自身はこの集いを受け入れている。それが一番異様なことなのかもしれない。

碧い襲撃者

騒音によって昼寝から目覚めたラルフは、苛立ちを隠すことなく部屋を出た。

ラルフの睡眠を妨害することは非常に危険なことだ。リード兄弟ならそんな無謀なことなどしない。

どうせラシエルが魔術の訓練でもしていて失敗でもしたんだろう。ラルフはすぐにそう検討をつける。しかし、音がした方に近づくとちこそうではないと気付いた。微弱ながら屋敷にいるはずのない存在の魔力を感じる。

身体のいたるところに小さな傷を負い怒鳴る少女を目にしてラルフは安堵し脱力した。心配する必要などなかったのだと。

音の正体はすぐに分かった。廊下にはガラスの破片が散らばっている。外からの風が阻まれることなく吹き込んでいた。

驚きからか一時的に小さくなっていたラシエルの魔力が恐怖で膨らむ。彼女を威嚇するように周囲の空気が動いた。

「落ち着け。」

戯れにしては度が過ぎるようだが、風の言葉だ」

最初の言葉はラシエルに、続けた言葉は第三者に対するものだった。

「風？ ……あ」

微かな羽音。ラシエルは自分を囲む存在が何者か気付き、落ち着きを取り戻した。もっとも、彼女は普段から落ち着いているとは言い難いが。

風の精霊たちはラルフの登場に動揺していた。ラシエルは彼らの存在を認識して後困惑した。シルフィードは元より悪戯好きな種族だ。とはいえ、特定の相手に敵意を持って攻撃することなど稀で、

一所にとどまるとなるともつと珍しい。

彼らが今ここで屋敷の窓ガラスを割ったのは、彼らの意思とは考えにくい。召喚魔術による襲撃と見るのが妥当だろう。問題は彼らがラシエルたちをどうにか出来るだけの力があるかという点だ。シルフィードは数が集まればそれなりの被害を出すことが可能ではある。だが、特定の相手を葬るに適した種族だとは考えにくかった。

一時怯んだシルフィードたちは、気を取り直したように攻撃を再開する。危害を加えるというより、屋敷内にあるものを手当たり次第に壊し始めたというものだった。ラルフにとっては後片付けが面倒なこと以外はどうでもいいが、ラシエルにとってはそうはいかない。彼女は実験器具や魔法道具に被害が及ぶ事を恐れて自分の部屋へ駆けだした。

「待て」

ラルフの声も本気で焦り始めたラシエルには届かない。仕方なく足元でキョトンとしている鈴竜のレヴァントに声をかける。

「こいつらと遊んでいろ」

レヴァントはしばらく首を傾げていたが、どうやら意味を理解したようで羽を広げた。鈴のような音は少しずつ大きくなっていった。羽音が屋敷内全体に聞こえるようになると、物が壊れる音は止んだ。

ラシエルは自室に辿りつき慌てて扉と窓を閉めた。窓はガラスが割られてしまえば風の侵入を防げないが念のためだ。

思わずため息をついた直後、背後でした物音に息が止まりそうになる。外部からの侵入者の存在に気を取られていたラシエルは、室内の様子がおかしいことに気づくのに遅れてしまったのだ。自分の命が狙われている自覚が欠けていたのも否めない。家にまで侵入して彼女を害そうとした者が今まではいなかったのも理由だろう。

部屋にいたのは黒衣をまとった人物だった。体格はクラウドと同じくらいで少々小柄だが、その分素早い可能性が高い。以前の襲撃者同様に顔を隠しているが、一部見えている素肌の色が青いことから人間ではないのかもしれない。

「誰？ いいえ、何者なの？」

咄嗟に相手と距離を取るが、男が暗殺や戦闘を生業とするのならそれはあまり意味をなさない。ラシエルはまだ魔術師になって日が浅く、一人での戦闘経験は皆無に等しい。魔術師はよっぽど強い限り単独で戦うのに不向きな職種だ。

気休めにもならないだろうが、役に立ちそうな物を探してポケットに手をつ込む。指先が冷たい物に触れて、何を入れていたのかを思い出した。

クラウド！

「あのさ、呼ぶならもつと早く呼んでよね。」

もしものことがあつたら、僕がどんな目にあうと思ってるの？」

召喚の呪文詠唱の省略。不可能ではないが、ラシエルの力量からすればそれは自殺行為に近い。通常よりも魔力と体力を消費するからだ。それでも、現状では正しい判断だといえた。

「君も、なんですぐに攻撃しなかつたんだろうね。」

……もしかすると今までとは違う目的だったのかな」

男はあくまで冷静にクラウドの剣をかわす。武器を構える様子さえなかった。

急な疲労から片膝をついたラシエルに黒い影が飛びかかる。鋭い爪がラシエルの肌を傷つける前にクラウドがその攻撃を阻む。ギリギリだったので、服が爪に引き裂かれる音が室内に響いた。

クラウドの剣が敵を襲うが、切れたのは衣類だけだった。ただ、その攻撃の意味はあつた。襲撃者の種族が分かったからだ。

「鱗におおわれた硬くて碧い皮膚……爪碧族。」

爪碧族にまで生き残りがいたなんてね」

爪碧族は、碧い鱗のある肌と蝙蝠のような翼を持つ種族である。肌よりも深い碧の硬い爪を持つことから爪碧族と呼ばれる。

また、彼らは紅角族と同じように根絶やしにされたはずの一族だった。彼らは他の魔族同様に戦闘を好むが、武器も魔術も使わない。魔力は全て肉体の強化に注ぎ、己の体のみで戦う。先のクラウデウス王に従うのを拒んで破滅の道を辿った。

「仮面の魔術師が寄越した刺客？」

「さあね。誰が裏にいるとしても、君を襲ったことに違いはないよ。二人の爪碧族は、体格も動きもよく似ていた。一人は顔を隠していた布が取れ、鋭い紅紫色の目がラシエルを睨み付けているのが分かる。無表情で敵意は感じるものの何を考えているのかは読みとることが出来ない。」

クラウスと二人の距離が縮まる。二本の短剣と爪が交差した。動きは若干クラウスの方が速いが、相手が二人な上に彼らの皮膚はとても硬い。

ラシエルは緋耀の角の指輪を握り締めた。疲れているが、応援を呼ぶ必要がある。

「やっぱりちよつと硬いな……」

「え？ ど、どこに行くつもりよ!？」

ラシエルを片手で抱きかかえたクラウスは窓に向かって走る。当然ながら襲撃者の二人も後を追った。

「外。屋内じゃ魔術で攻撃し辛いからね。」

ああ、もちろん君が攻撃するんだよ。頼れる相棒が君だなんて、悪い夢だと思いたいなあ」

窓から飛び出したラシエルたちの目に、屋敷の離れが半壊する様子が映る。どうも他所でも戦闘中らしい。つまりここに助けが来る可能性は低いということだ。

「街に出るよ」

「駄目に決まってるでしょう。他の人を巻き込むかもしれないじゃないの！」

「こんな時に何言ってるのさ。まずは自分の心配をするんだね。騒ぎを大きくするために屋敷を出るんだよ。」

そうすれば、城や神殿からも応援が来る。呼ばなくても勝手にね」
ラシエルの制止を振り切ってクラウスは駆けた。彼にとってはパークスの民がどうなるかと知ったことじゃない。ラシエルの魔術も信用できなかった。現に彼女は媒介を持っていながら緋耀をなかなか召喚できずにいる。多少魔力が強くなり安定したところで、元が元だ。

正午過ぎという時間帯のせいか、人通りはどこも少ない。それでも今まで目立たないようにしてきたラシエルには落ち着かない状況だった。広場にも殆ど人は見当たらず、日陰にちらほらといるくらいだ。クラウスは噴水の前で立ち止まるとラシエルを地面に下ろした。

「ここでいいかな」

クラウスには、何かとこちらの様子を窺っている人たちを見回して一人納得した様子で頷いた。彼にとっては、周囲の建物も人も助けを呼ぶのに必要な餌のようなものでしかない。

「こっそり始末したいから屋敷に来たわけでしょう？」

「なに誘いに乗ってくるかしら」

「どうも気にしないみたいだよ。僕らがたまたま家にいただけなのかもね。」

「それか」

ラシエル、ラルフ、ハインリヒ、クラウスの四人を分断できるならどこでも良かったか。そう言おうとしたクラウスに碧の爪が襲い掛かる。足音を立てず、本当に息をしているのだろうかと思いたく

なるほど静かに無感情に彼らはそこに立っていた。

「相変わらず寡黙なんだね。それとも、僕なんかとは話す気にもならないってこと？」

「奴らは拳で語るタイプだからな。」

よお、ラシエル。まったく召喚されないから、戦闘中は俺のことなんて忘れてるもんだと思ってたぜ」

ラシエルに向けられた爪を大剣が受け止める。現れた青年の足元には真つ赤に光る魔方陣。角が見えなくても鮮やかな真紅の髪を見れば、背後からでも誰なのかは一目瞭然だった。強力な存在感。ラシエルは今頃になって緋耀がクラウスよりも強いことに気付いた。少なくとも魔力だけでいうならラルフほどではないにしろハインリヒよりは強い。二本の角を持つ紅角族の青年を改めて頼もしく感じた。

「緋耀、来てくれてありがとう。状況説明は必要？」

「こいつらを片付けてからな」

にやりと笑う緋耀にラシエルも微笑んで答える。楽しそうにも見える二人のやり取りにクラウスは顔を歪めた。

緋耀とラシエルの魔術によって鋼鉄のような鱗にダメージを与え剣で再度攻撃を行う。徐々に効果が現れていることは、足元に紫色の血痕ができていても知ることができた。

「どうして。なぜここまでする必要があるの？」

誰のために、何のために戦っているの？」

傷を負っても爪碧族の二人からは怒りや焦り恐怖の感情は見えない。ラシエルは薄気味悪く感じ始めていた。

「我々は強い相手と戦えるなら、手段も目的も選ばない」

思っていたよりも高い声にラシエルは少し驚いた。爪碧族は容姿だけでは性別が分かり辛い。

「なんだ、しゃべることができないのかと思ってたよ」

「戦いに言葉など不要。

だが、この世に混沌をもたらずデウスノミアに挨拶ぐらいはしておこうと思った。

私は蒼軌そうき」

「俺は矢翠しすい」

顔をフードで隠していた方も続けて名乗る。そちらは声から判断するなら男性のようだった。

「アレウスもそうだけど、戦闘馬鹿はデウスノミアが好きだよね。まあ、僕も嫌いじゃないけどね。一緒にいると時々、嫌になるよ」

矢翠の爪がクラウドの左肩に突き刺さる。クラウドは一瞬苦痛に眉をひそめたが、それは相手の動きを封じるための手段だった。矢翠の右手を掴み、右手に持った短剣を振るう。左の爪で止められた刃に魔力を込めた。二本の爪が宙を舞い地面に落ちた。同時に矢翠はなんとかクラウドの腕から逃れて距離を取る。二人の間に赤と紅紫色の血の道ができた。

「そこまでだ！ 動かないで貰おう。

はぐれ魔族の二人を連行しろ」

急に現れた青い軍服を着た人々と声に広場は静まり返る。青を基調とした軍服は王国軍のものだ。神殿の聖騎士たちがまとう白銀の鎧とはまた違った威圧感がある。恐らく彼らは聖都の警護を担当する部隊だろう。

爪碧族の二人は嘘のようにあっさり捕らえられてしまった。呆然とするラシエルたちの前に一人の男が近づく。

男は軍服ではなく青を基調とした長衣をまとっている。長い銀色の髪は結わえられておらず垂らしたままだ。風に舞いながらもつれる様子がないので、見苦しくはない。空をそのまま映したような白藍の目は作り物めいた美しさを持っていた。

「宮廷魔術師の方……ですか？」

ラシエルの質問に男は頷くとすぐに申し訳なさそうな表情になった。

「助けに来るのが少々遅れてしまったようですね。

申し訳ありません。お怪我はありませんか？」

彼はラシエルに大した怪我がないことが分かると、体力を回復する魔術を使ってくれた。それをその場にいたクラウスと緋耀にもかける。純粹に感謝するラシエルの横で二人は警戒を解くことなく銀髪の宮廷魔術師を見ていた。

「私はマティアス・クレメントと申します。

仮面の魔術師絡みの事件を担当していますので、これからも顔を合
わす機会があるでしょう。

共に仮面の魔術師を倒すため頑張りましょう」

穏やかな微笑は好感が持てるものだった。宮廷魔術師を前に緊張
していたラシエルは親しみやすそうなマティアスの表情に少し肩の
力を抜いた。

「ラシエルと申します。微力ながら少しでもお役に立てるよう頑張
ります。

閣下、あの……クレメントというと、ダリウス様の？」

「私のことはマティアスで結構ですよ。

ダリウス・クレメントは私の養父です。……行方不明になって随分
と経ちますが」

マティアスの表情が曇る。ラシエルは申し訳ない気持ちになった。
宮廷魔術師は人数がそんなに多くない。ラシエルが最初から調べて
おけばマティアスの存在にも気付いていたはずだった。それなら態
々本人に尋ねる必要もなかった。

「申し訳ありません。

助けていただいてありがとうございます！」

仮面の魔術師の正体を告げるわけにもいかず、かといってラシエ
ルは隠し事は得意ではない。ラシエルは緋耀とクラウスの腕を掴む
と屋敷に向かって走り始めた。残されたマティアスは不思議そうな

顔でそれを見送った。

襲撃の夜に

ラシエルが屋敷に帰ると、ラルフとハインリヒはリビングで休んでいた。ハインリヒによると二人が目の前の敵を一掃した頃には王立騎士団が動き出していたのだという。だから二人はあえて応援に駆け付けなかったのだ。

二人はラシエルたち同様に疲れたような顔をしていたが、それは戦闘のせいというよりは片づけのせいだった。割れた窓ガラスや吹き飛ばされた扉などは綺麗に修復されていた。

片づけをやってくれた代わりにクラウスとラシエルは夕食を作ることにした。緋耀がそれを手伝う。ただ、ラシエルは彼の味の好みが自分と近いと知っていたので、料理に関しては安心して手伝ってもらうことが出来た。

夕食には、被害状況を見に来たアルマも加わった。神殿での食生活に飽き飽きしていた彼は喜んでラシエルの招待に応じた。

夕食中、襲撃者が爪碧族だと聞いたハインリヒは眉をひそめた。

「爪碧族の生き残りですか。」

また厄介なのが出てきましたね」

「あんたらの場合、自業自得だろ？」

緋耀はそう言いつつ、どうでもよさそうに食事を続けているラルフに視線を向ける。

共に過ごすことが増えた今でも彼の中の憎悪が消えたわけではない。一族を滅ぼされた者がラルフたちを恨むのは自然なことだった。つまり厄介事を生み出したのはラルフたちということになる。

ラシエルもその考えには同意して頷いた。クラウスが不満そうに口を挟む。

「彼らは復讐なんて考えるような頭を持ってはいないさ」

「でも、戦うのが好きなんですよ？」

三人の魔族が他者を見下すような発言には慣れてきていた。不愉快そうな反応を示した緋耀を制するようにラシエルは口を開く。

「言ってたでしょ？」

戦う理由なんて何でもいいんだよ。

つまりそういう危ない集団なの、奴らは」

「争いを好むのは魔族の性だぜ。

奴らだけじゃねえよ。

俺からすれば、お前の方がよっぽど怖いけどな」

本能をどこかに置き忘れてきたようなラルフ。殆どの物事に興味を抱かず、やる気のないラルフに従う何を考えているのか分からない二人の従者。普段はそんな彼らが統一戦争時はあの大量虐殺をやつてのけたのだ。緋耀にとっては、シンプルな思考で動く爪碧族の方がまだ彼らよりは安全に見えた。

「そう言いながら、貴方もここに居座るのが好きですね」

ハインリヒは、緋耀をクラウドイウスに敵意を持つ存在として警戒していた。何を考えているのか分からないという点では、緋耀も仮面の魔術師も大差ないと思っている。

「お前らじゃなくてラシエルに会いに来てるんだよ。

できれば外で会いたいけど、今はそうもいかないだろ」

緋耀は紅角族が減びてから魔族とはもちろん人間とも深く関わらないようにしてきた。偶然知り合ったとはいえ、仲良くなったラシエルは彼にとっては価値ある存在なのだ。

「あのさ……誤解を招くような発言はやめてよね。

ただでさえ最近はラルフ様の機嫌が悪いっていうのに」

緋耀は苦笑して軽く謝罪した。彼はラルフが嫉妬深いのだと信じている。

「でも、あれ怒ってる時の顔なのか？」

俺にはいつも同じ顔に見えるけど」

アルマはラルフの顔を凝視していた。クラウドは遠慮ないアルマの言葉に青ざめた。もっとも、クラウドの発言もあまりに正直過ぎたようにも思われたが。

「俺の顔が不機嫌そうなのは生まれつきだ」

「そうよね。」

私もラルフは普段はいつも同じような顔をしているように見えるわ。不機嫌というよりやる気のない顔よね」

実際やる気がないのだから仕方ない。ラシエルはラルフを貶すつもりはなかった。ただ、そう思ったからそう言っただけである。

そんなラシエルにラルフは好きに言えばいいという態度だったが、ハインリヒは一人眉間の皺を増やした。一方、クラウドはラシエルを呆れたように見つめ、ラルフには恐怖とも哀れみとも取れる複雑な視線を向けた。

「ラシエル……いくらあなたでも失礼ですよ」

「怖い物知らずだよねえ。まあ、ラシエル相手じゃラルフ様は怒らないだろうけど」

怒らないと分かっているからハインリヒもそう強くは咎めることはない。面倒くさがりなラルフの怒りの沸点が高い方だ。むしろ、この人は苛立つことがあっても本気で怒ることはあるのかと疑問に思っている人すらいそうなくらいである。実害のない敵意や悪意は気にも留めない。

ラルフの怒りの対象は自分にとって面倒くさい物事や存在だった。そういう意味では、ラシエルはラルフの敵と言ってもよかった。デユスノミアに対してラルフが友好的な態度をとったのはリード兄弟にとって意外なことだった。何事にも例外はある。魂約者とは誰にとっても特殊で他の物事とは切り離され存在だということなのかもしれない。

アルマは四人のやり取りを聞いて苦笑した。

「ラシエルはいいよな。魂約者が人間じゃなくても楽しそうだし」
もちろんアルマはデウスノミアだからという理由でラシエルが大変な状況にいることは理解している。それでも、魂約者と良好な関係を築けていることが救いに見えた。

「あんたは魂約者と上手くいつてないのかよ？」

魂約者が亡くなっている緋耀からすれば、魂約者が生きているだけでも羨ましい。魂約者の繋がりが一律のものではないと知る前から、余計だっただろう。魂約者とは互いに惹かれあい好意を持つ相手とは限らない。

「少なくとも気易く接することなんてできない。」

魂約者といえば……ダリウス・クレメントの魂約者は失踪前に亡くなっていたな」

「ダリウスはなぜ失踪したのかしら？」

今になって出てきて騒ぎを起こしている理由も気になるわ」

「裏で汚いことをしていたのがばれて失踪、っていうのが有名な話だけど何か裏があるのかもな」

「過去はともかく、今は悪いこと企んでそうだよな。ああ、すでに悪い事してるか。人間にとっては。」

でも、僕はマティアスも怪しいと思うな。

もしかすると、二人で何か」

「ちよつとクラウス、それは飛躍し過ぎ」

クラウスの思考が暴走しそうになるのを感じてラシエルは止めに入った。まだ発想が飛躍する手前かもしれないが、これから突拍子もない事を言い始めるのは予想がついた。

しかし、ラシエルとは逆に他のメンバーはクラウスの意見に同意を示した。誰も話を続けようとしなかったので、仕方なくラルフは代表して話し始める。

「マティアス・クレメントは身内が不祥事を起こしたにも関わらず
出世している。」

それだけ優秀な魔術師だということだ。

なのに今まで生きている養父を見つけることが出来ずにいた。不自然だと思わないか？」

強力な魔力を持つマティアスは魔術を用いることができるだけでなく、高位の精霊と契約して協力してもらうことも可能だ。また、
宮廷魔術師は国宝クラスの魔法アイテムの使用も許可されていた。
あらゆる手段を使えば行方不明のダリウスを探すことはそう難しい
ことだとは考えられない。エイレネには現在も十数名の宮廷魔術師
が存在する。いくらダリウスが優秀な宮廷魔術師だったとはいっても、
彼ら全てを欺き逃れるのは容易ではない。

そう考えれば、マティアスだけでなく他の宮廷魔術師の誰もが怪しい。
一連の事件が仮面の魔術師ダリウス・クレメント個人の陰謀だ
だというのも疑ってかかるべきだろう。

「そう言われてみれば、何か裏がありそうね。」

マティアス様は仮面の魔術師の正体に気付いていないのかしら？」

「さあな」

「知っていても隠しておくんじゃないか？」

養父が仮面の魔術師だと周囲に知れたら、あいつにも疑惑の目が向
くだろうしな」

「ライバルの中には彼を蹴落としたい連中もいるだろうしな」

神殿の中ですら人は競い合う。アルマは幼い頃から貴族たちの醜
い争いも耳にしてきた。宮廷魔術師だけが違うということがあるだ
ろうか。そうは思えなかった。

「人望はありそうだったけれど」

「ああいうタイプって腹の中では何考えているか分かったもんじや
ないよ。」

あまり信用しない方がいいと思うな」

「クラウドスらしいわね。」

……何を考えているか分からないというのはハインリヒも似たようなもんだと思うけど」

腹黒さならきつと負けていない。ラシエルはマティアスの中身がハインリヒみたいだったら……と想像しようとして途中でやめた。

「謀が好きだというのは否定しないよ。」

でも、ハインは見るからに意地悪そうじゃないか。

だからタイプが違う」

「私は正直者ですから」

「それはちよつと無理があると思うわよ」

魔族にとつては意地悪というのは褒め言葉なのだろうか。単に意地悪そうと言われたぐらいで怒るほど子供じゃないだけなのかもしれない。無表情で自分を正直者だというハインリヒを見ても、どちらが正しいのかラシエルには判断がつかなかった。

「ほら、正直過ぎて毒舌なんだよ。」

プライドが高いのに幽霊が怖いってことを隠しておけないのも、きつと正直だからなんだね」

「幽霊は怖いものではありません。嫌いなんです。」

何度も言っているでしょう。」

まったくあなたはネガティブな上に鳥頭で困りますね」

ラシエルは、幽霊に対する嫌悪を顕わにするハインリヒを見て納得した。確かに彼は正直だと。

屋敷が荒らされた正午が嘘のように穏やかな夕食の時間は過ぎた。しかし、それは嵐の前の静けさだったのかもしれない。

玄関を出た緋耀とアルマは数分もしないうちに引き返してきた。

「ラシエル、庭に封筒が落ちてたぞ」

「よく気付いたな」

同じく帰ろうとしていたアルマが緋耀の手元を覗き込む。それは封筒のようだった。

「魔族は夜行性だからな」

玄関先で封筒を受け取ったラシエルは緋耀が出した魔術の灯を頼りに中身を確認することにした。

「手紙みたいだけど、どうしてあんなところに……」

中身は非常にシンプルな内容の手紙だった。読むのにそう時間はかからなかったが、ラシエルは何度も読み返した。意味は分かったが、受け入れたくない事が書かれていたからだ。質の悪い悪戯かもしれないと思つて落ち着こうとしても手が震える。

「どうした？」

「アルマ、急いで実家に連絡を取って！」

「アマーリエが……」

“我々は、リベリウス家の令嬢の身を預かっている”
手紙はお約束通りの書き出しで始まっていた。

誘惑者の罭

真夜中の森を一人の少女は駆ける。その後を三人の若者たちが追う。それはアマーリエ救出に向かうラシエルたちだった。

屋敷で軟禁状態だったはずのアマーリエがどうやってさらわれたのか。仮面の魔術師の狙いは何なのか。ラシエルは多くの疑問を抱えながら、それでもただアマーリエの無事を願いつつ歩を進めるしかなかった。引き止めようとする三人の声は聞こえてはいるが、考えを覆す気にはなれない。

アマーリエはラシエルにとって特別な存在だった。

変わり者で頑固な落ちこぼれ魔術師と進んで関わりうとする者などそういない。魔術師が多いエイレネにおいて、魔術師たちは確固たる地位と権利を獲得していた。ただし、それは一般人からの畏怖を伴う。魔術師たちからは落ちこぼれと見下され、一般人からは畏れられる少女は孤独だった。

三年間の空白を埋めるようにラシエルを心配し拘束しようとする両親の元を飛び出し、聖都にやってきたラシエルには頼れる身内や親戚はいない。ただ、魔術師になるという夢と己の魔力、故郷アウロラで出会って以来仲良くしてくれるリベリウスの兄妹だけが拠り所だった。二人は再会したラシエルに幼い頃と変わらぬ親しみを持って接してくれた。

ラシエルがデウスノミアであることを知ってもそれは変わらない。以前フローラで危険な目にあつた後ですら彼女は一度もラシエルを本気で咎めることすらなかった。

説得することを諦めたラルフたちはラシエルの決定に従うことを了承した。彼らがラシエルを止めることは容易かつただろう。ラシエルの我侷ともいえる意思を尊重してくれたことが申し訳なくもあ

りがたかった。勝手なことだが、後をついて来る足音がこれほど頼もしく感じることはない。

今、この場にアルマと緋耀の姿はない。

手紙を見た後、アルマは実家にアマーリエが本当にさらわれたのかを確認しに向かった。緋耀はラシエルたちと別行動を取るようになった。ラシエルたちとは違う視点から事態を把握し、必要な情報を収集するためだった。

パクスの近くにある森は遠目には小さく見えるが、中に入ると意外と広い。獣や魔物の咆哮が聞こえる暗闇の中、人が通れるような道が絶えず続いているのが救いだっただ。この森は薬草を取りに来るラシエルのように出入りする者が多い。なのに、今夜は不気味なほどに人気が感じられなかった。

森の奥の開けた場所で、彼らはいた。ラシエルたちが考えていたような威圧感はない。むしろ、あちらもラシエルたち同様に戸惑いや焦りを感じているふうにも見えた。

「そちらの要求通り来たわ。

アマーリエを開放して頂戴」

数名の人影の中、白い仮面が浮き上がるように存在感を益す。仮面の魔術師が前に進み出たからだった。籠ったような声は低く、それでいて聞き取りづらいということはない。

「これはこれは若きデユスノミアとその魂約者よ。珍しいところで会うものだな。

今宵は闇夜だ。夜の散歩には不向きだと思っかね」

「暗躍には最適みたいだね」

「ふざけないで！ アマーリエはどこ？」

クラウスの皮肉を押しつけるようにラシエルが叫ぶ。

魔術師の傍らにいた人物が不愉快そうな声を上げた。

「我が師、彼らは何か勘違いをしていらっしやるのでは？」

落ち着いた物言いだが、その声には負の感情が籠っている。ラシエルはこの時になって初めて魔術師の側にいる者たちに目を向けた。声の主はまだ十歳にも満たないような少年だった。

“我が師”という呼び方に違和感を覚える。少年の言動は暗闇の中にあっても異様なところがない。洗脳されているように見えず、それが逆に不思議だった。殺傷事件を起こして世間を騒がしている仮面の魔術師にこんな無害そうな幼い弟子がいる。それが意味するところが分からない。

「そのようじゃな。」

君の探している人物というのは、このお嬢さんかね？」

空中にアマーリエの姿が現れる。彼女は気絶しているようだったが、何か危害を加えられた様子はなかった。ほっと安堵しつつ、ラシエルは再度魔術師を睨みつける。

「アマーリエ。……そうよ。約束通り返してくれるわね？」

「その約束や要求というのが解せない。私は君たちに何も伝えた覚えはない。我々もまたこの場に呼び出されたに過ぎないのだよ。」

もちろん、この娘が君の友人であるアマーリエ・リベリウス嬢だということとは把握している。

だが、我々が彼女をさらってきたわけではない。

奇妙なことに彼女は黄昏時に我々の真上に降って来たのだよ。」

「嘘をつくにしても酷過ぎると思うのだけど」

「そりゃあ、本当のことですからね。」

コミュニケーションを不得手とする我が師でも、嘘をつくならもう少し信憑性のあることを言いますよ」

魔術師の手が少年の頭をはたく。少年は痛みを訴えたが、二人の言動には互いへの親しみが見えた。

「今更信じられぬかもしれんが、我々として手段を選ばない訳ではな

い。
このお嬢さんはお返ししよう。特に取引に用いるつもりはないので
な」

アマールエが地面に横たえられると同時にラシエルは彼女に駆け
寄った。二人を庇うようにクラウドとインリヒがサイドに立つ。

「へえ……じゃあ、誰が彼女をさらったのかな。」

君たちはそれを知っているんじゃないの？」

首をかしげるクラウドの口調はのんびりとしていて緊張感がまる
でないように聞こえる。彼のことを知らない者がこの場にいれば、
苛立ちを覚えたかもしれない。

「私が言ったところで、お前たちはそれを信用しまい。」

だが、あえて言おうじゃないか。犯人は白銀の魔術師だろうと」

ラシエルの脳裏に美しい銀色の髪を持つ青年の姿が浮かぶ。魔力
も氷のように鋭く冷たい銀色の光を放っていた魔術師。白銀の魔術
師と呼ばれる人物がいるなら、間違いなくマティアス・クレメント
のことだろう。

あり得るよねえと呟くクラウドを無視してラルフはマティアスと
いう名前が記憶のどこかにないか探してみる。しかし、特に銀髪の
魔術師に関する情報は思い浮かばなかった。強い魔術師なら魔族側
にも名前ぐらいは知られていてもおかしくはないのだ。現にダリ
ウスについては失踪したことはともかく名前だけは微かに記憶に残
っていた。

「マティアス・クレメントか……あれは、貴様の何だ？」

「ふん……かつての可愛い息子であり、今となっては恐ろしく憎ら
しい敵だよ。」

私は大切な魂約者を失うと同時に可愛い息子をも失った。まったく
悪夢のような存在だ。

あれを滅ぼすためなら私は何でもすると誓ったのだよ」

仮面の魔術師の言葉は、彼の正体がダリウスだということを裏付けているように思える。マティアスは確かにダリウス・クレメントの息子として育てられた人物だ。子のいなかったダリウスがマティアスのことを本気で可愛がっていて裏切られたのなら恨みもしよう。「何でも……ね。」

悪夢を消すために自らが悪となる、か。まあ、どうでもいいよ、君の言い分なんて。

僕にとって大事なのは、君が僕らの敵かどうかだからね」「私もどうでもいいのですがね……」

ただ、マティアス・クレメントが私たちの味方かどうか判断できない以上、私たちがあなた方を見逃すというわけにもいきません」

リード兄弟にとっては、エイレネの民がどうなるのが魔術師同士の戦いで国が乱れようが知ったことではない。それはラルフにとっても同じだった。いっそ滅んでくれたら面倒がないのにとすら思う。顔を顰めて悩んでいる魂約者の存在がなければだが。

皆がそれぞれの理由から沈黙する中、ラシエルはそつとしゃがみこみ友人の状態を確かめた。彼女はただ穏やかにぐっすりと眠っている様子だ。さらわれた時のことは分からないが、さらわれてからずっとこのままだった可能性もある。

「アマーリエが誰にさらわれたか覚えてくれていればいいのだけれど。無理でしょうね」

ラシエルはこれからどうするべきか相談しようとして立ち上がった。上空から大きな羽音が聞こえたのはその直後だった。眩しいほどの光が辺りを照らし出す。

光を遮るように手をかざしながら空を見上げたラシエルの目に映ったのはドラゴンだった。しかも人間が住んでいる地域には住んでいないような古代種。図鑑でしかお目にかかったことがないような巨体と深い知性を持つ目にラシエルは圧倒された。

「我々はエイレネの王国軍聖都第二警備隊だ。

そちらの魔術師には殺人及び禁断の魔術の使用の疑いがある。共に来ていただけようか」

ダリウスたちの行動は、竜の背から兵たちが飛び降りるより素早かった。まやかしの術が類が作用していたのかもしれない。

呆然と魔術師たちが姿を消した場所を見やるラシエルにこの場に
いる軍人の一人が近づく。二体のドラゴンが再度上空へ舞い上がった。翼の起こした風がラシエルの髪を乱す。羽音が遠ざかる中、地上に降りた魔術師らしき軍人は頭上の仲間に対して叫んだ。

「逃がすな！ 追え」

魔術で遠くに移動した存在を直接追うことは出来ない。わずかに残る魔力の流れを追うつもりなのだろう。それは容易なことではないが、高い知能と強力な魔力を持つドラゴンたちなら可能なのかもしれない。

答えるようにドラゴンが鳴く。ドラゴンはその魔術師が召喚したものののだろう。彼の軍服は他の者たちよりも立派だった。彼がこの部隊を率いているのだろう。エイレネの王国軍にはマティアスに匹敵する魔力を持った魔術師が複数いるのだ。ラシエルは改めてそれを実感した。

ラシエルたちが自分たちの置かれた状況を把握するのに時間はそう掛からなかった。ラシエル本人は王国軍兵士に直接声を掛けられるまでそれに気付いていなかったが、それもすぐのことだった。

「エイレネの公認魔術師であるラシエルだな。
君とその同行者たちも共謀の容疑が掛かっている。ついてきてもらおう」

「用意のいいことだな。斬魔香と魔力を封じる魔道具を持参とは」
本来の力を発揮できないことに気付いてもラルフが動揺した様子はない。ただただ面倒臭そうだった。

ラシエルを強烈な睡魔が襲う。魔道具の影響なのかもしれない。ふらつく彼女を誰かの腕が支えた。ラシエルは薄れる意識の中で、ラルフたちが強いなんて嘘か冗談なんじゃないかと疑いたくなった。

星影は囁く

空は分厚い雲におおわれ、冷たく薄暗い国があった。滅多に太陽が地上を照らすことはなく、もし晴天の日であったとしてもその地に住む人々が空に見るのは月か星。世界の最初に生まれた地である奈落の名残があるとも、入り口があるとも言われるその地はただその奈落を意味するタルタロスと呼ばれた。広くエネルギー資源も抱負に眠るが、植物が育ちにくい。多くの山脈に囲まれ一年の殆どが霧か雪に覆われた彼の地から人々は離れていった。

陽光を嫌う魔族は昔からタルタロスに棲み続けており、今ではクラウディウス帝国の首都であるニヴルヘイムもその地にある。人間の住む村や街がなくなっただけなのは、魔族や魔物が多いタルタロスでは苦しい生活を強いられるためでもあった。クラウディウスが広大なタルタロス全土を掌握したのはまだほんの一世紀以内の出来事で、以前はもっと悲惨で危険な土地であったという。

クラウディウス帝国建国以降、人と魔族の争いは勢いを潜め、両者は距離をおいた。しかし、神族を信仰するものがあるように、魔族との関わりを断たない人間も存在した。神族に仕える者たちが、騎士や巫女、供物を差し出すように魔族にそれに類するものを差し出すこともごく一部では行われていたのである。

ある夜、クラウディウス城の謁見室に連れてこられた幼い少女もまたそうした捧げ物だった。

魔力による紫紺の灯りは周囲にあるものの形は浮かび上がらせても、正確な色を識別できるほど明るくはない。それでも少女の髪の色が鮮やかな紫色であることは疑いようもなかった。

人間の魔術師たちに手を引かれる少女の目には戸惑いと怯えの感情が浮かぶ。玉座に座す男は、その目には気付かなかつたがただ気

配から少女の恐怖を感じ取っていた。

彼は人間の恐怖になど今更興味も湧かず、また人間の血肉や魂を食べるような嗜好もない。ただ、少女の髪の色は彼の気を引いた。その色は、彼が未だ求めて止まないものが持つと同じ色だった。

男の目の前に引き出されたことで、魔術師たちの手から逃れた少女はほつと溜め息をついた。男に向けられたまっすぐな目にはもう恐れはない。ただ、純粋な好奇心と安堵の色があった。

「お前は我が怖くないのか？」

「うん」

「お前を連れてきた者たちのことは怖がっていたのに？」

「あのしとたちはこわい。おじさんはこわくない」

少女はまだちゃんと発音できない音もあるようだったが、簡単なコミュニケーションがとれる程度の言語能力はあるようだった。不遜な少女の言葉に周囲は咎める目をむけざわめいたが、男がそれを気にする様子はない。

「そうか。……お前は自分に悪意を持っているものとそうでないものが分かるのだな。」

「お前の顔をよく見せてくれ」

「陛下!?!」

玉座から立ち上がり少女のもとへ行くこうとする主を傍で控えていた側近が止める。動じない側近の顔には珍しく驚きが表れていた。

「下がれ、ジーク」

「ですが……」

「なるほど、これは綺麗な髪だ。お前の名は？」

幼子の髪の色は、視力がほとんどないルドルフでも分かるほど、鮮烈な赤紫をしていた。恐らくその容姿ゆえに生贄に選ばれたのだろう。

「私たちは、らせる」

「ラセル……ラシエルか？」

ラセルと呼んだ際に、違つというふうに首を振られルドルフは近い発音の名前を考えた。

「そう。おじさんは？」

「我が名は……」

今宵からは我がラシエルの主であり保護者となるつ」

「るどるふ？ あれ、ここは」

夢から覚めたラシエルは、ほんのり湿った毛布を跳ね除けて周囲を見回した。

「ああ、そっか……旅の途中だったっけ」

近くに人気はなく、ラシエルはただ一人森の中にいた。見張るもののいない焚き火の火は既に消えている。

毛布の中からレヴァントが顔を出した。お腹が空いたのか、甘えるようにラシエルの指を軽くかんでくる。ラシエルが何も出してくれないのを確かめると、レヴァントはそつと草むらに姿を消した。最近では、レヴァントも鼠や虫を自分で捕まえて食べるようになって。今は追っ手がいる危険な旅の途中だったが、そんなに遠くへは行かないだろうと放っておくことにする。

ラシエルの今回の旅は急に始まった。王国軍に捕縛され城に連行されたラシエルは言い訳する間もなく地下牢に放り込まれた。

ラルフたちと引き離されどうすればいいか分からず頂垂れるラシエルの前に、マティアスは現れた。彼はラシエルの話を聞き、牢から出してくれると言った。ラシエルは疑心を抱きつつも、僅かばかりの希望にすがろうと思った。マティアスからは悪意を感じなかったからだ。

翌朝、マティアスがラシエルを牢から連れ出した頃には何の疑い

も持っていないかった。すでにラルフたちは牢から出たという言葉に違和感を感じはしたが、それが強くなったのは城から出てからのこと。

ラルフを魂約者だと自覚したラシエルは、結界を通してでも彼の気配をぼんやりと感じ取ることができた。彼女が、未だラルフが城内いることに気づいた時にはもう手遅れだった。ラシエルは仮面の魔術師との密通の疑いの上に脱獄の罪で追われる身になってしまったのだ。

こっそり手助けしてくれたアルマたちのお陰でラシエルはまずはハルモニアへ向かうことになった。城で掛けられた魔術の影響で魔術を使える状態ではないラシエルにとっては聖都を離れることすら難しい。アルマの魂約者であるラーナはラシエルを手助けするため一角獣を召喚してくれていた。ラシエルはなんとか追っ手の目を掻い潜り、聖都を抜け出した。

ハルモニアへ行ったらどうにかなるという状況でもない。エイレネを敵に回すことより何よりラルフたちが側にいないことが辛かった。

寝付けなかったラシエルは喉の渴きを感じて、湖へ足を向けた。道中の水は既に補給してある。ただ、喉を潤すついでに辺りを散策しようと思ったのだ。

水辺には白い獣の姿があった。ここまでラシエルを乗せて着てくれた一角獣だ。

「こんばんは」

『良い月夜ですね。』

……眠れないのですか？』

ラシエルが挨拶するまでもなく彼は彼女の側へ近づいてきていた。一本の角を持つ馬の姿を持つ聖獣ユニコーンは人と会話ができる種族だった。争いや負の感情を嫌う性質のため人が多くいる場所を嫌

う。ゆえに今では極一部の深い森の奥ぐらいでしかいないという伝説の獣。ラシエルも彼が始めて目にするユニコーンだった。

「うん、なんか変な夢を見た気がして……目が覚めたんだけど。

これからのことを考えると眠れなくなってしまうって」

『夜の祝福をうける乙女……あの貴婦人は貴女を今も見守っていますよ。』

安心してお眠りなさい。

私だけでなく今宵よりは昏き焔の君も側にいます』

ラシエルは重い布がはためく音に振り返った。黒い炎のような影が月の光を背負って立っている。

城の牢から抜け出し聖都を出るまで何度願っても召喚に応じなかった相手の一人がそこにいた。サラマンダーのエルピスは連れ去られたと聞いていた。偶然庭の薔薇の影に隠れていた鈴竜は無事だったが、緋耀とも連絡が取れない。ラシエルは、自分と関係する者たちは皆捕まってしまったのだろうかと心配していた。

相手が口を開くより先にラシエルは彼に抱きついた。

男はそれに驚いたり嫌がる素振りもなく、ただラシエルの背に腕を回した。安心させるように慰めるように彼の手はラシエルの頭を撫でる。どこか懐かしい感覚にラシエルは落ち着きを取り戻す。

「駆けつけるのが遅くなったようだ。我が契約者よ。

あの迂闊な同胞たちを救うのに我も手を貸そう」

「どうして、どうして呼び声に応えてくれなかったの？」

泣きそうな顔で咎めるラシエルに男は困ったように苦笑した。

「そなたと再会するまで我はしばしの間とはいえただの屍であった。魔力は安定せず、結界が強化された聖都ではこの姿を保つことすらままならぬ。

なに、案ずることはない。いずれ、どちらの問題も解決しよう」

死人である男は魔族以上に聖都に阻まれる存在なのかもしれない。

そして、この世の摂理から外れる者を従えることは難しく、未熟な魔術師であるラシエルにとっては不可能に等しいことだった。そう、男の力と姿が安定しない原因はラシエルにもあるのだ。

「ごめんなさい……私の力が不安定で弱いから、だからあなたを召喚できない。」

しかも、呼び出して力を貸してもらっているのは私で……
悪いのはあなたじゃないのに」

「我が屍になつたのは自業自得というものだ。」

そなたの魔力も我が契約がなければもつと伸びよう。

この契約そのものも我の自己満足の代物だ。そなたの心を煩わすぐらいならば解消してもいい」

「貴方まで私の側からいなくなるっていうの!？」

「……我はそなたが望む限り傍を離れるつもりはない。」

それは我が自ら望んだことだ。

だから、自分を責める必要はない。そなたを必要としているのは我の方なのだから」

「ありがとう。」

契約のことも貴方のことも何も覚えていないのが申し訳なくなってくるわ」

感情的になったことを恥じ入るようにラシエルは男から体を離す。

「覚えていなくても変わらぬものもある。」

足元を見てみるといい。

ラシエルはこの花が好きだっただろう」

男は穏やかに微笑んだ。ラシエルが足元を見下ろすと、ぽつぽつと青白い光が浮かび出したところだった。

何事かとしゃがみこむとそれは花だった。仄かに甘い香りもする。

真夜中になると光を発して夜行性の虫を誘う花があるという。これはその一種なのだろう。」

「星の欠片が降ってきたみたい」

ラシエルの横で男が肩を震わす。笑いをこらえようとしているらしい。

「ちよつと子供っぽいこと言ったかもしれないけど、何も笑わなかったって」

男は微笑を浮かべることはあつても、声を出して笑うことはない。ラシエルにとって今の男の反応は意外だった。

「いや、あまりにラシエルが可愛いものだから……」

幼い頃にも同じことを言っていたことを思い出したのだ」

「そうだった？ なんだか変な感じね。」

私はあなたとの思い出がないんだもの」

「確かに星空のように見えなくもないな。」

一つ一つの花はどんな形なのが見ることは出来ないが」

「小さいけれど見えないってほどじゃ……」

あ……あなたもしかして目が」

「ああ、あまり視力が良くない。」

ラシエルの顔もこれぐらい近づかないと識別はできないな。

もちろん気配や魔力で分かるが……そして髪の色でも」

深い紫色の瞳がラシエルの目を覗き込む。ラシエルは、ラルフに似たその目を見ていると何かが引っかかった。昔に同じ目を見たような気がするのだ。

そして、男が言うように今と同じような花畑の中、誰かと共に過ごしたことがあったような気もする。

「髪……：：：：そういえば、最近は染めていなかった」

「まだ気にしているのか？」

逃亡中は隠すのも分かるが、美しい髪を普段から隠すというのは……

……」

「魔族にとっては綺麗な色なのね」

ラルフも同じようなことを言っていた。

「ニユクスの祝福を受けた証だ。

彼女は夜の色である黒や青よりも、昼と夜の狭間にある色の一つを深く愛した」

「貴方も？」

「ああ、愛おしい人はそなたの髪と同じ目の色をしていた。

……最初はだから惹かれた」

愛おしむように、失った者を懐かしむように彼の表情にラシエルは戸惑う。彼女には男が泣きそうに見えた。ラシエルは、この目を、表情を、そう彼のことを知っていた。遠い日、同じような顔をこの人はラシエルに向けていたのだ。

幼いラシエルを抱きしめて頭を撫でてくれた大人がいた。家族のようで、だけど両親のどちらでもない人。

どこの誰だったのかまでは思い出せない。しかし、彼の名はそう

……

「ルドルフ？」

「ラシエル！？ 思い出したのか？」

「いいえ、ごめんなさい。

ただ、あなたの名前だけなの」

「そうか……残念だが、その内すべて思い出さだろう」

ルドルフの儂い微笑を見てラシエルは彼の手を取った。幻のような景色の中にいる本当ならこの世にいるはずのないルドルフ。夜が明けたら消えてしまうのではないかという錯覚にラシエルは怯えた。その夜、ルドルフがラシエルの傍らを離れることはなかった。

漆黒の守護者

ラシエルは一角獣の背で風を感じながらラルフの身を案じていた。彼女の手首には未だ手枷の痕が残っている。氷のような冷たい魔力封じの枷と鉄格子。窓一つない石壁。血や汚物、何か分からないもので黒ずんだ地面。暗闇の中から聞こえてくる苦悶の声、悲鳴、狂気を孕んだ笑い声もまだ耳に残っている。

宮廷魔術師になりたいと考えていたラシエルにとってパクスのは憧れの場所だった。一般公開されていた時には中に入ったこともある。あの美しい城の地下にあんな場所があった。地下牢の存在は知識としては知っていたが、実際に目にするとやはり目を背けたくなった。

デウスノミアであることを自覚した時点で聖都を出ていけば良かったのだ。常識的に考えればデウスノミアが宮廷魔術師になれるわけなどない。ラルフたちと静かに暮らす道もあつたはずだ。

世を騒がせる仮面の魔術師をどうにかしなければいけないという使命感を抱いていたのかもしれない。自らの身も守れないというのに、どうしてもそのようなことが可能だと思ったのだらう。身の程知らずもいいところだ。今のようには逃亡することにすら、他者の手をかりているというのに。

「ラルフはどうしているかな」

無事だろうかとは口にしたくなかった。

走る一角獣の耳がその声をとらえようと動く。

『不自由は強いられるでしょうが……そう手荒い扱いはされていないでしょう。』

彼はクラウディウスの皇帝の身内ですから』

「そう……そうね」

ラシエルは知らなかったし言われるまで気付かなかったが、エイレネ軍がラルフの身の上を知るのにそう時間はかからないだろう。マティアスは彼らにも会ったのだろうか。ダリウスのお話を聞くまでもなくラルフたちはマティアスのことを信用していないようだった。それだけが救いだ。

ラシエルはラルフたちよりもマティアスのことを信じた己を責めた。

『誰かを信じることができるというのは美德ですよ。ラシエル。疑う心を育てるのではなく、真実を見極める目を養うのです』

ニユクスは“もつと片割れを信じてもいいのではないか”と言った。彼女の力を借りる時、自分は夜を自らの力を信じたのではなかったか。

物事の真理を常に追い求めること、あらゆる存在をあるがままに受け入れること、己を信じること。魔術にも信じることは必要だった。

ラシエルがマティアスに対してすべきことは疑心を抱き警戒することではない。マティアスの狙いと聖都の中で起きていること真相を知るからだ。

「不思議ね。あなたには私に考えていることが分かるみたい」

『種族の特性もあるでしょうが……あなた自身の魔力の影響もあるでしょう。』

召喚魔術とは召喚対象を支配するもの。あなたの魔力には普段からそれと似た働きがあるようだ』

「私の魔力があなたの意識を操ろうとしているってこと？」

『それほどの強制力はありませんよ』

不安そうなるラシエルにユニコーンは優しく答えた。どう受け取ればいいのか分からないという少女の感情が彼には伝わっていた。しかし、彼にとってもラシエルの魔力についてどう説明すればいいの

かはよく分からなかった。

ただ、デウスノミアとはこういう存在なのかもしれない。彼女たちが人々に忌み嫌われ、時に畏れられたのはその特殊な性質を帯びていたためではないだろうか。

デウスノミアは皆、何かしらの贈り物を受け取っている。危険な立場に立つだけの代償を、役割に見合った報酬を。それを良い方向に生かせるかどうかはまた別の話だ。

『魂約者がいるとはどのような気分なのでしょうね』

ユニコーンの問いかけにラシエルは首をかしげたが、すぐに納得した。思い出したのだ。彼らには魂約者がいないのだということ。魂約者が存在するのは、人、魔族、神族だけだ。それ以外の生き物にそのような存在はいない。

「良いのか悪いのか分からない。

どうして人と魔族と神族だけが魂を分けて生まれてくるのかも」

『それらの種族が力を持ち過ぎたからだと聞いたことがあります』

「古のドラゴンたちは？」

『彼らすら三つの種族との戦いには敗れました。

物事を善悪で判断するのは三つの民だけです』

大空を舞い、大洋を翔けるドラゴンたち。巨大な体と長い寿命、深い知恵と強大な力が彼らを世界の支配者とした。

いや、彼らを支配者だと感じていたのは、彼らと戦っていた人類だけだったのかもしれない。

ラシエルは、宮廷魔術師たちがドラゴンを召喚して従えている姿を思い出す。

少なくともドラゴンたちは人を僕のように扱いはしなかった。

「……そうね。」

神族は何を考えているのかよく分からないけど」

ラシエルにとって神族は未知の種族だった。アルマの魂約者であるラーナとは間接的に縁があるが、それだけだ。アレウスは神族の血をひいてはいるはずだが人と大差ないように見える。

「アールヴは、人より精霊に近い種族ですからね。」

まだ、スヴァルトアールヴの方が人に近い」

「アールヴとスヴァルトアールヴ？」

「人が神族や魔族と呼ぶ者たちを我らはそう呼びます」

神族と魔族がどのような存在であるのか。ラシエルはあまり深く考えたことがなかった。人以外の種族、特に魔族や神族とも違う種族が自分たちをどう見ているのかも。

不謹慎だと思いつつもラシエルはユニコーンとの会話を楽しんでいた。休憩のために木陰で休んだ時も会話は続いた。話すことが楽しいだけでなく、それは不安を振り払うためであったのかもしれない。

ただ、一つだけ不安は消えていた。夜の闇だ。日が落ちれば、ドルフが護衛として召喚に応じてくれることになっていた。魔力を節約するため黄昏時まではなるべく彼を呼ばないことになっている。食事は節約するしかなく、満足な睡眠も取れない。体力だけでなく魔力もあまり回復できない状況だった。

ただ、森の獣に警戒する必要がないのは幸いだった。魔力の強いユニコーンと羽音で他者を操る鈴竜が共にいたためだ。

昼の休憩をとってしばらくすると深い森を抜け荒野に出た。きつくなつた日差しとは別の熱を感じたのはラシエルとユニコーンどちらが先だっただろう。どちらにせよ、少々遅かった。

鋭い爪が大地をえぐる。一角獣の鬣を炎がかすめた。逃げ遅れた尾の先が燃え上がるが、それは一瞬で消えた。

燃えるような毛を持った狼がラシエルたちを囲んでいる。いや、

実際にその体は炎を上げていた。

「いくら町中じゃないからって、ドラゴンや焰狼を呼び出すなんて……
捕まえるというより殺そうとしているみたいじゃない」

逃亡中に上空を飛んでいたドラゴンを思い出す。背に魔術師らしき人に乗せ、何かを探すように旋回するドラゴン。確かめるまでもなくあれはエイレネの追っ手だろう。

『これは不味いですね』

「ごめんなさい。尻尾がこげちゃってる」

『多少の負傷すら覚悟の上です。これぐらい。もっとしつかりつかまってる』

背後を振り返りながら謝るラシエルをユニコーンが叱咤する。ラシエルは鬨にしがみつき、腕の中の鈴竜に話かけた。

「レヴァント、お願い」

レヴァントは焦るラシエルの声にすぐに反応した。言葉の意味を理解したというよりは、危険な状況だと認識したのだろう。腕の中から這い出して羽根を広げる。レヴァントはもう上手に飛べるようになっていた。

幼い鈴竜の羽音は、場違いなほど穏やかで澄んだ音だった。

音を耳にした狼たちの炎が揺らぐ。立ち止まった焰狼にラシエルは緊張を少し緩めるが、それは長くは続かない。頭上から轟く咆哮にレヴァントが吹き飛ばされたのだ。

鈴竜の軽い体が宙に舞う。レヴァントを庇ったラシエルはユニコーンの背から落ちて地面を転がった。頭を強く打ったが、なんとか気絶せずに起き上がる。

ラシエルは再度ユニコーンの背に乗ろうとした時、女性の歌声を聞いた。それは優しく甘く誘うような旋律。歌声に驚いたのはラシエルだけではなかった。

歌声の主を気にする追っ手の隙を狙ってラシエルはかけだした。歌の合間に水が流れる音が聞こえたからだ。川が近くにある。ドラゴンの対策にはならないが、焰狼を撃退できる精霊がいるかもしれない。

ささやかな希望のはずだった。ところが川岸に近づいたラシエルたちの前に現れたのは、巨体をくねらせた数頭の水龍だった。海竜よりも細く小柄ではあるが、それでも見上げると首がいたくなるほど大きい。

水龍が牙をむいて焰狼やドラゴンたちに襲いかかってくるのをラシエルは呆然と見つめた。一般的に水棲のドラゴンは人を襲うどころか人に興味すら持たない。人以外が相手だったからだろうか。いや、そうではなかった。

ラシエルは、川の中にある岩の上に腰掛ける女性から強い魔力を感じ取った。女性の側には彼女を守るように一頭の水龍がいる。水龍たちはその女性に召喚されて使役されているに違いなかった。

「あなたは」

『ラシエルっ！』

女性に何者なのか問おうとしたラシエルをユニコーンの叫びが止めた。騎乗していたドラゴンから降りた魔術師が剣を持ってそばに忍び寄ってきていたのだ。剣先がラシエルの体に届く前にユニコーンが間に割り込む。後ずさるラシエルの目の前でユニコーンの体が真紅に染まった。

ユニコーンが傷を負った様子はない。血は魔術師のものだった。頭部を水龍によって食いちぎられた死体が地面に横たわっている。

「早く血を洗い流さないと！」

吐き気を抑えながらラシエルはユニコーンに駆け寄った。聖なる獣が血の穢れに弱いことは知っていた。

水が宙を舞いユニコーンに降り注ぐ。ラシエルは女性の視線を感

じて振り返る。彼女は何も言わずただ水龍たちに指示を出した。数頭の水龍がラシエルたちを囲み、生き残っている人間や焔狼に対して威嚇の咆哮を上げた。

ドラゴンを召喚したのは亡くなった魔術師であつたらしく、ドラゴンの姿はすでに側にない。

彼らはしばし逡巡した後、一度引くことにしたらしい。去つていく追手の後ろ姿を確認して、ラシエルはユニコーンに視線を戻す。

「一体どうすれば……」

純白の一角獣はそつと首を振った。

『乙女よ、悲しまないで。』

私はラーナ殿だけではなく、ある尊い方からも貴女の助けをするよう頼まれているのです』

「でも……血の穢れをうけたあなたはもう」

『ええ、しかし、これこそこの世界が歪んでいる証。』

遠い昔、聖と魔は相反するものなどではなかった』

穢れを受けた聖獣は消滅するか墮ちる。ラシエルはユニコーンが消滅すると思っていたが、彼が生きていることを望むとするなら……魔獣として生きるといふ道がないわけではない。

召喚魔術によって魔獣を呼び出したり、接する機会があつた。それでも、ラシエルにとって彼らは禍々しい恐ろしい生き物だった。

ユニコーンたちは善悪で物事を判断しないと云った。聖と魔に違いがなかったともいふ。彼は魔獣となつても、ユニコーンの時と変わらないと言ふのだろうか？

『恐れていますね？』

大丈夫。私を信じてください。

そうすれば、私は正気でいられる。

私の角をラシエルに。ユニコーンとしての私は彼女の杖として力を貸しましょう』

ふら付くユニコーンをラシエルが支えようとするのと同時に、地面に崩れ落ちたユニコーンの角が折れて転がった。角はそれだけで生きているかのように淡い白銀の光を放ち続けている。

苦しむユニコーンに異変が起きたのはすぐのことだった。真っ白だった体は漆黒に染まり、角を失った額の両脇に新たな盛り上がりが生じる。再び自らの足でしっかり立ち上がった獣には、羊のような捻じれた角が生えていた。

「二本の角を持つ馬。……バイコーン？」

魔物のはずのその獣からは禍々しい気配を持つてはいない。清らかで大人しかった獣は知性や誇りをそのままに、強靱な肉体と攻撃的な魔力を持つ別の生き物に生まれ変わっていた。

驚くラシエルの前でバイコーンは平然と立ち上がった。

『少し体が大きくなったようですね。』

これならば、あなたと昏き焔の君と一緒に乗せることもできるでしょう。

ラシエル、お願いがあるのです。私に名前をつけてくれませんか？』

「名前を？」

『はい。私は生まれ代わりました。』

なので、新たに名が欲しいのです』

「そうね……では、ドゥーガルでどうかしら？」

ラシエルに声には戸惑いがにじんでいる。彼女はまだ彼の真意をくみ取る余裕は取り戻せていない。

『ありがとう。』

その名によって私はあなたに支配されましょう』

「ありがとう。ドゥーガル」

ラシエルはドゥーガルと名付けたバイコーンに抱きついた。彼女の顔に柔らかい笑みが広がる。やっと共に旅をしてきたユニコーンが生きているという現実を実感できたのだ。

漆黒の体は水浸しで鬣には血の汚れも残っていたが、ラシエルは気にしなかった。彼女は、自分を庇って聖獣が苦しんだことを申し

訳なく思うと同時にとても愛おしく感じていた。

『海のアールヴ……私たちを助けていただいで感謝します。しかし、なぜあなたのような方がここに？』

「え？ では、貴女は島々に住む神族……」

ハルモニアの南部に広がる大洋に浮かぶ島々。彼の地には独特な文化を持った神族たちが住むという。彼らは殆ど島を出ない。なぜそれが川をさかのぼってラシエルたちを助けたのだろうか。

『ハルモニアの同胞より伝言を』

挨拶や自己紹介をかわす間もなく、女性は封筒を指しだす。ラシエルが受け取った封筒は魔術によって守られているのかまったく濡れていなかった。

女性の声はドゥーガルのもと同じように頭に直接響いてくる。神族の扱う言語もまた人と違う。ラシエルに伝わるようにそういう手段を用いているのだろう。

「アレウスさんからですか？」

手紙を読む内、ラシエルの顔が曇る。ラシエルたちの情報はすでにアレウスにも伝わっているらしく、最初は彼女の身を案じるような内容だった。問題は後半だ。ハルモニアにはすでに数名の宮廷魔術師や数百のエイレネ軍兵士が向かっており、とてもラシエルを匿える余裕などないらしい。

ハルモニアは未だ反乱軍を鎮圧するために動いている。大変な状況であることは分かっていたはずだった。だが、実際に協力できないと知ると想像していた以上の絶望感が襲ってきた。ラシエルはどうすべきか考えることもできないまま頂垂れた。

沈みゆく古の都

古の都グラティア。魔術文明が最も発展した時代、グラティアはエイレネの首都として建設された。荘厳なデザインの巨大な建築物が立ち並び、多くの人、神、精霊たちが暮らしていた。巨大な湖に囲まれた水上都市であり、湖の中には都を守るための水の精霊や霊獣が棲んでいた。

しかし、今のグラティアにそのかつての面影は殆どない。高い建物は少しずつ風化し、水位は少しずつ上昇している。いや実際は水位が上がっているわけではない。都市を浮かばせていた魔術が弱まり、都市自体が沈んでいるのだ。

湖の水は未だ澄んでいて美しいが、精霊や霊獣の気配は年々減っている。

人の住める地区が狭くなり、当然ながら人口は減少する傾向にあるがそれでもまだ多くの人がこの都で生活していた。

街中はひっそりとしていたが、通りを行きかう人々の表情は穏やかだ。ラシエルはグラティアに静かで落ち着いた街だと思った。

ラシエルが行き先を変更して数日後、彼女は久しぶりに街中に入った。以前のように髪を茶色に染め、魔力を感知されづらいよう抑えてある。ラシエルの表情は不安と緊張から強張っていた。

そんなラシエルを見て、傍らに立つ青年は困ったように笑った。

「ラシエル……もつと自然に」

「分かっているんだけど」

『今のところあなたに対する負の感情は感じません』

未だ人の言語が得意とは言い難い青年は、仕方なくいつものように語りかける。青年は人に姿を変えたドゥーガルだった。強い魔力を持つ彼は姿を変える魔術も使える。普通の馬になるという案もあったがそれでは屋外では行動が制限されてしまう。どこでも共に行動できるような人の姿になったのだ。

『もし何かあっても私が守ります。ご安心を』

「……ありがとう」

契約を交わしたとはいえ面と向かってそんなことを言われると恥ずかしくなってくる。ラシエルは照れる余裕があることに気付いて肩の力を抜くことにした。

元ユニコーンであるドゥーガルの言動はラシエルには馴染みにくいものだった。少々照れくさくもあるが、悪い気はしなかった。普通の人が言えば胡散臭い齒が浮くような台詞も彼が言うとなんか聞こえない。基本的に精霊や霊獣の類は嘘をつかないからだ。

「宿を探して夜を待ちましょう。」

我々は夜を好みます」

「神族もそうなのですか？」

私は魔族が夜行性なのでてっきり神族は人と同じなのかと……」

ラシエルはマントとそのフードを全身を覆っている女性を見上げて首を傾げる。彼女はセシリアという名のネレイド（海の女神）だ。アレウスの伝言を届けにきてくれた後、彼女はしばらくラシエルたちと共に行動することになった。

セシリアは中性的な美貌と深い藍色の髪を持ち主だった。身長は高く人間の女性としては平均的な身長しかないラシエルでは見上げなければいけない。

「夜は魔力が満ちる。」

我々も魔族同様に魔力の影響を受けやすい存在なので夜に活動するのでしょう。

それに、我々は月や星の光を好みます」

表情の変化が乏しいセシリアは感情があるのか疑わしく見える。好みが存在するのだと知ってラシエルは少しほっとした。

人目を惹く姿をしている彼女だったが、街中で彼女に注目する者はいなかった。ラシエルはそのことに違和感を覚えたがセシリア本

人が気にしている様子はない。彼女が目立つと思うのはラシエルの主観に過ぎないのだからと納得することにした。

寂れてはいるが観光地だった頃の名残がグラティアに宿泊可能な店や施設は多い。宿泊先は簡単に決まった。いざという時の逃走経路さえ確保できればどこでも良かった。

ラシエルは粗末な部屋を見回してセシリアの様子が気に掛かった。彼女にとって神族は綺麗な神殿や大きな屋敷に住んでいるイメージが強かったためだ。

「ここで本当に良かったのですか？」

「水面に近く湿度は高めで地上ではそう悪くない場所だと思いますが」

「……そう。それはよかった」

いわれてみれば少し湿気ている気もする。ラシエルはシートと毛布を手を取った。湿っていないことを確認したのだ。幸いそれはよく乾いていた。

ラシエルは目の前の女性が海に住んでいるということをおぼろげに忘れた。アルマから神族が変な種族だと聞いていたため、人間と違うところが少ないセシリアを神族と意識し辛いのだ。人と魔族を見分けることが出来るように、神族もまたラシエルにとっては見分けるのは簡単だ。しかし、魔族や神族のことをよく知っているわけではない。

夜までまだ時間がある。ラシエルはセシリアを宿に残し、ドゥーガルと共に街の散策に出かけた。

商店が立ち並ぶ通りに行くと軒先に商品らしき物が入った籠を吊るしていたり地面に置いている店が多い。

ラシエルたちは薬草をおいてある店で足を止めた。そこも他の店

と同じように入り口に薬草の入った籠がある。

「店先の野菜は宣伝用ですか？」

店の人らしいおじさんに声をかける。急な質問だったが、彼は快く返事をくれた。

「ああそれは親愛なる“マロウド”へのおすそわけさ」

「まろつど？」

「余所では彼らを神族と呼ぶらしいね。

俺ら人間はマロウドとは深く関わらない方がいいと言われてる。

だが、彼らに少しだけおすそ分けをする習慣があつて、彼らもお返しに何かささやかな贈りものをしてくれるんだ。

うちの場合は薬草をおすそわけするとマロウドがよりよく薬草が育つようにこつそり協力してくれるのさ」

薬草は店主の家族が世話をしているらしい。神族の協力を得ているというだけあり、確かに薬草の質は良かった。

店主によると、その家や日によっておすそわけする物は変わり、お返しもそれぞれ違うものになるだという。

パクスで暮らす者にとって神族は神殿の中で生活し街を守護してくれるものだった。お世話にはなっているが身近とはいい難い。ラシエルの故郷アウロラもパクスに近いため彼女もそついうイメージがあつた。ハルモニアも神々とはパクスとは違った関係を持つてはいるが、神々はそんなに身近な存在ではない。だからこそ神の血を引くイノ一族は畏敬の念を抱かれるのだろう。

「へえ、初めて知りました。

えつと、これとこつちの薬草を下さい」

「ありがとよ。

外からの客人は珍しくないからな。聞かれるのには慣れてるよ」

店主の笑顔につられてラシエルも笑顔で店を出る。すると籠の中の野菜はなくなっていた。

「あ、本当に神族が貰いに来たのかな？」

……人と神族の関係も場所によって違うんだ」

故郷のアウロラと首都パクスしか知らずに育ったラシエルには新鮮だった。フローラやハルモニアには行ったことがあるものの、さほど違いを感じたことはない。

『時代と共に人と人以外の種族の関係は変化していきました。

ユニコーンが人里近くに住んでいた頃もあったのですよ』

「ドゥーガルとこうして旅をしているのもよく考えれば、不思議な感じだわ。

召喚魔術を勉強してなかったら私にとっては御伽噺の中の存在に等しかったのにな」

「あたしが若い頃でもまだ近くの森でユニコーンがいたんだがね。近頃では見たという噂すら聞きやしないよ」

声の主を探してラシエルは周囲を見回す。二人の会話に入ってきたのは露天で果物を売っている老婆だった。

「こんにちは、魔術師のお嬢さん。

珍しいお連れと一緒にいるんで思わず声をかけてしまったよ」

「えっと……彼は」

「グラティアの民は長い間私たちの良い隣人であり友でした。残念なことです」

どう説明するか困っているラシエルの言葉を止めてドゥーガルが老婆に語りかける。

老婆にはドゥーガルの正体が分かっているようだった。グラティアの人々にはラシエルのように人と人以外の種族の区別がつくのもしれない。それならセシリアに注目する人がいなかったのも説明がつく。彼らはマロウドには深く関わらないという習慣があるからだ。

「そうだねえ。今ではマロウドたちとの関係も変わってしまった……」

「良い共存関係にあるように見えますが」

人も神々も互いを厭うことなく協力し合って生活している。ラシエルにはそう見えた。

しかし、老婆は悲しそうに首を振る。

「以前はもつとマロウドたちも堂々と出歩いていたもんさ。

人が戦をしたり、精霊や聖獣を狩ったりするたびに彼らとの距離は開いていったんだよ。

さすがにマロウドに危害を加える連中はいないけれどね」

神々は強力な魔力を持つ。そのため神を信仰しているしていないに関わらず神に攻撃をしかける者は少ない。神を嫌う者たちですら直接戦闘を挑むような行為は控えるのが常だった。かつて魔族と人が激しく争っていた時代はまた違ったというが……

「そのことに貴女は心を痛めているのですね。心優しい人。

貴女のような方がいる限り、いずれまた人とユニコーンが共存できる世が訪れるという希望を捨てずにいられます」

沈んだ表情の老婆にドゥーガルは跪いて慰めるように声をかける。穏やかで優しくそんな彼の正体が魔獣であるとは信じ難い。ドゥーガルを人ではないと見抜いた老婆も彼の言動には少々戸惑いを感じている様子だ。

「……ユニコーンやバイコーンっていうのは、相変わらずだねえ。

お嬢さん、彼らは良い隣人だけど、惚れっぼいのと誑が多いのが難点だよ。

昔から彼らと乙女の間でトラブルはつきものさ。それさえなければ悪い連中じゃないんだけどね」

「私は彼女一筋ですよ」

「やれやれ……まあ一途なのは長所かもしれないね。

旅の同伴者や召喚獣としては悪くないよ。

ただ自己犠牲の精神が強いから気をつけておくんだね」

そういうと彼女は腰を上げて去っていった。老婆の胸元で純白の

首飾りが揺れているのがラシエルの目に映る。微かに残る魔力は確かにユニコーンのものだった。

日が落ちても明るいパクスやハルモニアとは違い、この街の夜は暗い。宿を抜け出したラシエルたちは行き先に検討がつかずただセシリアの導きに従うしかなかった。

静かな夜でも水の流れる音だけは聞こえてくる。グラティアは周囲が水であるだけでなく街中にも多くの水路が通っていた。

ラシエルたちの目的はグラティアに隠れ住んでいるという神族グレイスタちだった。

「セシリアさん……彼らは会ってくれますでしょうか？」

ラシエルの問いかけにセシリアは振り返った。魔力の灯で照らされた彼女の表情には相変わらず変化はなかったが、彼女は本の僅かに首を傾げた。

「会えない理由があれば難しいでしょう。」

理由があると思うのですか？」

「デウスノミアは混沌の象徴……神族は相反する存在でしょうか？」

「デウスノミアは我らの祖と縁ある者。」

力を貸してくれるでしょう。」

「神族は秩序を尊ぶと聞いています。」

それがなぜ？」

「我々はデウスノミアが秩序を崩す存在だと認識していません。」

人の考える秩序と我々の望む秩序は違うのでしょうか？」

「それはネレイドたち固有の考え方なのでは？」

海の神族は秩序をもたらすための争いすら好む気性の激しい性質を持つという。

人の考えは理解できないというように、呆れとも諦めともとれる溜め息とともにセシリアは頭を振った。

「確かに我々は集団ごとに固有の文化や性質を持ちます。」

それは、イレーネは導き手、グレイスは番人、ネレイドは守護者、
というようにそれぞれの役割を持っているからにすぎません。
一つの目的のために私たちは役割を分担しているのです」

「ラシエル、あなたは自分が混沌をもたらすと信じているのですか？」

ドゥーガルの優しい問いかけにラシエルは言いよどんだ。

「それは……違うけれど」

デウスノミアであつても自分は変わらない。混沌を招くような存在にはならない。ラシエル自身そう信じたかつた。ニユクスもまた必ずしもデウスノミアが混沌を招くとは言わなかつた。それでも、幼い頃から植えつけられたデウスノミアへの不快感は消えない。

「闇は危険で恐ろしいもの。しかし、同時に美しい夜空や安らぎを与えてくれる。

その象徴であるニユクスが混沌をもたらすだけの存在を作り出し祝福したりはしませんよ。

いくら彼の方が気紛れで残酷な面を持っていたとしても、地上の民への愛は失われてはいないのだから」

ラシエルは穏やかな笑みを自分に向けるニユクスを思い出す。慣れた生活や魂約者と別れ不安になっていたのだらう。魔術にネガティブな感情は禁物だ。元の生活に戻るためにも今は前を向かなければ……

「そう。だからこそ、夜は今も地上に訪れる。
水面をご覧なさい。グレイスが我々を呼んでいるようです。
行きましょう」

いつの間にか雲から顔を出した月が湖面を照らしていた。水面の中に浮かび上がる淡い光を放つ階段が見える。

ラシエルは静かに頷いて先導するセシリアの背を追った。新たな希望と疑問を抱きながら。

罪と境界

湖の中はラシエルが想像していたよりも澄んでいて明るかった。湖底から水面に向かって伸びる無数の柱が光を放っていたためだ。柱はそれぞれものが呼吸をしているように周囲の水を揺らしている。時折、気泡も見えた。そう、柱は魔力を吹き込まれた植物だった。無数の植物の幹や根がグラティアを支えている。しかし、崩れたりひび割れた柱は多い。命の源である魔力が失われつつあるからだろう。この街はいつまで沈まずに存在し続けるのか。美しくも寂しい光景にラシエルは心を奪われた。

「綺麗な場所ですね」

ラシエルの言葉にセシリアは相槌を打つ。

「自然と芸術を愛するグレイスタたちが好む地ですから。」

ここは原初の神々の力が残る場所でもあります。

番人でもある彼らがここに招き入れてくれるとは……私にも意外です」

水中でも生活可能なセシリアだけでなくラシエルとドゥーガルにも息ができるよう階段には空気が通されている。招くように光を放っていた階段は彼女たちが通過すると光を消していった。招かれてるのは間違いないようだ。

長い階段を下りと先には部屋のようなものがあった。

ラシエルが室内に入ると数名の神族が並んでいた。部屋の奥へと進むよう促され、ラシエルは不安を感じながらもただ従うしかなかった。

『古の都グラティアへようこそ。』

夜に愛された魔術師ラシエル。

我らはそなたを歓迎します。この地にしばし留まり後の旅に備える
といいでしょう」

中央に一人腰掛ける女性がラシエルに微笑みかけながら声をかける。

女性は二十代後半ぐらいの容姿をしているが、周囲の態度からしてこの場では最も地位が高い存在らしい。周囲には男性しかおらず年齢はばらばらだ。

女性の新緑の色をした長い髪は地面につくほど長い。美しい容姿とその髪の色は、自然と芸術を愛するグレイスの長に相応しい。

空色の瞳は慈愛に満ちていて、ラシエルは神族へのイメージを再度改めた。まだ周囲の男神たちの冷たく冷静な態度の方が今までのイメージに近い。

セシリアの言ったとおり彼らはラシエルに敵意は持っていないようだ。それでも神族に囲まれていると思うとラシエルは落ち着かなかった。

「グレイスの方々には感謝いたします」

そう口にするだけで精一杯だった。

「海の方も歓迎します。王とネレイドたちに変わりはありませんか？」

島々に住む神族ネレイドは女性のみのも種族だが王とその後継者のみは男性で今の王はネレウスという。男性が極端に生まれにくい体質はイノ一族にも受け継がれているらしく、アレウス・イノには姉と妹が沢山いるが男兄弟は一人もいない。

「はい。陸の方々にはお心遣い感謝いたします。

セレス様もお元氣そうで安心いたしました」

「そうでした。まだ名乗っていませんでしたね。

私はグレイスの長、セレスです。」

緊張することはありませんよ。

グレイスは代々女性が族長を勤めてきましたが、女性が少ない一族なのです……

ただ珍しいだけで私が特別凄いということではありません」

後半の言葉はラシエルに向けたものだった。どこか自嘲したような笑みを浮かべたセレスを周囲の者が咎める。

「セレス様っ！」

ラシエルにもまたセレスの言葉は気をつかってくれたものであり真実ではないと分かっていた。セレスは確かにこの場にいる誰よりも強い力を持っている。ただ、他に女神の姿がないので女性が少ないというのは事実なのだろう。

「悲しいことですが、神族は数を減らしつつあります。我々に残された時間は少ない。

目的を達成するために……ラシエル、あなたの助力を必要としているのはむしろこちらの方なのですよ」

「どういう……ことでしょうか？」

神族が魔族同様に繁殖能力の低い種族であることはラシエルでもなんとなく知っていた。魔力が強く寿命が長い種族なのでそんなに増える必要がないためだとぼんやり思っていたのだが……

セレスは神族が減ってきていることには直接触れず、神々の存在理由について語り始める。

「人と魔、魔と神は長い争いを続けてきました。

その争いを終結させること……そして、種族間の境界を取り払うことが我々の目的です」

神々が好む望むのは秩序ある世界とされてきた。ゆえに神々は魔族を嫌うのだと。

しかし、真相は違う。神々が厭うのはあくまで種族間の隔たりであり、争っている種族や個人ではない。

種族間の堺は曖昧な部分もあるが境界線は存在しており、戦が起きていない今でも互いの交流は少ない。国によって差はあれど、魔族と人が仲の良い国はなかった。魔族が堂々と通りを出歩けるハルモニアの人間はもちろんのことラルフたちに親しみを感じているラシエルですら境界を取り払おうなど考えたこともなかった。

「……そんなことが可能なのでしょうか？」

「容易なことではありません。我々は数千年かけても未だにそれを成す事ができなかつたのですから。」

ですが、それこそが我々の存在理由なのです。

かつて一人の神が人の子に魔術を教えたことは知っていますね？」

「はい。魔術師を志したばかりの頃、書物に書かれているのを読んだことがあります」

魔術が生まれた時のことを伝説は語る。全ての始まりは一人の神の介入にあつたと……。それでも魔術師たちが神族を信仰しないのには理由がある。現在存在している神々と創世の時代からいる古の神々は別の存在とされているからだ。夜もまた古の神の一人（一柱）とされている。古の神々は過度の崇拜を嫌う。神殿に祭られているのは比較的若い神々なのだ。

「魔術の普及によって人は魔力が強い者とそうでないものに分かれました。」

それが後に人と魔族の境界を生んだのです。

古の神々の中にはそれを嘆き哀れんだ方々もいました。その涙から生まれた人が今の神族なのです」

「人と魔族は同じ種族だということですか!？」

「しかし。ですが、長い時を経て、魔力や寿命、体力など差ができてはいます。」

それでも神と人、魔と人の間には子が生まれます。実例はありませんが神と魔の間にも子は出来るでしょう。

皆、古の神々が生んだ子の子孫。近しい種だからなのです。』

神殿の神官や巫女が聞いたら気絶しそうなことをセレスは淡々と語る。混血は生まれにくいのが確かに生まれてくる。近い種だというのは言われてみれば当然だ。それでも、人々は事実から目を背け己の知る都合の良い言い伝えを信じた。

「では……デウスノミアやエウノミア以外はなぜ魂約者が神族や魔族ではないのでしょうか？」

『本来、分かたれた魂は近い所に生まれるもの。』

ただ、彼らだけは境界を取り払うことが可能かどうかを試すために場所も精神も遠い地で生まれてくる。』

「それだけのために……過去のデウスノミアは、魂約者は苦しまなければならなかった。』

……酷い」

混乱と争いを招く者とされたデウスノミア。試すために彼らが生まれたというのなら神々の意思でそれは生まれないようにすることも可能なのだ。

人のためを思ったのかもしれない。しかし、神々が自分たちの目的の為に複数の魂を利用し試した事実は変わらない。目論見が外れて争いが起きて古の神々は嘆くだけ。苦しんだのは地上にいた者たちだ。

『試すというと聞こえが悪いかもしれませんが、切欠としたかったのではと私は考えています。』

デウスノミアと魂約者が共に生きることができ世を彼の方たちは望んでいました。

デウスノミアが争いの種となるたびに神々の希望は失われていき、神々の関心はこの地を離れつつあります。

神々がこの地を見放せば、我々は存在できなくなる。それが神族衰退の理由です。』

「グラティアの湖に残る魔力が失われつつあるのも同じ理由なのですね？」

セレスは悲しそうな表情を浮かべ頷く。

『勝手だと思いかもしれませんが、これが我々の事情です。』

もちろん、あなたに何かを強制するつもりはありません。

あなたの人生はあくまであなたのものであるのですから。』

「これだけ聞かせておいて、本当に勝手ですね」

ラシエルの背後にいたセシリアとドゥーガルは気遣うように声をかけた。グレイスの女王に対する非礼を咎める様子はさすがにない。

『ラシエル……』

『ラシエル、あなたが怒りを覚えるのは仕方がないことですが……』
「怒ってます。」

思いもよらないことを聞いてちょっと混乱もしています。

でも、私は、私の魂約者と共に生きたい。それは確かです。

私も、境界が取り払われた世界で生活してみたい」

ラルフたちと過ごした日々は戸惑うことも多かったけれど、不快なものではなかった。むしろ、周囲の反対を押し切って一人で魔術師を目指していた頃と比べれば温かく変化に富んだ充実した日々だったように思う。三人には苛立つことも多かったけれど、彼らの不器用な優しさにラシエルは支えられていた。彼らとの生活を取り戻したい。

その生活はセレスたちの望む世界にはきつと当たり前前に存在するものなのだ。

『ありがとう』

「お礼を言われる理由がありません。これは私の選択なのですから。』
『そうですね。ええ、でも手助けはさせて下さい』

セレスは傍らにいた男性に視線を向ける。すると彼はラシエルに近づいてきた。

「あなたは一角獣の角をお持ちですね？

もしよろしければ、私がそれを杖に加工しましょう」

「お願いします、とラシエルは素直にそれを手渡した。ユニコーンとしてのドゥーガルの願いはラシエルの杖として力をかすことだった。何より神族の中でもグレイスたちの作る魔道具は造形も質も良い。断る理由はなかった。

また別の男性がセレスとラシエルの間に進みで来る。彼の顔には若干双方を咎めるような感情が浮かんでいた。

「セレス様、そろそろ……」

ラシエル殿、セレス様はあまりお体が丈夫ではないのです。本日はこれで」

「そうだったのですか。……申し訳ありません」

「いいのです。これが真実を守り伝える番人の役目。

グラティアに滞在している間にまた聞きたいことがあったら遠慮なく来て下さい」

「分かりました。感謝します。

では、お休みなさい」

「ええ、お休みなさい。良い夢を」

セレスたちに見送られラシエルたちは部屋を出た。水上へ向かうラシエルの表情は硬かったが、安堵してもいた。少なくとも自分は神族を敵に回す心配はしなくてもいい。夜が自分を「哀れで愛しい我が娘」と呼んだ理由がやっと分かった気がした。

皇帝の薔薇

「面倒なことをしてくれた」

「第一声がそれなんて酷いなあ」

気だるそうな魔族の男の前で少年は苦笑した。仮面の魔術師ダリウスを師と呼んでいた少年だ。

「ラルフ様、ご無事で何より」

「まあ、人間相手にどうこうされるラルフ様じゃないけどね」

すでに少年の手によって牢から出ていたらしい二人も顔を出す。

「自信があるのは結構だけど、逃げるの？ 逃げないの？」

僕はもう行くよ。マティアスを相手にするのだけはご免だからね」

マティアスの名を口にした瞬間、少年の顔が歪む。師匠の恨みというよりは彼個人も、直接マティアスの被害を被った事があるのかもしれない。

少年は地下牢を抜け、隠し扉を通り薄暗い通路を進む。迷う様子は一切ない。ハインリヒはその様子に違和感を覚えた。

「なぜ、こんな隠し通路を知っているのです？」

「元宮廷魔術師の師匠に聞いたに決まってるじゃないか」

彼は足取りと同様にはつきりと答える。

「ハイン、どうしてそんなことが気になるの？」

「失脚して行方不明になった宮廷魔術師が知っていた隠し通路。

クラウス……あなたなら、そのままにしておきますか？」

「ああ、そう言われてみれば、確かに変かもね。

そうか。じゃあ、これは罠なんだね。

おかしいとは思ったんだ。こんなに簡単に抜け出せるなんてさ」

ハインリヒは呆れたような目でクラウスを睨んだ。こんな時は本当に弟がネガティブなのか疑わしいと思う。

「使えるものは多少リスクを伴っていても使いますよ。

マティアス相手に手段を選ぶ余裕はありませんから」

「私が疑っているのはこの通路そのものではなく、あなた自身ですよ」

「こんな子供が怖いのか？」

「怖くはありませんが……魔族や魔術師は見た目で判断すると危険ですからね」

からかうような少年の笑みが忌々しい。自力で脱出できなかったことにも苛立っていたから余計だ。

「ほら、出口だよ」

ラルフたちが通路を抜けて屋外に出ると、空は紫色に染まっていた。遠く離れてしまった片割れを思っ、彼は深いため息をついた。長い戦争が終わってやっと面倒事と縁を切れたはずだったのに、彼女と出会ってからまた厄介なことばかりだ。それでも、ラシエルが側にいないと落ち着かないことに自嘲の笑みを漏らす。ハインリヒが訝しげな顔をする隣でクラウドはラルフに同意するように苦笑した。

少女は花畑の中で寝転んでいた。まだ小さな体の彼女が転がると花々の中にすっぽりと埋もれてしまう。色とりどりの花に囲まれていても、彼女の髪ほど鮮やかな色はそうない。

少女の髪は美しい赤紫をしていた。彼女は自分の髪の色が嫌いだ

った。でも、今は前ほど嫌ではない。なぜなら……

「ラシエル」

低く優しい声が少女の名を呼ぶ。少女ラシエルの大好きな人の声だった。

「ルドルフ！　ここだよ」

大きな男の人が方膝をついてそっとラシエルを抱き上げる。

「可愛いラシエル。勝手に外に出てはいけないよ。

危険だからね」

「ごめんなさい」

悲しそうなルドルフの顔を見てラシエルも悲しくなった。

ここでは、昼間から起きているのはラシエルぐらいだ。だから、ラシエルも普段は周囲に合わせて昼に寝て夜起きる生活を送っている。昼間に起きてしまっても、一人で外に出てはいけないという言葉いつけを守っていた。

今日に限って外に出してしまったのは、庭の花が見えたからだだった。ルドルフと共に庭の散歩を楽しむことはある。けれど、それは夜だけだ。日の光の下で咲く花に心惹かれたのは仕方がないことだったのかもしれない。

光といってもこの地で直接太陽が顔を出すことは珍しい。今日はその珍しい日だった。

庭には大量の薔薇だけでなく、様々な種類の花々が植えられている。陽光の代わりにルドルフの魔力によってこの植物たちは生かされていた。

そういう意味ではラシエルも花と同じだった。彼がいなければこの地で生きていけない。

“ 皇帝の薔薇 ”

それはかつてルドルフの愛した女性を指す隠語だった。

皇帝ルドルフは戦に勝ち浚ってきた人間の女性を東の離宮に住ませた。女性の名はエリス。魔族の皇帝ルドルフを魂約者に持って生まれたデウスノミアだ。

エリスはそれはそれは美しい紫の瞳を持っていた。ルドルフは妃にしたエリスに、瞳と同じ色の薔薇を贈った。

ルドルフ本人以外は近づいてはいけないという意味を込めて植えられた薔薇。最初はその薔薇そのものが“皇帝の薔薇”と呼ばれたが、次第に薔薇に囲まれて暮らすエリス本人を意味するようになった。

今では、ラシエルという幼い少女がその名で呼ばれていた。少女は皇帝の寵姫だと暗にほめかしているのだ。実際の二人の関係は親子のように微笑ましいものであったが、東の離宮に近づけない城の者たちがそれを知るわけもない。

皇帝は噂を否定することなく、むしろ増長させるかのように少女に新たな薔薇を贈った。それはラシエルの髪の色に最も近い色をした薔薇。ニユクスメイディだった。

ルドルフは日が沈みゆく方へ視線を向け、眩しそうに眼を細めた。いつもよりも早く来て正解だった。

ラシエルの握る花を見て男は寂しそうに微笑を漏らした。

「お前を夜の闇に閉じ込めておくのは残酷なことなのかもしれぬ。それでも、我はお前を手放せずにいる。

許せ」

「ルドルフも何か悪いことしたの？」

「ああ、だからラシエルの事を叱れないな。

さあ、食事にしよう」

意味が分からないという顔をしている少女に頬笑みかける。叱られないことにほっとしたのか一緒に食事ができるのが嬉しいのか、

ラシエルは嬉しそうに笑って頷いた。

ラシエルは旅を始めてから何度も夢を見ていた。それは優しくして温かくて……でも最後はいつも切なくなって目が覚める。

夢の内容はぼんやりとした覚えていなかった。それでも、少しずつ覚えている箇所が増えてきている。彼女自身、薄々とだがそれが失われた過去の記憶なのだと自覚していた。

深い霧の中をただ進む。もう夜が明けた後だというのに日の光は見えない。頼りになるのはドゥーガルの記憶だけだった。

もしもの時はクラウディウスへ行く。ラルフたちはそう言っていた。今回、ラシエルがクラウディウスへ向かおうかと考え始めたのはそのためだった。

ドゥーガルもセシリアも特に反対はしなかった。セシリアの反応はラシエルにとって意外なものだったが、グレイスたちの話が本当ならもつともなことだ。魔族が神族を嫌っているのが事実でも、神族が魔族を厭う理由などないのだから。

エイレネがあるこのトリムルティ大陸には三つの国がある。魔術を尊ぶエイレネ、魔族の支配するクラウディウス、科学や工業の発達したクリュメノスの三つである。一応クリュメノスへ逃亡するという案も浮かんだが、あちらには頼る宛がまったくない。同じ不法入国者として捕まるなら、まだ縁があるクラウディウスの方がましだろうという結論に達したのだ。

ガラティアには今後の計画を練るためと杖の完成を待つていたため十日ほど滞在した。少しずつ見かける兵士も増えてきていたので逃げるように（実際逃げているわけだが）ガラティアを出たのだっ

た。水龍に乗って川を進んだのもあって一月もしない内にエイレネから脱出することができた。グレイスたちに教わった目くらましが効いたのか、追っ手に見つかるともなかった。

悪い出来事が起きる前触れなのかもしれない。今までの経験からラシエルはそう思った。

白銀の杖が放つ淡い光がひととき強くなる。何かを知らせようとしているのだろう。光が強くなって間もなく、何者かが行く手をふさいだ。

呼び出していたルドルフがラシエルを庇うように前に出る。それに対し、相手は跪いて応えた。

「昏き焰の君、そしてラシエル様……お迎えに上がりました」

帝国軍がまとう鎧と紋章はラシエルも見覚えがある物だ。ほんの少しだけ場の空気が緩む。

「あれの指示か……」

「あれ？」

「この者は帝国軍の将官で階級は大将。

現在彼に命を下せるのはデイトリヒ……元帥を兼任しているクラウディウスの皇帝だけだ」

「エレボス公爵殿下が軍に戻って下さるなら、私はいつでも身を引くのですが」

男は本気とも冗談ともとれないような笑みを浮かべながら言う。

「お前は……あれの信奉者の一人だったな。

期待するだけ無駄だ。分かっているだろう？」

「デウスノミアを巡って戦争が起きたとしても？」

魔族らしく楽しそうにそんな話をする男をラシエルは警戒するように睨んだ。対して男は好奇の目をラシエルに返した。

「起きそうなの？」

「いいえ、まだ何とも……」

それにしても、貴女が殿下の魂約者だったとは驚きました」

「私のことをご存知なのですか？」

ブラウンの髪に翡翠のような瞳の魔族。どこかで見たことがある気もするが……はつきりと断言できない。分かるのは、彼もまた今まで知り合ってきた魔族について強力な魔力の持ち主であるということだけだった。

「ラシエルは記憶を失っている」

ルドルフの言葉に納得したように男は頷いた。

「それは失礼を……」

では、改めまして。私はアルトウル・フィンク。

エレボス公爵の……ラルフ將軍が軍の司令官だった頃は彼の旗下に入っていました」

「エレボスは闇の王が眠る墓所とそれを囲む深い森が大半を占める辺境の土地だ。

ラルフは隠居するのに最適だと思って選んだようだが、実際住んでみると不便だったんだろう。

エレボスに向く必要がない時はニヴルヘイムの城で生活していた」

「どこにいてもただずっと寝てそうですけどね。

家でも、起こさないと一日中寝てることがよくありましたし」

暗い森の中でのんびり暮らすつもりだったのだろうか。ラシエルは、他者と関わるのを鬱陶しく感じている様子のラルフならありえそうな選択だと思った。

「あの方の睡眠を妨害するなど自殺行為ですよ」

「確かに寝起きは不機嫌だけど、そこまで酷くはないんじゃないかしら」

「随分と……仲がよろしいようで。

魂約者と無事主従の契約を結んだ祝いをもっておりましたが、婚姻の祝いに変更した方がいいかもしれませんね」

笑顔でお祝いの言葉を言うアルトウルにラシエルは固まった。何やら勘違いしているらしい。しかし、だからといって自分がラルフの主になっただけとは言い辛いので放置しておくことにした。

ラシエルにとって初めて来たはずの城はどこか懐かしい場所だった。暗闇の中、紫の炎だけが城内を照らす。謁見の間ですら、人間のラシエルにとっては明るいとは言いがたい。

現皇帝デイトリヒはまだ十代後半ぐらいの青年だった。兄のラルフとは違い癖のあるウェーブの掛かった黒髪が艶やかに見える。兄弟揃って整った容姿だが、彼はどちらかといえば色気のある美貌の持ち主だった。瞳だけは兄弟揃って青紫色をしていた。

「遠路遙々よく来た。我々はお前たちを歓迎しよう。」
リード家の双子から知らせがあつたので、いずれ来るだろうとは思っていた。

今後のことは後日改めて相談することにして、今日はもう休むといい

「あ、はい、ありがとうございます」

まさか優しい言葉をかけてくれるとは思わなかつたので言葉に詰まる。

皇帝とアルトウル以外にはどちらかというところ歓迎されていない様子だったからだ。

“皇帝の薔薇”

悪口に混じってそういう囁きも何度も聞こえた。ラシエルに意味は分からなかつたが、悪意を感じる言い方だった。

「薔薇か……そうだな。」

そなたは東の離れに滞在するといひ。

先の皇帝が亡くなって以来閉鎖していたので少々荒れているが、すぐに片付けさせよう」

広間に集まつた者たちがより騒ぎ始める。デイトリヒの側にい

た者は直接抗議しようとはまてした。

「陛下、あの部屋は」

「分かつている。」

だが、記憶がないとはいえ、慣れた部屋の方が過ごしやすいだろう。そちらのネレイドとバイコーンもそちらへ泊まるといい。部屋はいくつかあるからな。

貴方は……」

「ラシエルの側にいる」

ルドルフの返答はディートリヒにとっては予想通りだったのだらう。すぐに話を変えた。

「……甦ったのなら一言知らせておいて欲しかったのですがね。」

おかげでしばらく城内が騒がしくなりますよ」

ディートリヒは一瞬だけ嫌そうに顔をしかめてから姿を消した。

ただし、ルドルフへ向けた言葉は今までのものより幾分柔らかいものだった。

薔薇の下で

紫色の花が咲き乱れる庭をラシエルは進んでいく。その庭がパクスの屋敷の庭を思い出させた。滞在している離宮の庭はまだよく記憶していない。覚えのあるニユクスメイドの魅惑的な香りだけでその薔薇が植えられていることには気付いていた。

「ニユクス、お久しぶりです。
もう、お会いできないかと思いました」

「ようこそ。哀れで愛しい我が娘。」

私がそなたの訪問を拒むことはない。選ぶのは常にそなた自身」

「でも、あなたは私を……私たちの魂を選んだ」

「そう」

ラシエルの厳しい指摘にニユクスは瞼を閉じ、辛そうに顔を歪めた。続けて自嘲するような微笑を浮かべる。

「だからこそ、私は生れ落ちたデウスノミアに必要以上に干渉しない。」

ただ、私は彼女たちが望んだものを与えてきた」

「神々は人に魔術を教えたことを悔やんでいるのに……また同じ過ちを繰り返す」

「ひと時の安らぎを夢を、狂気を死を与えることもまた私の愛。」

私は私が司るものの性質のままに生きることしかできぬ」

優しく残酷な夜。混乱の世をもたらすとされたデウスノミアたちが彼女の与えたもので救われただろうか？

ラシエルは怒りで震えた。目の前の女性を恨んではない。憎むのも無意味なことだと思っている。それでも、彼女のしたことは許せなかった。

「そんなのは愛じゃない」

「私の自己満足かもしれぬ。」

魔術を授けたのも、人と魔族の争いを止めたいと願うのも……

しかし、私の存在など地上における魔力や魔術と同じようなもの。

私のもたらすものをどう使うかはそなた次第。

所詮私は直接地上に干渉できない身ゆえ……私を無視するも利用するも好きにするがいい」

「人を試しているんですね」

「試さずとも……人が愚かならいずれ滅びるじやろう。」

私は機会を与えただけ」

ラシエルは諦めたように溜め息をついた後、気持ちを切り替えるために深呼吸した。うつむいていた顔を上げる。

「デウスノミアとして生まれて来たのも、魂約者と出会ってしまったものはどうしようもないですけど……」

これで最後にできたらいいなと思います」

「私も毎度そう願っていた。」

やっと……同じ望みを抱くデウスノミアに出会えた」

ニユクスはそれは嬉しそうに微笑む。ラシエルはその無邪気な笑みに苦笑を返した。

ラシエルはニユクスと縁があることを以前のようには幸運だと言えないが、不幸だとは思いたくなかった。まだ夢もラルフたちのことも諦めてはいないし、自分にもできることがあるはずだ。

魔族と人間の境界を取り払うなんてまだピンとこない。けれど、ラシエルの夢とそれはきつと繋がっていて無関係じゃない。以前から夢を応援してくれていたアマリーエとアルマだけでなく、今はラルフたちやドゥーガル、ネレイド、グレイス、そしてニユクスも力を貸してくれる。まだ頑張れる。

慣れないベッドの寝心地も地面で寝ていたことを思えば大分ましだった。上等な羽根を使った布団はふわふわでカバーやシーツの肌触りは懐かしかった。仕送りや不定期なバイト代で稼いでいた頃には縁がなかったものだが、引越し先の屋敷の寝室にも似たような物が用意されていた。

「ラシエル様、おはようございます」

挨拶をしてくるのは、アルトウルがつけてくれた使用人の少女。赤茶色の髪と猫のような獣の耳を持つ彼女はネリーと名乗っていた。ようやく同じ人物が数日続けて来てくれることにラシエルは安堵する。毎日違う使用人が来るのはどうも落ち着かなかったのだ。

「おはよう。ネリー」

最初はラシエルも丁寧に挨拶を返していたが、ネリーがあまりに恐縮するのでやめた。気安く接して欲しいと頼んだ時は、怯えているようにすら見えた。一体この城では使用人にどんな教育をしているのだろうかと思ったが、気にしないことにする。ラシエルの口出しできることではない。

「あの……フィンク様が朝食を一緒にしたいとおっしゃっていました」

「アルトウルさんが？　じゃあ準備を急がないと。他の皆は？」

「セシリア様はお休み中で、ドゥーガル様は食事は用意しなくていいとのことです。」

本日のお召し物なのですが……

えっと……その……フィンク様がこれをラシエル様にと」

ネリーが広げて見せたのはシンプルだけど可愛いドレスだった。

「アルトウルさん、おはようございます。」

ドレス、どうもありがとうございます」

ラシエルはこの城に着いた時、余分な衣類を持っていなかった。着ていた服はすでにボロボロだったので、到着した翌日にアルトウルがドレスを用意してくれてとてもありがたかった。アルトウルがドレスを贈ってくれたのはこれで二回目ということになる。

「いいえ、こちらこそ光栄なことです。」

ラシエル様のような愛らしい方にドレスを贈る機会はそうないので、アルトウルは魔族とはとても思えない笑顔を見せる。彼はラシエルがクラウディウスに来てから毎日会いにきた。魔族が本来なら眠りにつくはずの時間帯にもこうして顔を出してくれる。慣れない場所ので気をつかつてくれる彼にラシエルは感謝していた。

「アルトウルさんが普段ドレスをプレゼントする相手は大人の女性でしようしね」

「気になりますか」

「いいえ、まったく」

興味がないわけではないが、今はそんなことを話したい気分ではない。しかも、アルトウルの恋愛事情を聞くほど彼と親しくなった覚えもなかった。彼は親切だが、ラシエルにとってアルトウルはあくまでラルフの元部下以外の何者でもない。

アルトウルは素っ気無いラシエルの態度に気分を害すことなく微笑んだままだ。ただ、小さく呟いた言葉は少しだけ不機嫌そうだった。

「冷たい方だ。意外と本質はエレボス公爵と似ていらっしやる」

朝食が終わった後、ラシエルは庭で魔術の練習を行うことにした。ここなら結界もあるので多少無茶をしても周囲に被害が及ぶこともない。

「ラシエル様は綺麗に魔術を使われますね」

離れたところでシーツを干していたネリーがラシエルに声をかける。

「そう?」

「魔術には性格が出るんですよ。」

ラシエル様はまっすぐで綺麗な心をしていらっしゃるに違いありません」

「うーん、でも弱いわよ」

ラシエルは困ったように頭をかいた。失敗した魔術を見られたはずなのに褒められているようで複雑だった。

「何か迷いがありますか?」

ラシエル様は強い魔力の持ち主です。焦らず落ち着いてやれば問題ありませんよ」

どうも自分は魔族らしからぬ魔族とばかり出会っらしい。ラシエルはあつたかい気持ちになった。

「ネリーは私より年下なのに、お姉さんみたい」

「わわわ、そんな勿体無いお言葉、嬉しいです!

でも、私、たぶんラシエル様より年上だと思えますよ。」

魔族としては短命な種族ですけど、36歳ですので」

ラシエルの思考は数秒停止した。

ラルフたちの年齢を聞いていたはずなのに、魔族の寿命が人より長いことを忘れていたのだ。

「え? そうなの?」

「ならやっぱり敬語はなしに」

「それはダメです。」

ラシエルはお客様で私は使用人ですし……魔族の世界では弱い者が強い者に敬意を払うのは当然のことなのですから」

「ごめん。お世話になってるのに困らせて」

ネリーの表情が沈む。一瞬彼女が見せた暗い虚ろな瞳を目にしてラシエルは言葉に詰まった。力が全てを決める魔族の世界でネリーは酷い目にあってきたのかもしれない。

ラシエルの様子を見たネリーは慌てる。彼女としては自分が困るよりもラシエルを困らせることの方が問題だ。

「ラシエル様は私のような無力な存在にも対等に接しようとして下さる。」

それだけで十分過ぎるぐらいですよ」

本音だった。奴隷同然だったこともある彼女にとってラシエルのような人物に仕える機会を持てたことは幸運だった。たとえそれが一時のものであったとしても。

「アルトウルさんは？」

彼も魔族にしては優しいと思うけど」

ラシエルとしては気を利かせて話題を変えたつもりだったのだろう。だが、その何気ない質問にネリーは頭色を変えた。

「え……フィンク様ですか……そう、ですね。」

とても気配りをなさる方だと思います」

様子がおかしいネリーにラシエルは首をかしげたものの理由を追求してはこなかった。

「そうよね。私も気を使ってもらって……迷惑をかけていないかな」

「それはありませんよ。」

その……フィンク様は、ラシエル様に……友好的ですし。」

私、昼食の準備をしてきますね」

「優しいいい子ですね」

「ええ、彼女みたいな魔族に出会えて嬉しい。」

ところでドゥーガルはいくつなの？」

「いくつとは？ ああ、年齢ですね。」

実はよく分からないのですよ。」

我々には生きた年数を数える習慣がありませんし、普段は人里から離れた森で暮らしていましたから。」

魔族の統一戦争を知っているので生まれてから半世紀以上は経って

いるはずですが」

「そう」

年月に対する感覚がおかしくなりそうだった。ラルフたちよりもドゥーガルの方が落ち着いているようにも見えるが単に種族の性質なのかもしれない。

「ラシエル、気になっていたのですが……フィンク殿と親しくし過ぎるのは止めた方がいいと思います」

ラシエルはドゥーガルの言葉に少し驚いた。彼は慎重な性格をしていて助言を沢山してくれるが、基本的にあらゆる判断をラシエル本人に任せているからだ。

ラシエルにはアルトゥルが敵だとは思えなかったが、彼と関わることでいらぬ敵を作るかもしれない。

「そう言われてみれば……ちよつと凶々しかったかも。気をつけるわ。無駄に敵も作りたくないし」

「いえ、そういうことではなく」

ドゥーガルは理由を説明しようとしたが、途中でやめた。誰かが近づいてくる気配がしたからだ。

「ラシエル、話の続きはまた後ほど」

魔族を警戒しているのかただ単に苦手なのかドゥーガルは殆ど魔族たちと接しようとしなない。

ドゥーガルが姿を消した離宮の庭に入ってきたのは、狙ったかのようにアルトゥルだった。いつになく機嫌のよさそうな彼にラシエルはほっとした。会話を聞かれてはいなかったらしい。

「ラシエル様、いい知らせがありましたよ!」

「いい知らせ?」

「エレボス公爵がこちらへ向かっているそうです」

「脱獄しちゃったんですか?」

自分も同じことをしたが……脱獄したのは不味いのではないだろ

うか。

「そのようです。
良かったですね」

ラシエルは、純粹に喜んでいるアルトゥルに否定的なことをいうのは気が進まなかった。しかし、彼の場合は戦争になってもかまわないだけかもしれない。そう思うと少し彼の笑顔が怖く見えて、ラシエルは思わず後ずさる。

その拍子にラシエルの髪は背後にあつた薔薇の棘に引っかかってしまった。ラシエルの拒絶した態度にも怯む様子はなくアルトゥルは距離を詰めた。

「動かないで下さい。私が外します。

本当にこの薔薇と同じ色の髪なのですね。
触れてもかまいませんか？」

「……どうぞ」

抵抗はあつたが、断る理由もない。アルトゥルは親切で言っているのだから。

嬉しそうに髪に触れ、なぜか切なそうに目を細めるアルトゥルにラシエルは一瞬息を止めた。ルドルフもラシエルを大切に扱ってくれるが、これはまた違う気がした。

「少し……残念でもありませんね。
エレボス公爵がお戻りになれば、もう、こうして貴女に触れることができなくなる」

そういつてアルトゥルはラシエルの髪に口付けた。

赤く染まった日常

アルマは神殿前の階段に腰掛けて休憩していた。見回りはただ疲れただけで、小さな情報一つ手に入らなかった。ここ数週間、仮面の魔術師が何かをした気配はない。ラルフたちが脱走してもうもう一週間ほど経つ。捕まったという話は聞かないが無事にラシエルたちと合流できただろうか？

アマーリエには連絡手段がないことを責められ、拳句の果てにはなぜついていかなかったのかと罵られた。アルマも分かっている。妹が自分の失態に苛立っていて混乱気味だったことは。それでも気になってしまふのは、自分でもついて行きたい思いがあったからだろう。

聖騎士になって家から切り離されたはずなのに、結局それは形式だけのこと。アルマが神殿やエイレネを裏切ったと知れば実家にもあらぬ疑いがかかってしまう。魂約者のラーナは彼にラシエルを守れと言ったが、これではとても無理だ。

アウロラにいるラシエルの両親を保護できたのは運が良かった。ラシエルと接触がないか監視するという名目でのことなので軟禁状態だが、命をとられるよりはいいだろう。アウロラがリベリウス家の領内にあって助かった。ただ、アルマやアマーリエの父親がここまで協力してくれるかは疑問だ。悪い人ではないのだが身内に被害が及ぶ事態になれば、放り出すだろう。いつそ神殿で保護するという手段に出たほうがいいかもしれない。

「ラシエルどうしてるかな。」

俺は細かいことを考えるのは嫌いだっていうのに……
さて、頭の痛くなるところで巡るか」

ダリウスとマティアスについて調べるため書庫とラーナの元へ行

こうと立ち上がる。

あまり好きでない活字や意味不明なことを言い出すラーナと向かい合わないといけないと思うと気が重い。これもエウノミアとしてクリアしなければいけない試練なのだろうか？

しかし、デウスノミアに与えられた試練に比べればなんと軽いことだろう。アルマは照りつける太陽を忌々しそうに見上げて溜め息を吐いてから神殿の中へ入っていった。

エイレネとクラウディウスの国境付近を旅する一行があった。とは言ってもめくらしで姿を消しているので周囲から見えることはない。先日パクスの地下牢から抜け出したラルフたちだ。ダリウスの弟子だという少年はもう同行していない。聖都を出てすぐに別れた。

「アレウスもよくやるよねえ。」

いいのかな、こんなことしちゃって。ばれたらエイレネと戦争になるよ。

まあ、僕には関係ないけど」

クラウスの手にはきらきら光る大きな鱗が乗っている。海神の鱗と呼ばれるイノ家の家宝だ。本当に海の神ネレウスの鱗だという説もあるこれは魔力を感知する魔術を遮ることができる魔道具である。それをアレウスはネレイドの使者に持たせていた。国境を越える際に使えという。

「ハルモニア軍には戦闘馬鹿しかいないんだろう」

ラルフも戦争が起きれば面倒だとは思っていたが、それだけだっ

た。

「ラシエルにも護衛をつけてくれたらしいですからね。

それでも心配ですが」

クラウスが驚いて振り替える。

「ハインにしては優しいよね。牢屋生活が続いて変になっちゃったとか？」

「クラウディウスの城がどんなところかあなたは知っているでしょう？」

あの方は確実にラシエルの味方でしょうが、他は信用できたものじゃない」

あの方とはもちろんルドルフのことだった。既に死者である彼はラシエルを護るといふ契約のためだけにこの世に存在している。裏切ることはあり得なかった。

「あー、ラルフ様って信奉者も多かったけど、敵も多かったからなあ。

まあ、敬愛する相手にも憎悪を向けて蹴落とすに掛かるのが魔族つてもんだけど。

いい加減諦めればいいのに色々仕掛けてくるのもいたよね。

そういう奴がもうラシエルに近づいていたりして」

クラウスの口にした不吉な予感に三人は沈黙したまま国境を越えた。

咽返るようなニクスメイディの香りは血の臭いに似ている。幼いラシエルがそれに気付いたのはその時だった。

勝手に外に出てはいけなさと分かっていたけれど、庭で物音がすれば興味がわく。窓からこっそり庭へ出たラシエルが目にしたのは真っ赤に染まった人形だった。いや、血が流れているから生きていたのだろう。でも今は壊れた人形のようにバラバラになってしまっていて、ピクリとも動かない。悲鳴は出なかった。あまりに驚きすぎたためだ。

「ああ……」

ラシエルの呻き声に死体の横に立っていた男が振り返る。ラシエルは彼を知っていた。以前ルドルフに紹介されたことがあったからだ。いつもルドルフの側にいるジークヴァルトという人だ。

「おや、ラシエル様、また一人で部屋から出たのですか……」

男は手にした剣から血が滴っているのも気にすることなくラシエルに微笑みかけてくる。ラシエルを傷つけるつもりはないようだが、なんだか怖い。

「また陛下に叱られてしまいますよ。私がお部屋にお連れしましょうか？」

ラシエルは顔を激しく横に振った。髪が乱れるがそんなことを気にしている場合ではないと彼女の本能が告げていた。

慌てて建物に入っていく少女の背中を冷たい緑の瞳が見つめていた。

クラウディウス城の昼間は静かだ。起きている者もいるが、わざわざ騒ぐ者はいない。高い魔力を持つ者が多いこの城内で彼らの眠りを妨げる行為は命に関わるからだ。

今のところエイレネがクラウディウスに罪人の引き渡しを要求する気配はない。疑いは抱いているが今の状態で軽はずみな外交はできないということなのだろう。それでも、数では圧倒的有利な立場にあるのはエイレネの方だ。

休戦が終わるかもしれない。ラシエルの胸中で不安と恐怖が膨ら

んでいく。自分たちのせいだけではないとはいえ、切欠にはなってしまう。ラルフと再会できるのは嬉しいが、これからのことを思うと頭痛がした。

クラウディウス側はどう考えているのだろうか？ ディートリヒは今のところ親切にしてくれるが……真意は分からない。魔族たちが何を考えているのか気になるラシエルにとって、情報源はネリーとアルトウルだけだった。会うことが許されているのがその二人だけだったからだ。結果として、ラシエルはアルトウルと距離を取れないでいる。

今日も夕食後はアルトウルと書庫に行く予定だ。

夕食を終えたラシエルの前に紅茶が出される。ラシエルのために人間の料理や飲料をわざわざ用意してくれているらしい。最初に気付いたのは紅茶を見たときだった。ラルフは人間のお茶になじみがないと言っていたからだ。

「一体誰が調理を？」

「私です。お口に合いませんでしたか？」

意外な返答にラシエルは驚いた。

「いいえ、美味しいから大丈夫。」

ありがとう。ネリーが用意してくれているとは思わなかった」

「いえいえ、美味しいと言ってもらえて公栄です。」

以前知り合った人間に教えてもらったんですよ。

私もこちらの料理よりエイレネやクリユメノスの料理の方が好きで

……」

「その方は今もこちらに？」

ラシエルにとっては何気ない問だったが、ネリーはすぐに返答しなかった。

「……もういらっしやいません」

「ごめんなさい。余計なことを」

「お気になさらないで下さい。」

ここでは知り合いが亡くなることなんて日常茶飯事ですから……
そんなことで一々シヨックを受ける私が変わなんです」

「変じゃないよ。料理を教えてもらったんだから、仲が良かったんでしょ？」

変だなんて……誰に言われたの？」

誰かが目の前の優しい女性を傷つけるようなことを言った。ラシエルには許せないことであると同時に悲しいことだった。

魔族は危険な種族だと聞いていたが、ラルフたちと過ごす内に考えが変わってきていた。そんな彼らは自分たちが変わり者だと言った。ネリーの話が事実なら、ラルフたちが変わり者だというのは事実なのだろう。

ネリーはただ首を静かに振った。

「いいんです。」

魔族として変わっているのは事実ですし……ラシエル様にそういつていただけただけで。

そろそろ……フィンク様がいらっしやいますね。私はこれで」

「ネリーってアルトウルさんの名前呼ぶ時っていつもつまるよね。」

もしかしてアルトウルさんのことが好きだとか？」

「ひっ……まさか！ ご、誤解です。」

そんな恐れ多い」

ラシエルは自分の迂闊さに呆れた。どうもネリーにとって地雷ともいえる質問ばかりを選んでしてしまうらしい。それにしても、顔を真っ青にして部屋を出て行ったネリーのことが気になった。恋ではないようだが、過剰に意識はしているように見える。では、その感情とは何だろう？

今朝の夢の内容ははつきり思い出せなかった。なのに、ラシエルの目の前にはそれが再現されたような光景が広がっている。

アルトウルが来るのが遅かったので、庭のほうで物音がした際ラシエルはついそちらへ顔を出した。

ラシエルが予想していた通りアルトウルは庭にいた。ただし、いつもと変わらぬ微笑と不釣り合いな血に塗れた剣を手にした状態で。

「アルトウル……さん、あの……これは一体……」

ラシエルも死体を見たことはある。自分に危害を加えようとした相手を葬ったことすらある。だからといって見慣れているわけではないし、慣れたいとも思っていないかった。

「ここに来る許可を得ている者ではなかったのだから」

「何も殺すことは」

侵入者はそんなに危険で極悪な人物だったのだろうか？ もしくはアルトウルに攻撃を仕掛けたのか？ そうでないならあまりに厳しい処罰だ。

「あなたはもう少し危機感を持つべきです。」

あなたは命を狙われても仕方ない立場なのですから」

「うあつ……ラ……シエル……さま」

死体とアルトウルに気を取られていたラシエルはその場にいたもう一人の存在に気付くのが遅れた。アルトウルの足元で蹲っている人物がいたのだ。全身血塗れで誰なのか判別し難いが、間違いなくネリーだった。

「ネリー！？」

駆け寄るラシエルからネリーは逃れようとする。怪我でまともに動けない状態だというのにラシエルが血で汚れるのを心配しているようだった。

「ああ、忘れていました。」

ネリー、なぜ私の邪魔をした？

もう少しで手加減を忘れてしまつところだったじゃないか」

このような状況でもアルトウルはラシエルには怖いぐらい穏やかに接していた。しかし、ネリーに対する彼の態度はどこか冷ややかだ。

「ラシエル様は……フィンク様のことを……信頼していらっしやいました。

こんな……あなたをお見せしたくなかつた」
「なるほど。」

だが、その様子だと私の信用を守ろうとしたというよりは、ラシエル様のためのようだ。

まったくさすがはデユスノミアというべきかな……
この反抗的な下僕をこつも短期間で懐かせるとは」

アルトウルの口にする内容よりも彼が以前と変わらず優しそうな微笑を浮かべていることの方が衝撃的だった。彼にとつては目の前の事態は異常なことではないのだろう。ネリーがアルトウルに向けていた感情は……恐怖だったのだ。

シヨックで動けずにいるラシエルにセシリアが声をかけた。ラシエルの叫び声を聞きつけてやってきたらしい。

「ラシエル、私がネリーの手当てをしましょう」

セシリアは特にアルトウルの様子に驚いておらず平然としている。後から現れたドゥーガルはネリーを見て悲しそうな顔はしたもののアルトウルに対しては同様の反応しか見せなかつた。二人ともアルトウルの本質に気付いていたのだろう。

「セシリアさん、お願いします」

セシリアは無表情のまま頷いた。抱きかかえていたネリーをセシリアの腕に引き渡す。動揺している今のラシエルでは手当ての邪魔にしかならない。

ラシエルが再びアルトウルへ視線を戻した。剣はすでに鞘にしま

われていた。

「放っておいてもすぐに治りますよ。」

彼女は丈夫だけが取柄ですから」

「なんでネリーに怪我を負わせたんですか!？」

アルトウルは面倒臭そうに溜め息を吐く。

「ネリーは私の魂約者で下僕です。」

彼女をどうしようとする私の勝手でしよう?」

「いいわけないでしょう!？」

「なぜです?」

魔族は主となつた方がもう一方の魂約者を所有する。

彼女の所有者は私だ。私は彼女の言動に責任を持たなければならぬ。

その代わり、私は彼女を好きにしている権利を有するのですよ」

魔族が魂約者とは主従関係になる。ラルフはラシエルにそう言うて下僕になることを希望した。彼があまりに気軽に言っていたのでラシエルは魔族が自らの僕にどんな扱いをしているのか深く考えたこともなかった。緋耀は言っていたはずだ。魔族が皆、魂約者を大事にすると思つたら大間違い、だと。

ラシエルに近づいてくるアルトウルの笑みが嘲るようなものになる。

「ああ、あなたはエレボス公爵に可愛がられているのでしたね。」

己以外は塵芥の如く扱うあの方を籠絡するとは……どんな手を使われたのです?」

ラシエルは思わず彼の頬を叩いていた。彼女にしては珍しい行動だったが、それだけ彼の一連の言動に怒りを覚えたのだ。

「私が知っているのは私と一緒にいるラルフだけ。だから、あなたのいうラルフを否定する気はない。」

でもね、私と彼の関係を勝手に邪推して侮辱するのはやめてちょうだい。

あなたがネリーにしたことを私は許せないわ。

なぜなら私はネリーのことが好きだからよ」

目の前にいる魔族が自分より強いだろうということはずっかりラシエルの頭の中から飛んでいた。

「意外と……乱暴なのですね」

呆然としたままアルトウルが咳く。

「謝らないわよ。」

ネリーはもつと痛かったんだから、今度は殴ってもいいぐらい」

殴るような動作をして自分を睨むラシエルを眺めていたアルトウルの肩が震えた。

「くっ……ははは……」

あなた魔術師でしょう？

なのに攻撃するのに呪文の前に手が出るんですね」

「ま、魔術は苦手なんですよ。」

暴発してアルトウルさんに酷い怪我を負わせたことはありません」

ラシエルにとって爆笑するアルトウルを見るのは不思議な感じだった。彼はいつも控えめに微笑んでいるイメージだったからだ。今回のネリーの怪我で印象が悪くなっていたが、本気で笑っているらしい彼を見ていると怒りが薄れていく。

「私も舐められたものだ……」

それに随分と甘いのですね。私を傷つけたくないなど」

「アルトウルさんって酷いことする時も悪気はないでしょう？」

だから、私は単純にあなたが優しい人だと勘違いしてたんですけど

……

でも、そういう人って裏表がないから、親切にしてくれている時も全部が嘘なわけじゃないと思うんです。

ネリーを傷つけるあなたは冷たい目をしていただけで、私と一緒に笑っているときの目は暖かったから……」

「私があなたに取り入るために優しくしていたとは思わないのですか？」

「だったら、それに気付かなかった私も悪いんです」

「私の方こそあなたを甘く見ていたのかもかもしれませんね。」

「……これからも親しくさせていただけいても？」

「ええ、できれば友好的な関係を続けられると嬉しいです。」

今後一切ネリーを傷つけないと約束してくれるならですが」

「難しいことをいう。」

私は別にネリーを痛めつけることが目的なわけではなく、単に躡けているつもりなのですがね」

ラシエルは無言でアルトウルを見つめている。それは睨んでいるというよりも穏やかに見守っているともいえるような表情だった。

アルトウルは自嘲するような笑みの後に瞼を閉じて困ったように溜め息を吐いた。

「分かりました。以後気をつけますよ。」

書庫へ行くのは延期にしましょう。」

私はもう自室へ戻ります」

「……ネリーの様子は見ていかないんですか？」

「もうお気づきでしょうが、私は彼女に怖がられていますので遠慮しておきますよ。」

なぜ今頃になってあなたは私の前に現れたのでしょうか……」

「アルトウルさん？」

ラシエルには、今のアルトウルの微笑がいつもと違って泣くのを我慢しているかのように見えた。

安らぎの在り処

黒髪の少年が薔薇の茂みに身を潜ませて進んだ先にあったのは真っ白な建物だった。城とは違う建築様式で造られているそれは彼にも綺麗に見えた。

真昼の陽光を照り返す壁は眩しいほどで近づくのをためらわせる。それでも彼はこの建物に興味があった。否、正確にはそこに住む人物に。

夕暮れの空のような美しい紫色の髪。微弱でありながら心惹かれる魔力を持つ幼子。

初めて見たのは彼女が人間の魔術師たちに手を引かれてこの城にやってきた時だった。不安そうな表情がルドルフの前で一気に安らかな微笑に変わったのをはつきり覚えている。

そう、まさに今目の前にあるような……

「あなたはだれ？」

眠りをさまたげられた少女は目元をこすりながら少年に問いかけた。

「……僕はディー。」

君はラシエルだね？ お話してもいい」

「え……」

ラシエルはルドルフとの約束を思い出していた。ここには彼とジークヴァルトしか近寄れず、また他の人と会っても話をしてはいけないと言われている。

「大丈夫だよ。」

僕と会ったことは二人だけの秘密にしておけばいい」

「ひみつ？」

「秘密にしてくれれば、僕はここから君を好きなところに連れて行

ってあげられる」

「ルドルフはここからできるときけんだって言ってたよ」

ラシエルは少年の言葉に興味をひかれた様子だったが、すぐに不安そうな表情になった。少年は紫の瞳が揺れる様に見とれた。

「僕が守ってあげる。これでも僕は強いんだ」

「うん。それはわかるよ。」

でも……」

魔力に敏感な少女にとって、目の前の魔族の少年が強力な魔力の持ち主であることはすぐに分かった。自分に敵意を持っていないことも。ルドルフ以外の人と会話するのも久しぶりだ。話すのは嫌ではなかった。ルドルフとの約束がなれればここまで渋らなかつただろう。

「僕は君と友達になりたいんだ。嫌かい？」

「ううん。そんなことない。」

……わかった。ひみつにする」

慌ててラシエルは少年の提案を受け入れた。ここで拒否すれば、もう彼に会えないと思ったからだ。

「ありがとう」

微笑む彼に少女もまた笑顔を返した。

デイーと名乗った少年は三日に一度ほどの頻度でラシエルのもとを訪れた。二百年以上生きた彼にとって少女の相手は楽しいことばかりではなかった。生きた年数だけでなく種族も違う。

だが、少女は彼の力を認めてくれる上に容姿を貶したりしない。兄たちと比べたりもしないのだ。

デイトリヒは自嘲の笑みを漏らした。自分の考えが滑稽に思えたからだ。彼は体が成長しないように内面も未成熟だ。そう素直に受け入れることができるようになったのは少女のおかげかもしれない。

遠い日の記憶に思いをはせ青年は柔らかい微笑を浮かべる。この十年で二百年近くも止まっていた時は動き出し、少年から青年へと成長していた。

窓の外を見れば、外がほんのり紫色に染まっていた。はっきりと確認できないがそろそろ日が沈む時刻だ。

霧の向こうには緋色と紫色に染まった空が広がっているのだろう。日が暮れる前には少女と別れなければいけない。だから二人で共に日暮れの時刻を迎える機会は一度としてなかった。共に過ごすのはいつも正午前後。

先日再会したラシエルには幼い頃の面影があった。彼女が自分のことを覚えていなくても特にショックは受けなかった。ラシエルが彼女らしく生きてくれてさえいればそれでいい。

真夜中に目覚めたラシエルは、窓から庭を眺めていた。月の光が降り注ぐ庭園は昼とはまた違う空間に見える。

外に出ようとしたりラシエルは入り口で立ち止まった。

霧が出てきたからだ。月光を阻み数歩先すら判別不可能にするような濃い霧。この国では珍しくないそれがラシエルには忌々しかった。

『ラシエル、また眠れないのですか？』

白く霞む庭から黒い影が近づいてくる。バイコーンのドゥーガルだった。

優雅な足取りと優しい目に相変わらず魔獣らしさはない。ただ鋼色をした二本の角が一角獣の時とは違う雰囲気魔力を放っていた。
「ええ。」

ドゥーガルは知っていたのね……アルトウルさんのこと」

ドゥーガルの耳がぴくりと動く。困ったようにドゥーガルは項垂れた。

『私は負の感情と血の臭いには敏感ですからね。』

彼はあなたに敵意を持っていませんでしたが、血の臭いは常にまとっていました」

「ドゥーガルが警告してくれた後に私が理由を気にしていればよかったわね」

「いえ……結果的には良かったのかもしれませんが」

獣から人の姿に変わったドゥーガルはラシエルを部屋の中へ促す。

「ネリーの怪我は明日にはよくなるでしょう。」

あなたが気に病むことはありません」

「でも」

「あなたの魔力は闇を引き寄せる。その闇が深ければ深いほど……フィンク殿を遠ざけようとすれば、今回よりもっと悲しい結末を迎えていたかもしれない。」

適度な距離を保てば心強い味方とすることもできるでしょう。

過ぎたことよりも今後どうするかの方が重要です」

「闇を引き寄せる？」

魔族の負の感情を喪失させる。そうラルフは言っていた。

ラシエルの力が魔力が強い存在である魔族の精神面に影響を与えらるというのだろうか？

「夜は時に安らぎを与え、時に狂気を呼ぶ。」

デウスノミアと呼ばれた女性たちはあの方の祝福を身にまとっています。

彼女たちが争いの元となったのはそれが原因です。

今のところ、あなたの力は安らぎの方に働いているようですが」

「またニユクスなの……」

ラシエルは頭をかかえて椅子に腰掛けた。ドゥーガルは続ける。

「それを望んだのは彼女たち自身でした。」

あの方は力の使い方は彼女たちに委ねている。

ある少女は愛情に飢えていた。ある女性は戦う力を求めた。

願いは叶えられましたが、与えられた現実には彼女たちが望んだものではなかった。それだけのことです」

「……怖くなってくるわね。」

私が今みたいな状況に陥っているのも、強力な魔術師になりたいという願いが原因だったこと？

冗談じゃない」

「それは……どうでしょう。」

マティアス・クレメントの正体と狙いが見えてこないのでは何とも言えませんが」

ラシエルに背を向けて話していたドゥーガルが振り返る。手に持つティーカップをラシエルに差し出す。微かに加えられたハーブの香りが安らぎを誘う紅茶だった。

「これを飲んでお休みなさい。」

今後の為に」

「ありがとう」

馴染みのある薔薇とは違う香りが今宵は良い夢を見せてくれる。

そう願ってラシエルは紅茶を飲み干した。

霧の晴れた庭に出たラシエルは朝の散歩をすることにした。この離れにある庭だけでも考え事をしながら歩くには十分な広さがある。

紫系の色をした薔薇ばかりを集めた光景は美しい。ニユクスメイデイだけではく淡い色合いの薔薇も混じっているのもラシエルにとっては嬉しかった。

ラシエルの髪を風が揺らす。髪を軽くまとめただけにしておいたのは迂闊だった。薔薇に囚われた髪を見つめ 薔薇の棘に引っかかった髪は取れたが、縛っていたリボンが解けてしまっている。髪を結びなおそうとするラシエルだったが、ある物が目に入り固まってしまう。彼女が見たのは髪にくっついた毛虫だった。

「あつ……確かこれ毒が」

虫が嫌いではないラシエルだが、毒のある虫は別だ。できれば直接接触せずに速やかに遠ざけたい。

ラシエルは近くに毛虫を払えるような物がないかと探す。魔術でどうにかできればいいのだが、ラシエルがやると毛虫だけでなく自分の髪や薔薇にも危険が及ぶ可能性が高い。

髪をゆすつて落とそうとするも今度は服にくっ付いてしまった。

「もうっ！ 登ってこないでよ！」

自分一人では虫一匹相手ですら対処できないのだろうか。ラシエルは悲しくなった。

「何かありましたか？」

慌てるラシエルの声を聞きつけたのかアルトウルが薔薇の影から姿を現した。彼は昨日までとは違いやや控えめな微笑を浮かべている。

「ああ、これですね。ほら、もう取れましたよ。

髪が乱れてしまつて……また引っかけたのですか？

気をつけなければあなたの肌や髪を傷めてしまいますよ」

アルトウルは魔術を用いて毛虫を宙に浮かべたまま焼きつくした。しかも、ラシエルの手からリボンを奪うと彼女の髪をまとめ始めた。意外と器用なのか慣れているのか、その動作に迷いはない。まさか髪をくくつてくれるとは思わなかったラシエルは戸惑う。しかし、ラシエルは彼の行動があまりに自然だったため断り損ねてしまった。

「ありがとう。

ちよつとの傷ぐらいなんてことないわ。毒がある虫は遠慮したいけど」

魔術師は薬を作ることもある。薬品や魔術の訓練で手が荒れたり傷だらけになるのはラシエルにとって慣れたことだった。

「あなたに傷ができるエレボス公爵も嫌がるでしょう？」

それに私も嫌です」

リボンから手を離して後もアルトウルは彼女の髪に触れたままだ。アルトウルがラシエルの髪を触っているほうとは違う手も彼女に向かつて伸ばす。しかし、ラシエルが逃げようとする前に何者かがアルトウルの手を払いのけた。

「アルトウル……悪ふざけが過ぎるぞ」

いつも通りの気だるそうな声に負の感情は特に籠っていない。ラルフはそれでもやや乱暴にラシエルを背後から抱き寄せた。

本の数秒だったが三人は沈黙した。

沈黙を破ったのはラシエルより早く現状を理解したアルトウルだった。

「申し訳ありません。あまりに……美しい髪だったものですから」
跪いて謝罪の言葉を述べたアルトウルは名残惜しそうな視線をラシエルに向ける。

「ラルフ様、お帰りなさいませ。ご帰還お待ちしておりました」

ラルフは地位や階級を面倒なものと据えている。ラルフの側で仕えたことのある者が直接彼を殿下や公爵と呼ぶことはなかった。

「貴様の挨拶など不要だ。下がれ」

ラシエルはアルトウルの背中を見送り、耳に馴染んだ声の主の顔を見上げた。目の前にいるというのに、未だ実感が湧かない。そもそも、彼はどこから湧いて出たのだろうか？

「ラルフ……いきなりどうして？」

「クラウディウスの結界内に入っていたから召喚できたんだろう。俺はお前の魂約者だ。慣れれば召喚の手順など省いても呼び出せる。お前でもそれは例外ではなかったようだ。よかったな。」

アルトウルに何をされそうになった？

「え？ アルトウルさんは、私の髪についた毛虫を取ってくれただけ。」

確かに……毛虫が離れてくれなかったから、助けが来ればいいなって思ったけど……

でも、ほんのちよつとだけよ」

ラルフは呆れたように溜め息をついた。

魂約者が側にいる。それだけで、こんなに安心できるものだとは思わなかった。ラシエルは何から話すべきか悩んだ後に微笑んだ。

「おかえりなさい」

「ああ……」

ラルフの口が小さく動く。何を言ったのか聞き取れなかったラシエルは首をかしげる。彼は再度その言葉を口にするのではなく、ただラシエルを抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893k/>

デュスノミア

2010年10月8日11時24分発行